

三重県斎宮跡調査事務所年報1987

史 跡 斎 宮 跡

発掘調査概報

昭和63年3月

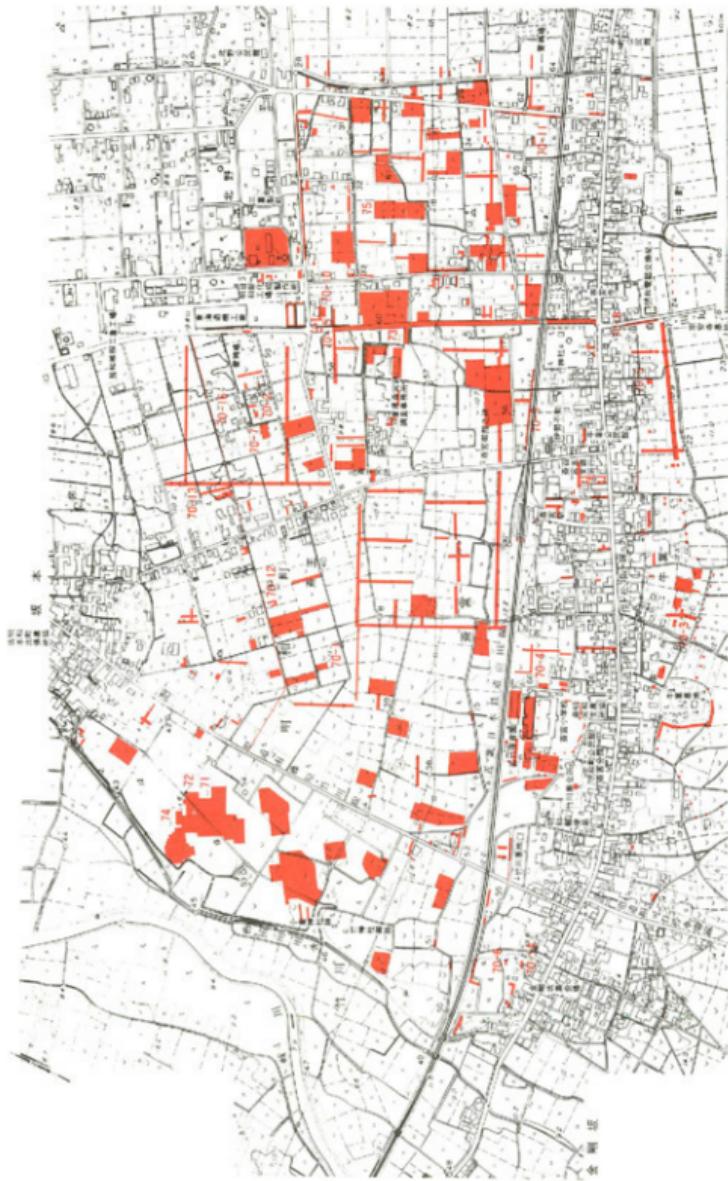
三重県教育委員会

三重県斎宮跡調査事務所



史跡環境整備事業（西から）

昭和62年度発掘調査地区



はじめに

140haという広大な面積をもつ史跡斎宮跡にとって、遺跡究明のための調査と、これを将来に伝える保護・保存の諸事業、そして今日的にいかに活用するか。この三者が、地域住民の現代の生活との調和のもとに進められねばならないことは言うまでもありません。

斎宮跡は、今年で、国の史跡に指定されて9年目を迎えます。これら諸事業が、地域住民のみなさま方の理解と協力により、少しずつではありますが、前進していることを心から感謝している次第です。

今年度の当事務所の諸事業をふりかえりますと、調査活動の基幹をなす発掘調査も、昨年に引き続き、第2種保存地区と、博物館建設予定地でおこない、近く整備される斎宮駅西から博物館へのアプローチ道であるいわゆる古道沿いに小規模ながら塚山地区史跡公園を修景いたしました。

以上の諸事業のほか、斎宮歴史博物館（仮称）の建設事業も、正月すぎからいよいよ本体工事が開始されました。これから昭和64年秋の開館までの短い時間に、県と町が各種の関連事業をおこなう訳ですが、史跡の今日的活用に重点をおき、あえて史跡内にその場所を求めた折に誓った「斎宮らしさを保ち、かつ史跡を保存する」この二者を肝に命じ、進めねばと考えております。

最後になりましたが、この報告書を刊行するにあたり、指導を賜った斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、また調査と保存に御協力いただいた地元のみなさま方に心から謝意を表する次第です。

昭和63年3月

三重県斎宮跡調査事務所

所長　横　山　洋　平

目 次

I 調査の経過.....	1
II 第71次調査.....	4
III 第72次調査.....	20
IV 第73次調査.....	40
V 第74次調査.....	53
VI 第75次調査.....	57
VII 第70次調査(個人住宅新築等の現状変更緊急調査).....	69
VIII 史跡環境整備事業.....	79
IX 調査事務所要覧.....	83

例 言

1. 本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和62年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第VII章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は、斎宮跡調査事務所が担当した。報告書については、別に明和町が発行している。
3. 遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分については、「斎宮跡の土師器(1984年、年報)」による。
5. 遺構標示記号は次の通りである。
SB;建物 SK;土塙 SD;溝 SE;井戸 SA;堀 SF;道路 SX;その他
6. 斎宮跡の調査全般については、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞藏氏、楳山女学園大学名誉教授久徳高文氏、国文化財保護審議会専門委員坪井清足氏、京都府立大学学長門脇禎二氏、名古屋大学教授檜崎彰一氏、名古屋大学教授早川庄八氏、皇學館大学助教授渡辺寛氏、三重大学助教授北原理雄氏の指導を得た。
7. 本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、横山洋平、山沢義貴、田坂仁、泉雄二、上村安生があたり、刀根やよい、坂真弓美、上田真登、松田早苗、中桐真紀がこれに協力した。

I 調査の経過

昭和62年度の計画調査は、通称中町裏の第2種保存地区の昭和64年度見直しに対応するための第73次・第75次調査、斎宮歴史博物館（仮称）に伴う第71次・第72次・第74次調査の5次に分けて実施した。

第71次調査は、昨年おこなった第68次調査区の北側で5月から7月にかけて実施した。この調査においても、過去数次にわたる調査と同様、飛鳥時代後期から奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物と、鎌倉時代の井戸、溝をはじめ、弥生時代の方形周溝も検出した。特殊な出土遺物としては、斎宮跡では5点目にあたる三彩陶器小壺のほか、縁釉陶器1点、墨書き土器、鉄製紡錘車も出土した。

第72次調査は、第71次調査の北側と南西側で2ヶ所に分け7月から10月にかけて実施した。南側の第71次調査と類似するが、特殊な遺構としては、弥生時代の方形周溝が4基まとまつて検出されたこと、これまで、古里地区では見つかっていない平安時代前期の掘立柱建物が検出された点があげられる。また、鎌倉時代の多数の斜溝と、フイゴの羽口、スラグを伴う鍛冶作業場と考えられる竪穴住居も検出された。また、南西部の第72-2次調査では、弥生時代の方形周溝3基のほか、奈良時代前期のいわゆる溝持ちの柱掘形をもつ掘立柱建物（4間×2間）も検出した。なお、第72次調査では、博物館周辺の史跡環境整備事業の資料を得ることを目的として、塚山1号墳・2号墳の墳型と規模を明らかにするトレンチ調査も実施し、前者が21mの円墳、後者が一辺18mの方墳と判明した。

第73次調査は、通称中町裏のなかでも北西部にあたる調査事務所東側で9月から11月まで実施した。今回の調査地は第51次と第61次に接しており、合わせると6,000m²をまとめて明らかにすることができた。検出した遺構には、北と西の区画溝に囲まれた一画に奈良時代末期から平安時代後期の掘立柱建物25棟がある。こうした建物には奈良時代末期から平安時代初期、平安時代前II期、平安時代中期、平安時代後期の4期に建物の方位に変化があらわれることが明らかになった。遺物としては奈良時代の瓦片16点、縁釉陶器24点が注目される。

第74次調査は、博物館建設予定地の一連の調査の最終として5ヶ所にわたる小地区的調査であった。10月から12月にかけて実施した。これまで検出した遺構と連続するものである。

第75次調査は、中町裏中央北部の西加座地区で今年度最後の調査として12月から3月まで実施した。検出した遺構は平安時代前期の掘立柱建物が大半をしめるが、奈良時代後期から平安時代後期の掘立柱建物も検出した。出土遺物の中で特に注目されるものとして「水司」と書かれた墨書き土器があり、宮城北端部で発見した「水司鴨□」とあわせて2例目となった。

現状変更に伴う緊急調査は、鉄道保全柵、県道拡幅、町道拡幅の3件については原因者負担の調査であり、他の13件は個人住宅、農業用倉庫、盛土等に伴うもので調査面積は総計2,854m²である。このなかで、史跡指定地南辺の字木葉山地区で実施した第70-3次調査では、奈良時代末期から平安時代前期の大型掘立柱建物を3棟検出した。

史跡環境整備事業は、博物館周辺の整備事業の一環として、いわゆる古道沿いの字木葉山地区において実施した。当地は昭和55年度の計画調査で発掘済みであり、掘立柱建物3棟を藤棚と花壇で遺構表示した。南面する古道部分については斎宮駅からのアプローチ道として、昭和64年秋の開館までに整備されることとなっている。

一方、斎宮歴史博物館（仮称）建設については、年末までに実施設計が完了し、年明け1月から建設工事が開始された。現在、遺構保全のためのいわゆる『ベタ基礎』工法による巨大な地中梁が作られている。

また、例年夏休みにおこなう斎宮跡保存啓発事業の一つである体験発掘は下御糸小学校6年生を対象に第72次調査現場で実施した。

恒例の秋の斎宮跡講演会には、平安博物館長角田文衡氏に「斎内親王のことども」と題して、ご講演いただいた。このほか、伊勢商工会議所大ホールを会場に、国際日本文化研究センター教授中西進氏を招いて講演会（演題「大伯皇女を想う」主催：斎宮研究会・三重社会経済研究センター）も企画した。

昭和62年度発掘調査地区一覧

調査次数	調査地区	調査面積 (m ²)	調査期間	地番・地籍	所有者	備考
70-1	6 A C C - X	176	62. 4.13～ 62. 4.24	明和町斎宮字塚山 3325-1	江崎 実	個人住宅新築 第3種保存地区
70-2	6 A E E - W	12	62. 6.22～ 62. 6.24	明和町斎宮字東殿 2875-2	岡田 周一	個人住宅新築 第3種保存地区
70-3	6 A D R - I	260	62. 6.22～ 62. 7. 2	明和町斎宮字木葉山 129-5 他	大西俊次郎	農業用倉庫新設 第3種保存地区
70-4	6 A C N - A ・ B · E · L	164	62. 8. 3～ 62. 8. 8	明和町斎宮字広頭 3389-8 他	林 輝郎	盛土 第3種保存地区
70-5	6 A E W - A	121	62.11. 9～ 62.11.17	明和町斎宮字鉢池 333-1 他	八田 秀穂	農業用倉庫新設 第4種保存地区
70-6	6 A B L - S	12	62.11.26～ 62.11.30	明和町竹川字中垣内 430-6 他	奥山 幸洋	盛土 第3種保存地区

調査次数	調査地区	調査面積 (m ²)	調査期間	地番・地籍	所有者	備考
70-7	6 A E E - T	264	62.12. 7~ 63. 1.13	明和町斎宮字楽殿 577	浅尾 柳三	盛土 第3種保存地区
70-8	6 A E U 6 A E X - A	230	63. 1.18~ 63. 2. 3	明和町斎宮字牛葉・鈴 池	三重県	県道田丸産明線改良 第3・4種保存地区
70-9	6 A E D - C · D	17	63. 2. 8~ 63. 2. 9	明和町斎宮字御館・柳 原	近鉄	保全柵新設 第3種保存地区
70-10	6 A F D - B · D	188	63. 2.10~ 63. 3. 2	明和町斎宮字西前沖 2649-4 他	大西 修	盛土 第4種保存地区
70-11	6 A G O - H	36	63. 2.22~ 63. 2.29	明和町斎宮字鍛冶山 2363-2	川合 和男	盛土 第4種保存地区
70-12	6 A D D - F · G	51	63. 2.27~ 63. 3. 2	明和町斎宮字葎林 3158	長谷川清彦	個人住宅新築・盛土 第3種保存地区
70-13	6 A E C - N · G	212	63. 3. 9~ 63. 3.25	明和町斎宮字荷千	佐藤 昭三	個人住宅新築
70-14	6 A B L - R	48	63. 3.10~ 63. 3.23	明和町竹川字中垣内 459	北岡 攻	農業用倉庫新設 第4種保存地区
70-15	6 A F D - A	76	63. 3.23~ 63. 3.30	明和町斎宮字西前沖 2644-1	山本 博志	個人住宅新築 第2種保存地区
70-16	6 A C B - A 他	987	63. 1.19~ 調査中	明和町斎宮字塚山・藻 林・荷千・花ノ木	明和町	町道塚山線拡幅 第3・4種保存地区
71	6 A B E	1,440	62. 5. 6~ 62. 6.29	明和町竹川字古里 501 他	明和町	計画的面調査 第3種保存地区
72-1	6 A B E	1,700	62. 7. 6~ 62. 9.30	明和町竹川字古里 500 他	明和町	計画的面調査 第3種保存地区
72-2	6 A B F	400		明和町竹川字古里 523 他	明和町	計画的面調査 第3種保存地区
72-3	6 A B F	200		明和町竹川字古里 551-2 他	明和町 竹川自治会	(塚山1号墳) 第1種保存地区
72-4	6 A B F			明和町竹川字古里 528-1 他	明和町 乾 行雄	(塚山2号墳) 第3種保存地区
73	6 A F F - B C · E · G	1,500	62. 9.11~ 62.11.30	明和町斎宮字西加座 2663-5 他	山本 泰 他	計画的面調査 第2種保存地区
74-1 ~ 5	6 A B E 6 A B F	790	62.10.29~ 62.12.25	明和町竹川字古里 523 他	明和町	計画的面調査 第3種保存地区
75	6 A G F - C	900	62.12. 7~ 63. 2.25	明和町斎宮字西加座 2702 他	山路 博良	計画的面調査 第2種保存地区

II 第71次調査

6 A B E (古里地区)

本年度第1回目の計画調査（第71次調査）は、5月6日から史跡西部の古里地区で東西60m、南北24mの調査区を設定して実施した。調査面積は1,440m²で現況は草生地である。この調査地は昨年度実施した第67次・68次調査の北側にあたり、これら一連の調査の主な目的は、昭和64年度開館予定の斎宮歴史博物館（仮称）を古里地区に建設するにあたり、地下遺構の状況をさぐるためのものである。

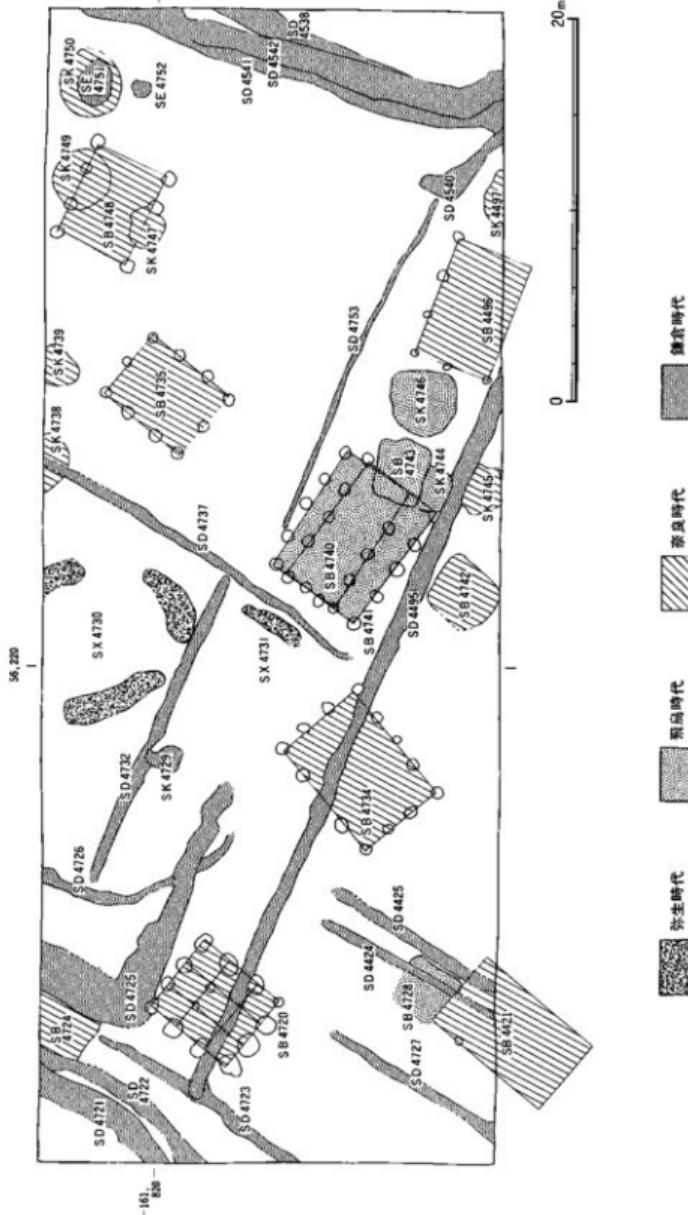
古里地区は昨年度の第67次・68次調査のほか、数次にわたる調査が実施されており奈良時代と鎌倉時代の遺構を中心に検出され、古里地区を含む一帯が成立期～奈良時代の斎宮と廃絶期の斎宮を考える上で非常に重要な地域であることが判明している。

今回の調査の結果、遺構面までの深さは、調査区西端では非常に浅く0.25m、調査区中央から東にむかって徐々に深くなっており東端では0.7mである。前回の調査では東端と西端が浅くなっている、谷筋が南西から北東に向かって存在すると考えられている。また、検出した主要な遺構には、飛鳥時代の竪穴住居2・掘立柱建物2・土塙2、奈良時代の竪穴住居2・掘立柱建物7・土塙7、鎌倉時代の井戸2・土塙1・溝等の他、弥生時代の方形周溝2も検出されている。

(I) 弥生時代の遺構

この時期の遺構は、方形周溝2がある。史跡斎宮跡ではこれまでの調査で、弥生時代の遺構は、竪穴住居3棟、方形周溝3基検出されている。竪穴住居は、県道南藤原竹川線以西の台地周縁部で検出されている。また、方形周溝は、南側の第67次調査で2基、北140mの第39次調査で1基と、すべてが古里地区に集中している。また、方形周溝の形態は、溝が続いて一周する例ではなく、今回のような四隅がとぎれるものである。

方形周溝S X4730は、調査区中央北側に位置する。東側の溝は近現代の擾乱、井戸によって壊されており、部分的にしか検出できなかった。溝の内々の径は東西6.0m、南北8.0m、溝の幅は1.5m前後、深さは0.2~0.3m。北側の溝は後述の第72次調査で検出されている。主体部は削平を受けていたため検出はできなかった。溝の埋土から出土した遺物は少ないが、南辺の溝の中央部南側で弥生時代中期の壺がほぼ完形で出土した。S X4731はS X4730の南にある幅0.8m、長さ4.0m、深さ0.15mの浅い南北溝である。この地区は後世の溝によって壊されているため他辺の溝は検出できなかった。おそらく、S X4730のような方形周溝と思われる。出土した遺物は少ないが、S X4730と同じ弥生時代中期の遺構と考えられる。



第1図 第71次造構略図 (1 : 300)

（II）飛鳥時代の遺構

この時期の遺構は竪穴住居2、掘立柱建物2、土塙2がある。出土した遺物は少ないが、7世紀後半～8世紀初頭の遺構と思われる。

掘立柱建物S B4740・4741は、調査区中央のほぼ同じ位置にある東西4間、南北2間の東西棟である。S B4740の柱間は桁行が1.8m、梁行は2.0m、棟方向は東で南に33°振れる。S B4741は桁行1.8m、梁行2.2m、棟方向は東で南に37°振れる。どちらの柱掘形も径0.6mの円形で深さ0.4m。切り合いがないため新旧関係は不明である。出土した遺物が少なく時期を決め難いが、どちらも東の妻柱が飛鳥時代後半の竪穴住居S B4743、土塙S K4744によって壊されていることや、柱穴から出土した遺物には7世紀前半の須恵器があるため、時期的にもう少し遡る可能性もある。

竪穴住居S B4728は調査区西南に位置し、近現代の擾乱、鎌倉時代の南北溝によって西半分は壊されている。南北3.0m、東西2.0m以上、深さ0.1m。S B4743は、掘立柱建物S B4740・4741と重複する位置にある。東西3.2m、南北2.6m、深さ0.4m。切り合いから掘立柱建物、および同時期の土塙S K4744より新しい。

土塙は調査区中央南の竪穴住居の周辺でS K4744・4746が検出されている。このうち、S K4746からは土師器杯・皿・甕、須恵器甕、反りの残る杯蓋と共に須恵器を模倣した土師器杯、鉄製の紡錘車・刀子の破片が出土している。

（III）奈良時代前期の遺構

竪穴住居2、掘立柱建物2、土塙5がある。竪穴住居は南の第67次・68次調査で、重複して多数検出されているが、今回の調査区では少なく、密度が薄くなってきている。

掘立柱建物には、調査区西側に位置する総柱建物S B4720、調査区東側にあるS B4735がある。これらの建物はこれまでの調査同様いずれも方向、規模に規格性が認められない。

掘立柱建物S B4720は、3間×3間の総柱建物である。柱間は、東西4.5m、南北5.1mと東西の柱間の方が若干狭く、棟方向は北で東に39°振れている。側柱の柱掘形は径1.0～1.2mの円形で、深さは0.6mである。東柱は鎌倉時代の東西溝S D4495によって壊されており、北側の2柱穴を検出した。柱掘形は径が0.4m、深さ0.3mと側柱と比べ小型である。S B4735は、調査区東北部にある3間×2間の南北棟である。柱掘形は径0.6mの円形で深さは0.6m。棟方向は北で東に39°振れている。

竪穴住居はS B4724・4742がある。S B4724は、調査区西北に位置する。西と東を鎌倉時代の南北溝に壊されており、南北5.1m、東西2.6m以上、深さ0.1mあり、第72次調査で北辺とカマドが検出されている。遺物はほとんど出土していない。S B4742は、調査区中央南に位置する。東西3.1m、南北3.3m、深さ0.1m。北壁中央にカマドを伴う。このカマドの西袖

部先端には、土師器長胴甕の胴部が据え置かれ、補強材として使用されている。先の第67次調査では同様なもののほか、煙道部に甕が利用されたものや、カマドの支柱に小型の甕が使用されている例などもある。出土した遺物は、土師器杯・甕などが少量ある。

土塙は主に調査区東南部と中央北側で検出された。調査区東南のものは第68次調査から続く一群で、S K4497が検出されている。径2.0~3.0m、深さ0.3~0.5mの不整円形を呈し、両半分は第68次調査で検出されている。出土した遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器杯などが整理箱で4箱出土している。

調査区中央北側で検出された土塙には、S K4739・4749がある。S K4739はS K4738の東にある径2.1m、深さ0.3mの円形を呈する。遺物は奈良時代前期の土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯蓋がわずかに出土した。S K4749は調査区東北部にある奈良時代後期の掘立柱建物S B4748と重複する位置にある。径3.2m、深さ0.35mの円形で、土師器杯・皿・碗・甕・鉢、須恵器杯身・杯蓋・鉢・甕が整理箱で1箱出土している。

(IV) 奈良時代中期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物S B4496、土塙S K4738・4745がある。

掘立柱建物S B4496は、調査区東南部にある第68次調査で一部検出された3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.4m、深さ0.5mの円形で、棟方向は東で南に21°振れる。

調査区中央北側にあるS K4738は後述の第72次調査で北半分が検出されたもので、径3.0m、深さ0.5mの円形を呈する。出土した遺物は、奈良時代中期の土師器杯・皿・甕、須恵器甕・壺が少量出土しただけである。S K4745は調査区中央南側にある東西2.4m、南北2.0m以上、深さ0.3mの不整円形を呈する。遺物は、整理箱で1箱出土している。

(V) 奈良時代後期の遺構

掘立柱建物3、土塙2がある。

掘立柱建物にはS B4421・4734・4748がある。S B4421は第67次調査北西隅で検出したもので、攪乱等によって壊されているが4間×2間の南北棟と思われる。S B4734は調査区中央南に位置する4間×3間の東西棟である。柱掘形は径0.6mの不整円形で深さ0.4m。棟方向は東で南に50°振れる。S B4748はS B4735の東北部に位置する3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.6mの隅丸方形で深さ0.5m。棟方向は東で南に25°振れる。妻柱は浅いためか検出されなかった。奈良時代前期の土塙S K4749、奈良時代後期の土塙S K4747より新しい。

土塙は、調査区東北部で検出されたS K4747・4750がある。S K4750は径3.5m前後、深さ0.2mの円形を呈し、鎌倉時代の井戸S E4751と重複する。三彩陶器の小型壺の破片1点が出土している。S K4747は掘立柱建物S B4748と重複し、径2.0m、深さ0.3mの不整円形を呈する。奈良時代後期の土師器杯・皿・甕・鉢、須恵器甕が少量出土している。

(VI) 鎌倉時代前期の遺構

これまでの調査同様、平安時代の遺構は検出されなかった。

鎌倉時代前期の遺構には南側の第68次調査で掘立柱建物が9棟検出されているが、今回の調査では掘立柱建物は検出されず土塙1、溝9、井戸2があるだけである。

土塙 S K 4729は調査区中央部、弥生時代の方形周溝 S X 4730の西側に位置する。東西1.2m、北は同時期の東西溝によって堀されているが、約1.5mの方形で、深さ0.3m。埋土から人頭大の石とともに片口の鉢が出土しており、墓の可能性もある。

井戸 S E 4751・4752は、調査区東北隅にある。どちらも円形で、北側の S E 4751は径2.0m、南側の S E 4752は径0.8mの小型のもので、いずれも1.5mほど下げただけで完掘はしていない。S E 4751からは鎌倉時代前期の土師器杯・小皿・伊勢型鍋、山茶碗が整理箱で2箱、また S E 4752からは、遺物はほとんど出土しなかった。

溝には前回の調査で検出された S D 4424・4425・4495・4538と、新たに S D 4721～4723・4725～4727・4732・4737・4753がある。これらの溝の方位は東西溝は概ね東で南に23°、南北溝は北で東に32°振れる。

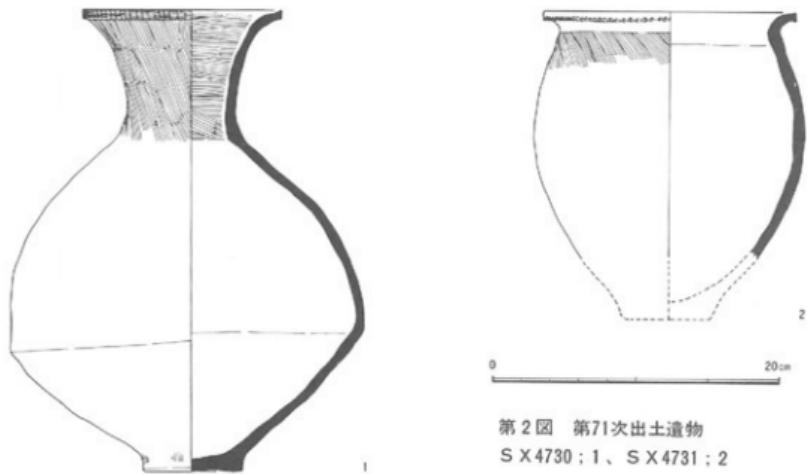
東西溝 S D 4495は第68次調査地から続く幅1.0m、深さ0.7mの東西溝で調査区西端で一旦とぎれる。第68次調査と合わせ総延長80m以上の基幹排水路である。溝底は東に向かって傾斜している。西端のとぎれた場所では折れ曲がるように南北溝 S D 4723がある。この溝は幅0.5m、深さ0.2mの比較的浅いもので、おそらくこの溝の排水を東西溝 S D 4495に流し込む道路の側溝と思われる。

また、南北溝 S D 4538は調査区東端にある第68次調査地から続く溝で幅1.0m、深さ0.5mの比較的規模の大きなもので、これら S D 4495・4538などが当調査区の主要排水路で、これらに対応するように他の比較的小規模な溝が検出されている。おそらく道路の両側溝と思われるが対応関係を明確にはできなかった。例えば南北溝 S D 4723の東には方位、規模のよく似た S D 4727・4424・4425があり、いずれかの溝が S D 4723と対応する道路の西側溝と考えられる。東西溝 S D 4495の北側にはL字状に北に折れ曲がる S D 4725があり、これも道路の北側溝と思われ S D 4495に対応するものが S D 4725なら道路幅は4m、S D 4732なら9mである。調査区東端の S D 4538も、第68次調査区ではこの溝の東約3mの位置に南北溝があり、道路幅を3mに復元している。いずれにしても道路幅については問題が残る。

(VII) 鎌倉時代後期の遺構

この時期の遺構は、溝3（S D 4540～4542）だけである。前期の溝の方位とは若干異なり北で東に17°振れている。

南北溝 S D 4541・4542は、調査区東端に位置する。第68次調査区から続くもので、前時期の



第2図 第71次出土遺物
S X4730; 1、S X4731; 2

S D 4538とはほぼ同じ位置にあることから作り替えたと考えられる。また、S D 4540も第68次調査で検出した溝であるが、第68次調査では調査区北側に行くにしたがい徐々に西側に弧を描き、今回の調査では5m分を検出しただけで終わっていた。幅0.9m、深さ1.0m、埋土上層には、こぶし大の礫が大量に埋められており、下層から土師器皿・甕、山茶碗などが整理箱で1箱出土した。

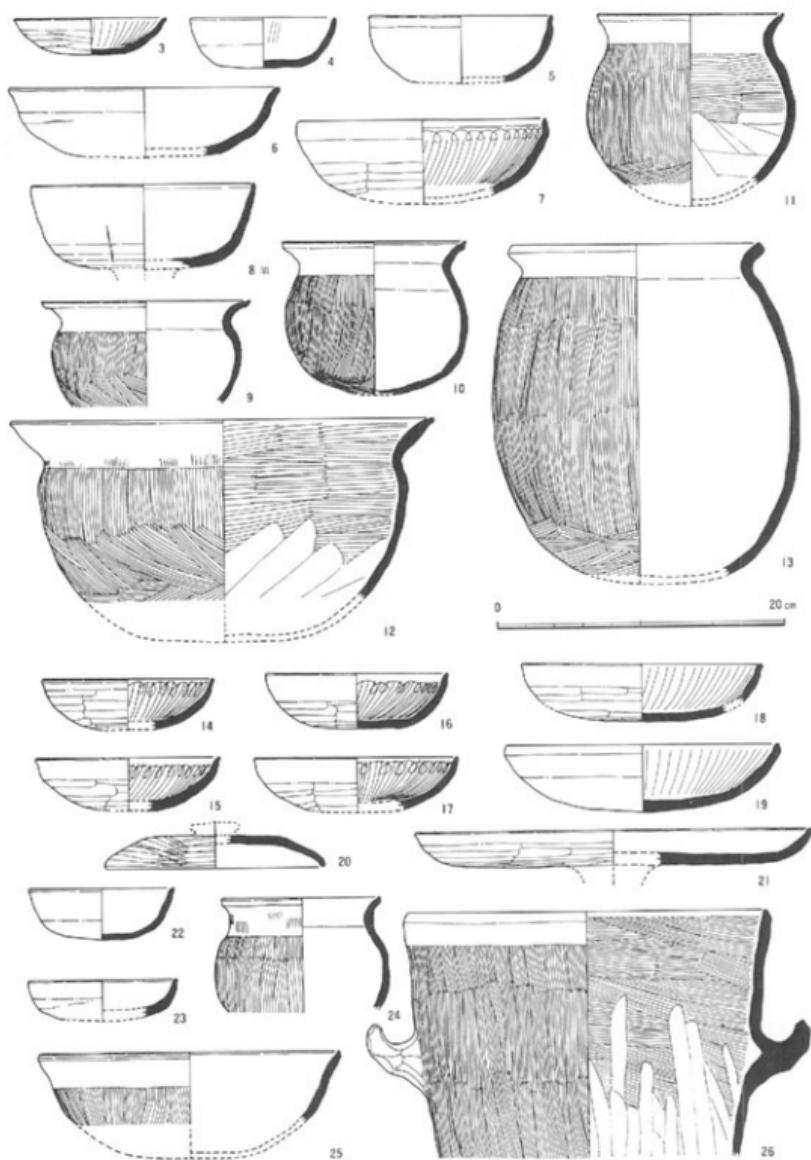
(VIII) 遺物

調査面積の割には遺物の出土量は多くなく、すべてを合わせても整理箱で80箱しかない。遺物の時期は、これまでの調査同様、奈良時代と平安時代末期から鎌倉時代のものが中心で、他に若干の弥生時代の遺物がある。

弥生時代の遺物は、方形周溝S X4730・4731から出土している。(1)はS X4730から出土した甕で、口径13.8cm、器高32.4cm、体部最大径は24.8cmである。口縁端部外面に櫛描文、体部外面はハケメのあとヘラミガキが施される。(2)はS X4731から出土した甕で、口径10.4cm、口縁端部外面に刺突文、体部外面は縱方向のハケメのあとナデが施される。どちらも弥生時代中期のものである。

飛鳥時代の遺物には、堅穴住居S B4728・4743出土のものがあり、S B4728からは土師器杯・皿・碗・鉢・甕・カマド、須恵器高杯・甕が整理箱で1箱出土している。

杯・碗類は、これまで窟宮で出土している作りの悪い“いなか風椀”的範疇に入るもので暗文やミガキの施される精製土器は少ない。(3)は口径10.6cm、器高2.5cmの小型の杯で、口



第3図 第71次出土遺物 SB4728; 3~13、SB4743; 14~26

縁内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文、外面はヨコナデのあと粗いミガキが施される。(7)は口径17.2cm、器高約3cm、口縁端部は内弯する杯で底部外面はヘラミガキ、口縁部内面上端に螺旋状暗文1条と放射状暗文が施される。(4・5)はいなか風梳で、(4)の口縁内面にはヘラ書きが残る。(6)は口径17.8cm、器高4.7cmの杯で類例は少ないが、第30次調査の竪穴住居S B1615では同様の杯が反りの残る7世紀後半の須恵器杯蓋と出土している。甕には中型のものと大型の長甕がある。中型の甕(11)は、奈良時代のものと比較して古相のもので、体部がやや下ぶくれになっており、底がやや尖るものである。

S B4743出土のものには、土師器杯・杯蓋・高杯・鉢・甕・瓶・カマド、須恵器は杯・杯蓋・短頸壺・甕の破片が数点あるだけである。

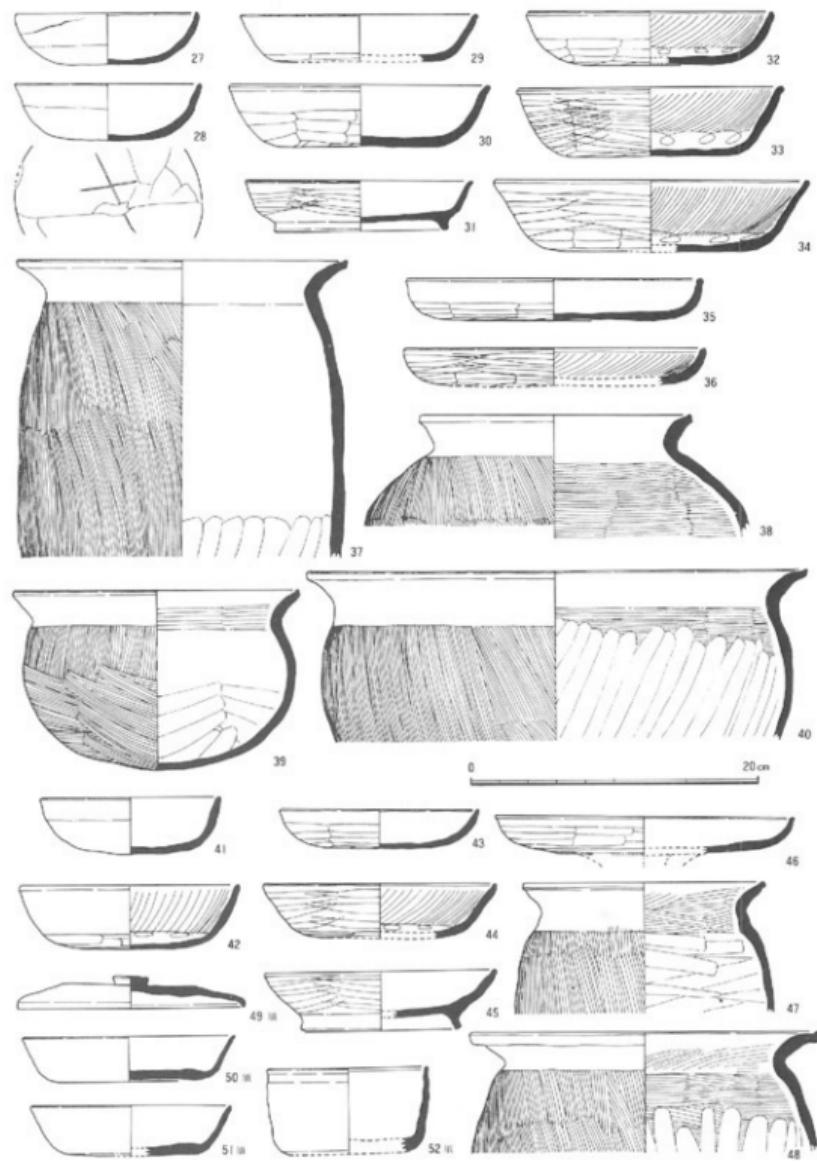
杯(14~17)は、精良な胎土を持ち、口縁部内面に放射状暗文と上端に螺旋状暗文、外面は口縁部近くまでヘラケズリを施す。この手法を持つ杯は、斎宮ではあまり出土例がないが、SK4746からも口縁部内面に放射状暗文と螺旋状暗文を施す同種類の杯が、反りの残る須恵器杯蓋と出土している。内面に放射状暗文の施されるものは他に(18・19)がある。(19)は口径19.0cm、器高4.7cm、胎土は砂粒を多く含むもので、底部外面はe手法の作りの粗いものである。これら暗文の施される杯は、奈良時代を通じてある杯と比較しても口縁部と底部の境が明瞭でなく、より古い形態が残っている。

奈良時代の遺物は前期(S K4497・4749)、中期(S K4745)、後期(S K4747)の遺構からそれぞれ整理箱で1~2箱出土している。

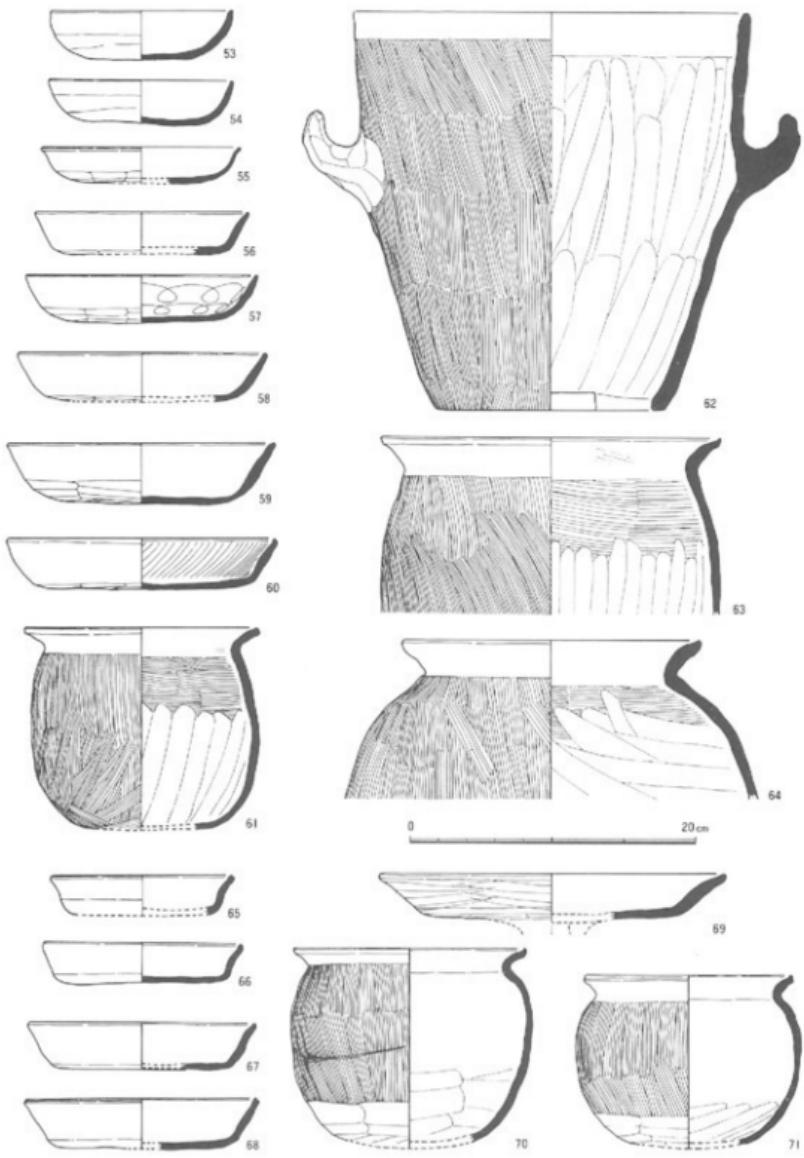
S K4497出土のものには土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器杯・杯蓋・甕がある。斎宮跡土師器編年SK3000の古い段階に比定できる。

杯は、口縁部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文、外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施される。口径によって大型のもの(A I)と中型のもの(A II)に分かれ、A IIは口径15~16cmで器高3~3.5cm。A Iには口径18cm前後で器高5cmのものや器高4cmのものがありA Iでも深さによって分かれられる可能性がある。(34)は更に大きなものである。(29・30)は図では暗文が書かれていないが、器壁の残りが悪いためである。皿は口径21cm前後、器高3cm弱で、(36)は内面に放射状暗文と底部内面に螺旋状暗文、底部外面ヘラケズリのあとヘラミガキが施される。(35)は器壁の残りが悪く不明であるが、杯同様ヘラミガキなどが施されていると思われる。これらの土器は斎宮周辺で検出された土器焼成塙出土のものと整形・焼きが似通っており、おそらくこの時期から斎宮内への土器の供給は確実に始まっていたと考えられる。なお、(28)の底部外面に「X」がヘラ書きされており、他に須恵器杯の底部外面に残るものもある。

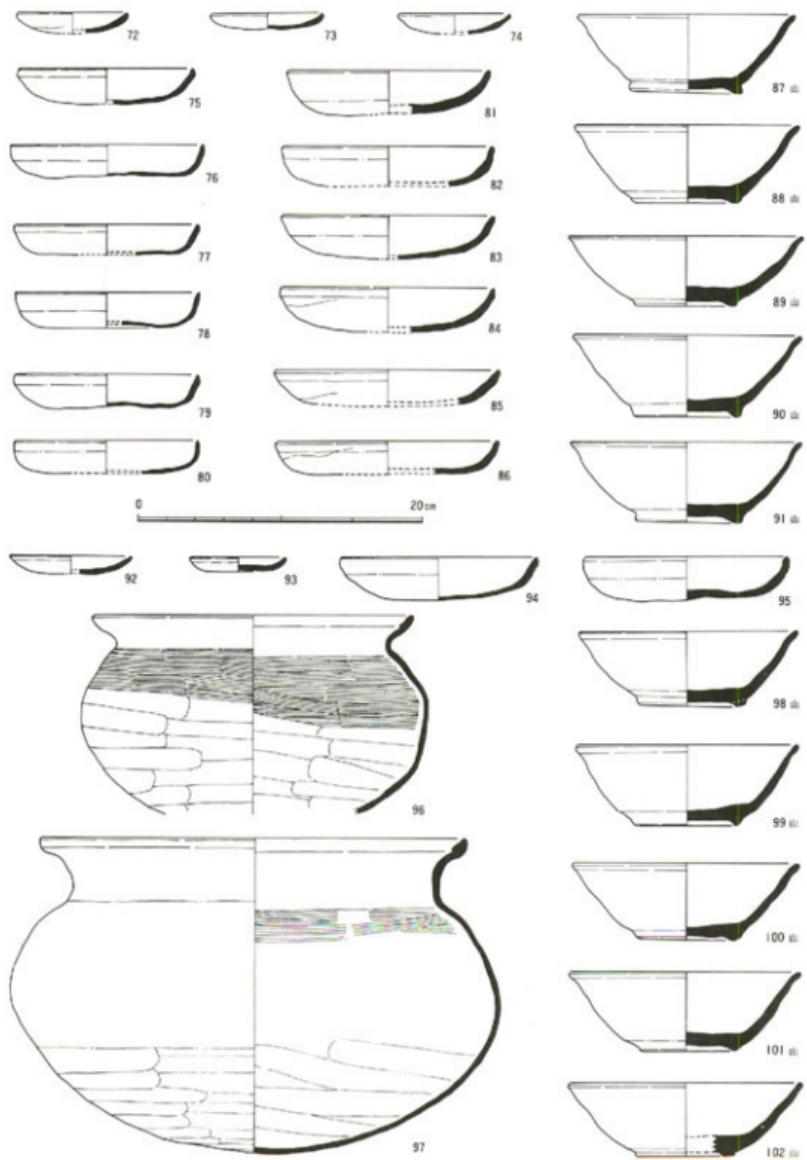
S K4749出土のものには土師器杯・皿・高杯・甕・瓶・須恵器杯・杯蓋・甕がある。須



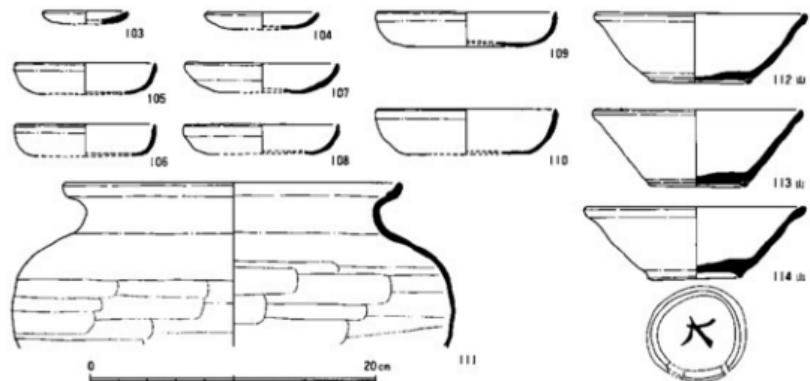
第4図 第71次出土遺物 SK4497; 27~40、SK4749; 41~52



第5図 第71次出土遺物 SK4745; 53~64、SK4747; 65~71



第6図 第71次出土遺物 SE4751:72~91、SD4495:92~102



第7図 第71次出土遺物 SD 4540; 103~114

恵器は高藏寺2号窯期のもので、奈良時代前期でも新しい諸官跡土師器編年SK 3000に比定できる。また、今回出土した遺物は少なく、あまり良好な資料とは言えない。土師器杯にはA IとA IIがあるほか、口縁と底部の境が明瞭でなく口径に比べ器高のさらに浅い杯もある。(43)は口縁部近くまでヘラケズリを施すもので、内面の暗文は残りが悪く不明である。

S K 4745出土のものには、土師器杯・皿・椀・甕・瓶、土錐が整理箱で1箱出土している。須恵器は杯と台付長頸壺が2片出土している。奈良時代中期に比定でき、土師器杯にはA I (58~60)とA IIがあり、前代と比較して口径はあまり変化がないが、暗文・ヘラミガキの施されるものは少なくなる。口縁部内面に螺旋状暗文のみ施す杯(57)は、遅くともこの時期から出現すると考えられる。

S K 4747から出土したものは少なく、土師器杯・高杯・甕が少量と、須恵器は甕の破片が2点ある。奈良時代後期に比定できる。土師器杯は、底部外面e手法、口径によって、口径14cm前後、器高3cm前後の小型のもの(65・66)と口径16cm前後、器高3.5cm前後(67・68)の大形のものに分かれる。今回出土のものは暗文・ヘラミガキは施されていないが、他の出土例ではミガキの残るものも若干ある。高杯(69)は、口径24.0cm、外面はヘラミガキ、内面は残りが悪く不明である。甕(70・71)は底部外面にヘラケズリが施されるものである。

鎌倉時代前期の遺構から出土した良好な資料にはS E 4751、S D 4495のものがある。これらから出土したものには土師器皿・小皿・甕、山茶椀がある。土師器皿は口径によって、12~13cmのもの(75~80)と14~15cmのもの(81~86、94、95)に分かれる。また、小皿(72~74、92、93)は8cm弱のものである。鍋(96・97)は所謂伊勢型鍋である。山茶椀(81~91、98~102)は藤沢氏編年の第III段階の5・6形式に比定できる。

鎌倉時代後半の遺物はS D 4540のものがある。器種構成は前期同様に土師器皿・小皿・鍋、



第8図 第71次出土遺物 三彩陶器（SK4750; 115）（1:2）
墨書き土器（包含層；116・117）

山茶椀である。土師器皿は器壁が薄くなっている、口径は10cm前後と13cm前後に分かれ、前期のものと比較して器高はあまり変化していないが、口径が小さくなっている。山茶椀は藤沢氏編年の第III段階の7形式のものと思われる。

特殊な遺物には、三彩陶器1点、綠釉陶器1点、墨書き土器11点、鉄製筋鉗車1点などがある。三彩陶器は、斎宮跡では本調査区より南400mの第30次調査で、壺の砂片が4点出土している。今回出土した三彩陶器(115)は、奈良時代後期の土塙SK4750から出土したもので、底部の破片である。高台径4.2cmの小型のもので、残存高1.4cm、釉が剥落している所もあるが、外面に褐色・綠釉、内面にも透明釉が残っており、薬壺型の壺をミニチュアにした奈良三彩小壺と考えられる。奈良三彩小壺は奥村清一郎氏の「奈良三彩小壺とその出土遺跡について」(「京都府埋蔵文化財論集第1集」1987年)によれば、全国の出土地は昭和61年3月で54ヶ所ある。三重県内では鳥羽市神島から出土しているのみで、海の祭祀に関係すると考えられている。過半数の出土例は祭祀に関係するものであるが、今回出土したものが斎宮の祭祀にどのように関わるかは今後の課題である。

墨書き土器は11点あり、すべて鎌倉時代の山茶椀の底部に書かれているものである。(116)は、「熊女」と判読できる。第68次調査でも同様の文字が2点出土していて、鎌倉時代前期の女性の名前の一端を垣間見ることができる。ほかに「上」(117)やSD4540から出土したもので「大」(114)などがあるが、大半は記号である。また、フィゴの羽口やスラグは調査区北半で多く出土しており、野鐵冶の存在を窺わせているが、時期を限定することができなかった。おそらく、鎌倉時代以降と考えられる。

(IX) まとめ

今回検出した遺物は奈良時代と鎌倉時代を中心とするもので、これまで判明している古里地区の成果をより補強する結果となった。特に鎌倉時代の遺構は溝を中心としたもので東西及び南北の道路が当調査地を走っていたことが判明した。また、遺物は飛鳥時代から奈良時代のものがあり、ここでは特に奈良時代の遺物について記述することにする。

斎宮跡出土の土師器は1984年度年報の「斎宮跡の土師器」によって、その編年試案が出され、斎宮跡での土器の流れが大きく把握されている。今回の調査で飛鳥・奈良時代の遺構が検出され良好な資料とはいえないが、土師器椀・杯類を中心に過去の基準資料と対比し再考して見たい。なお、以下に述べる椀とは、口縁部のみをヨコナデし暗褐色や茶褐色を呈する粗製の椀で通称“いなか風椀”と呼ぶ椀のことである。また、杯とは、砂粒をほとんどふくまない精良な胎土を持ち赤褐色を呈する杯である。

飛鳥時代の標式遺構には、S B1615、S X2735、S K1255、S K2120がある。須恵器から岩崎41号窯期（飛鳥時代後期）に比定され、このうちS B1615、S X2735は杯蓋にかえりの残るもののが中心で、S K1225、S K2120は杯蓋に反りの残るものはほとんどない。この時期の土師器は甕が大半で、椀・杯類は少なく整理が終わっていないため不明な点が多い。

今回の調査では飛鳥時代のものがS B4728から出土しており、S B4728の（6）は口縁部が外反する作りの悪い杯でS B1615からも出土している。この杯は出土点数が少なく、いなか風椀と現時点ではセット関係とは考えにくい。いなか風椀は口径10.0cm、器高3.5cmの小さな（4）と、口縁部を一回強くナデ、口縁が外反する口径17.8cm、器高4.7cmの大きな（5）があり、これらが在地的な土器のセット関係であろう。この時期の特色は暗文の残る精整土器がこの時期から出現することである。この時期の土器のセット関係については今後の課題である。

また、飛鳥時代後期後半のS K1255・2120出土のいなか風椀はS B4728のものと比べて口径が大きくなる傾向である。

奈良時代前期の標式遺構にはS D170、S E1800、S K3000がある。須恵器から高藏寺2号窯期に相当する。ここではS D170は満の資料であるため除き、前期前半（S E1800）、前期後半（S K3000）として述べる。

S E1800出土のいなか風椀は口径11.4～13.2cm、器高4cm前後。杯は底部外面b手法、口縁部内面放射状暗文、底部内面螺旋状暗文、外面は全体にミガキを施すものが多い。口径によつてA I～A IIIに分かれるが、その中でも器高によつてさらに分かれる可能性がある。A Iは口径18.4cm、器高4.4cm。A IIは口径14.2～16.2cm、器高3.6～4.0cm。A IIIは口径12.0～12.8cm、器高3.5～4.1cmである。このうちA IIIは飛鳥時代のS B4728でも小型の杯がみられ、当時期まで続く器種である。

S K3000出土の椀は口径13.0～14.0cm、器高3.3～3.8cmと口径が若干大きくなり、器高は小さくなる。杯は口径17.8～18.8cm、器高4.1～4.6cmのA Iと、口径14.8～16.2cm、器高2.8～3.6cmのA IIがある。A IIの口径はS E1800とあまり変化せず器高が低くなる傾向である。

また、口径14.0cm、器高3.0cmの杯もあり、A IIも大型のものと小型のものに分化するようである。調整はすべて底部外面へラケズリするb手法である。これらの杯の内面の暗文を見て

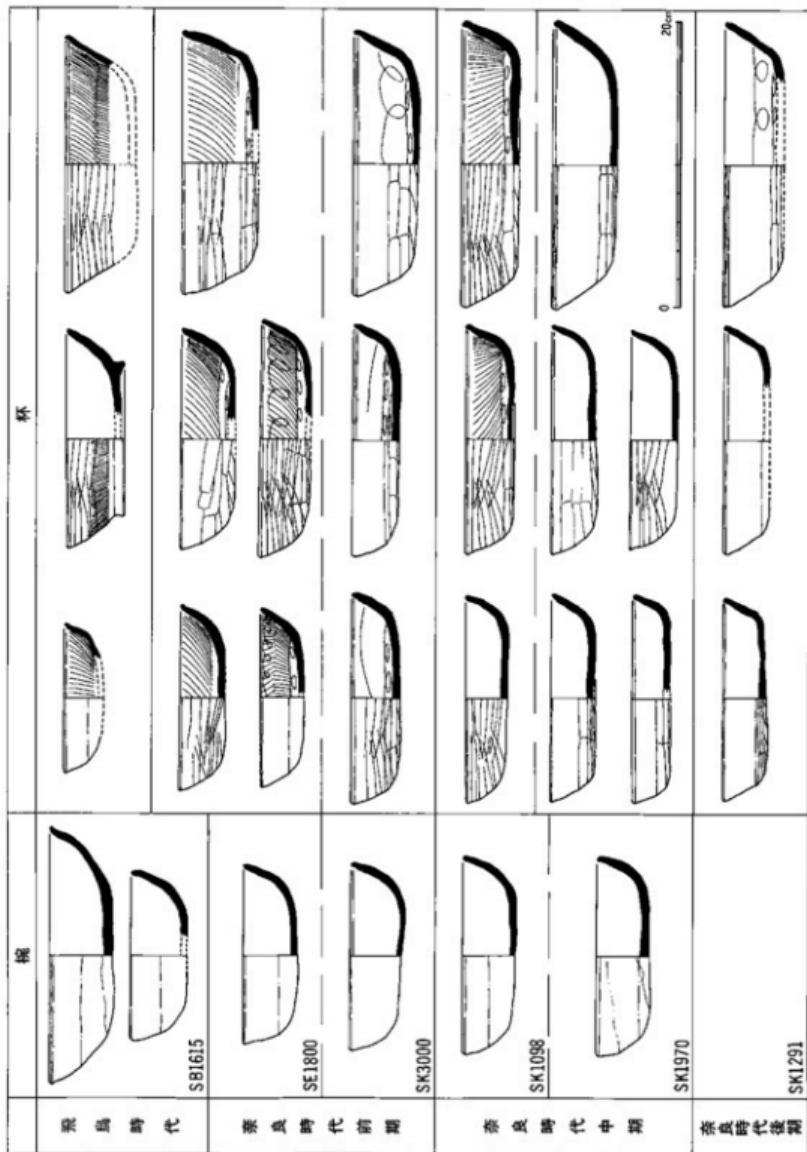
みると放射状暗文の施されるものは少なく、口縁部内面に放射状暗文がなく底部内面の螺旋状暗文が口縁部と底部の境より若干口縁部まで上がってきているものがあり、また法量が後述する奈良時代中期のものに比較的近いため、奈良時代前期でもより新しいと考えられる。第71次調査のS K4497出土土器の法量はS K3000とはほぼ同じであるが、口縁部内面に緻密な螺旋状暗文が施されるものが多い。

奈良時代中期の様式遺構はS K1098、S K1970がある。須恵器は岩崎25号窯期に相当する。いなか風楓はどちらのものも口径12.6~14.0cm、器高3.2~4.2cmの中におさまり、定型化しているようである。杯は大型のA I、中型のA IIに分かれ、A IIは前期のS K3000同様大型と小型のものがある。A IIの調整は底部外面へラケズリするb手法が中心であるが、S K1098には口縁部近くまでヘラケズリするc手法のものやS K1970には底部未調整のe手法のものが出現在するため、S K1970の方がより新しいと考えられる。内面の暗文は施されるものは少なくなり、放射状暗文はその間隔が粗くなり、放射状暗文に替わり螺旋状暗文が口縁部内面に単独で施されるものも出現する。

奈良時代後期の様式遺構にはS K1291があり、須恵器は鳴海32号窯期から折戸10号窯期の古い段階に相当する。

いなか風楓は少なくなり、この段階で消滅する。平安時代初期には口径がほぼ同じ杯が出現している。杯は口径18.0~19.5cm、器高4.5cmのA IとA IIも口径13.0~14.0cm、器高3.0~3.5cmの小型のものと15.0~17.0cm、器高3.0~3.5cmの大型のものに分かれる。口縁部内面に暗文の施されるものはほとんどなくなり、施される器種はA Iのものが多い。前代から続く底部外面b手法のものも見られるが、底部外面e手法で、口縁部と底部の境が明瞭になり、口縁部が外に開くものや口縁部が外反し端部がやや内寄りとなる平安時代的なものも出現する。第71次のS K4747の杯はこの平安時代的な杯である。

このように見てみると奈良時代について言えば、前期の小型の杯A IIIを除き他の器種（いなか風楓、杯A I、A II）は口径にあまり変化は見られず、器高が若干低くなることや、調整が底部外面へラケズリのb手法から口縁部までのc手法、更にヘラケズリを行わないe手法へと、また、内面の暗文の簡略化など、ほぼ同じ法量を持つ土器が奈良時代を通じて一貫して生産されたことが見える。おそらくこれらの土器は斎宮周辺で検出されている土器焼成場で焼かれたと想定でき、それらと消費地である斎宮との関係は今後の問題である。もうひとつの大きな問題として、飛鳥時代の土器構成があげられる。まだ、整理が終わっていないため不明な点が多いが、遅くとも7世紀の後半には精整土器が出現し、これらの土器は在地の土器からは系譜がたどれない“都的な色彩”的強い土器であり、それが成立期の斎宮とどのようにかかわっているかは今後の分析に期待したい。



第9図 奈良時代の土師器壺・杯

III 第72次調査

6 ABE・F（古里地区）

第72次調査を7月6日から史跡西部の古里地区（多気郡明和町大字竹川古里）において実施した。現状は草生地である。発掘区は4ヶ所に分かれている。先の第71次調査区に北接する発掘区を第72-1次（1700m²）とし、第67次調査区（昭和61年度実施）に西接する発掘区を第72-2次（400m²）とした。いずれも博物館建設用地にあたるため、その地下の状況を把握するために実施した。また、史跡環境整備に関わり、塚山1号墳、同2号墳の墳形、規模、時期などをさぐる目的でトレンチ調査を実施し、前者を第72-3次、後者を第72-4次（計200m²）とした。

以下、次数ごとにその調査結果の概要を述べる。

（A）第72-1次調査

当発掘区は第71次調査区に北接するが、更に、その北西隅は約100m²分だけ昭和48年度に調査した古里D地区（第5次調査）と重複する。そこで再検出された竪穴住居3棟分に限って遺構番号は頭文字D-をつけて從来どおりとし、第6-1次調査からスタートした通し番号は付けなかった。

当該調査区の基本的層序は、第1層暗灰褐色土、第2層黒褐色土、第3層黄褐色地山に分かれる。地山面までの深さは西側で約20cm、東側で約80cmと60cmの比高差をもって東へ向かって傾斜している。

ここで検出された遺構には、弥生時代の方形周溝4、飛鳥時代の竪穴住居2、奈良時代の竪穴住居14・掘立柱建物4・土塙34、平安時代の掘立柱建物1・土塙7、鎌倉時代の竪穴住居1・掘立柱建物2・溝20・土塙22などがある。70ヶ所に及ぶ後世の擾乱塙により削平を受けたものも多い。

（I）弥生時代中期の遺構

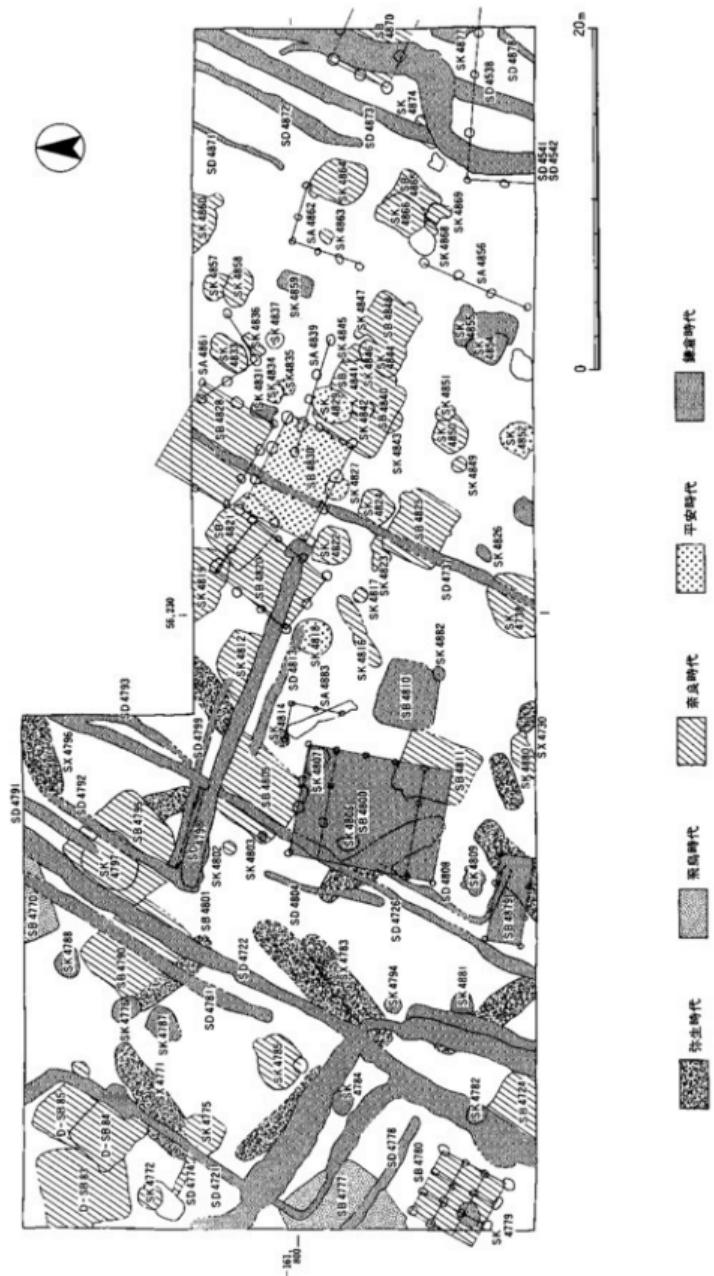
方形周溝S X4730・4771・4783・4796がある。いずれも四隅に陸橋部を持ち、主体部は不明である。後世の竪穴住居や溝、あるいは擾乱塙などによって削平された部分も多い。

S X4730は溝の内々で5.8~7.9m、同様にしてS X4771は9.2~9.8m、S X4783は9.5~10.5m、S X4796は約9.0mである。周溝の規模は、長さ7.9~8.6m、幅1.7~2.3m、深さ0.3mであるが、S X4730だけは規模が小さく、長さ3.5~5.5m、幅1.2~1.9m、深さ0.2mである。

四基とも出土遺物は少ないが、中期の壺や甕の破片が出土している。

（II）飛鳥時代の遺構

竪穴住居S B4770とS B4777がある。両者とも発掘区の壁際で検出されたが、S B4770は第74



第10図 第72-1次造構略図 (1 : 300)

次調査でその全容が明らかになった。その規模は4.8m×4.2m、深さ0.3mで、周溝を持つ。S B4777は(6.2)m×5.7m、深さ0.25mで、北東壁中央部にカマドが取り付き、これも周溝を持っている。

(III) 奈良時代前期の造構

竪穴住居D-S B83・S B4795、掘立柱建物S B4780・4820・4870、土塙S K4775・4816・4843・4850・4851・4860・4833がある。

竪穴住居D-S B83は第5次調査(古里D地区)で既検出のものだが、わずかな出土遺物を再検討して、これを前期とした。S B4795は、方形周溝S X4796、奈良時代中期の土塙SK4797、更に鎌倉時代の溝とも重複するが、その規模は5.6m×5.4m、深さ0.12mで、北東壁中央部にカマドが付き、東隅に貯蔵穴を持ち、かつ主柱穴も確認しうる。

掘立柱建物S B4780は3間×3間の総柱建物である。南接する第71次調査で検出された同様の総柱建物S B4720に比べると柱掘形は小さく、柱通りの方向もややずれる。

S B4820は3間×2間の建物。竪穴住居や土塙、溝などによる削平の割には柱穴は比較的よく遺存していた。かなり深い掘形であったのだろう。発掘区東端のS B4870も柱掘形はしっかりしていた。梁行2間、桁行は発掘区外に延びるため不詳だが、3間もしくはそれ以上の可能性もある。

S K4843はS B4840などによって削平されたため殆どその原形を留め得ないが、長径3.2m、短径2.1m、深さ0.2~0.3mの楕円形状の土塙であったと考えられる。また、その南にあるS K4850とS K4851は切り合い関係から前者の方が古い。

(IV) 奈良時代中期の造構

竪穴住居S B4790・4805・4811・4825・4840・4841・4865、土塙S K4738・4797・4812・4836・4842・4845・4847・4857・4858・4864・4868・4869・4880、塀S A4839がある。

S B4790は中世の溝などによって削平を受け、正確な規模は不詳だが、5.3m×(4.5)m、深さ0.1mで、カマドの有無は不明である。S B4811は4.4m×3.1m、深さ0.2m、東壁南寄りにカマドを持つ。S B4805も中世の溝などで大きく削平されている。(4.5)m×4.3m、深さ0.2mでカマドの有無は不明である。

S B4825は西側をS D4737に削平されるが、4.0m×3.2m、深さ0.3mを測り、北東隅にカマドが取り付く。S B4840はS B4841、S K4843と重複し、東壁中央部にカマドを持つ。S B4841、及び前期のS K4843はこのS B4840に先行する。S B4840・4841の北側は平安時代のS K4829に削平されている。S K4824はS B4840に伴うと考えられる。S B4865は土塙や井戸による削平が著しいが、3.0m×(2.8)m、深さ0.1m、東壁南寄りにカマドがある。

S K4797は長径3.5m、短径3.0m、深さ0.2~0.3mの大きい土塙である。前期のS B4795

を切っている。西側のS B4790と同時期存在と考えられる。

S B4825の南にあるS K4738も長径4.3m、短径3.5m、深さ0.65mと大きいが、遺物は少量で土師器杯・甕などの破片が出土している。S B4865の北にあるS K4864は長径3.4m、短径2.7m、深さ0.3mで、須恵器の杯・甕や土師器杯・皿・甕などが出土している。西側にL字状の塙S A4862があるが、中期か否かは不明である。

塙S A4839は比較的しっかりした掘形が並ぶので住居を想定したが、うまく対応する柱穴を見出せないので塙としておく。

(V) 奈良時代後期の遺構

竪穴住居D-S B84・85・S B4821、土塙S K4817・4819・4849・4822がある。

D-S B84とD-S B85は重複していてD-S B84のほうが新しい。いずれも東側を中世の溝S D4721によって削平されている。D-S B84にカマドが付くことは既に報告済みだが、今回D-S B85の北東隅に当るところで焼土を検出しており、そのカマドであった可能性が強い。

S B4821は3.6m×3.3m、深さ0.3m。周囲に大きな攢乱塙があり、全体として造り具合はよくない。

S K4819は壁際にあって規模は不明。深さ0.1mを測る。S K4822は径約2.3mの円形で深さ0.1m。

以上(III)～(V)に述べた他に奈良時代の遺構としては、竪穴住居S B4801・4848、掘立柱建物S B4828、土塙S K4772・4785・4802・4823・4824・4844・4846・4863・4866・4874、溝S D4774、塙S A4856・4861・4862などがある。しかし時期細分するにはいずれも出土遺物が少量細片にすぎ、これを保留せざるを得ない。

(VI) 平安時代前I期の遺構

掘立柱建物S B4830、土塙S K4818・4827・4829・4834・4835・4837・4852がある。

S B4830は3間×2間の東西棟で、桁行柱通りの方向はE27°Sである。史跡西部の古里地区で平安時代の建物が確認されたのは、これを初例とする。

この掘立柱建物のすぐ東隣にあるS K4829は、長径2.5m、短径2.0m、深さ0.6mで、(44・46・48～50)などが出土した。また、そこから南へ11mの所にS K4852がある。長径約2.2m、短径1.9m、深さ0.5mの規模で、(41～43・47・51～56)などのほか、土錐も5点出土している。

(VII) 鎌倉時代前半の遺構

竪穴住居S B4810、土塙S K4776・4779・4787・4794・4803・4806・4809・4826・4831・4854・4855・4877・4882・4884、溝S D4538・4721・4722・4725・4726・4737・4778・4791・4792・4804・4808・4871・4872・4873がある。

S B4810は3.9m×3.6m、深さ0.2mの隅丸方形状を示す遺構である。北辺と西辺の検出状況から、あるいはほぼ同規模の遺構が重複している可能性も考えられた。しかし、埋土の土層断面の観察からはそれは確認できなかった。やむをえず検出面から0.1m内外の深さのところで便宜上、上層と下層に分けて遺物をとり上げた。この遺構の特徴は東南の壁外に近接して、径約0.5mの円形状に著しい焼土があったこと、遺構内上層からフイゴの羽口が、また上下層を問わず土師器鍋の破片及びスラグが出土したことである。因みに遺構内で出土したスラグの総重量は約20kgある。埴堀の底を形取ったようなスラグも混じっている。焼土上表面と遺構内床面との比高差は0.2~0.25mである。スラグの分析結果はまだ出ていないが、ここは恐らく鍛冶をする作業場であったと思う。

S B4810の東南21mにあるS K4854・4855は不整形な土塙である。ここからは2.5m前後の範囲内に大きな灰濁色の粘土塊がいくつも床面にへばり付いた状態で出土した。土師器小皿（破片）の出土も目立った。この土塙の北東12mの所にも同様の粘土塊を伴う土塙S K4859がある。2.0m×1.1m、深さ0.1~0.17mで、S K4854・4855と同時期に存在したものである。土器焼成塙は検出されなかったが、これらの粘土塊は土器製作に用いられた可能性もある。

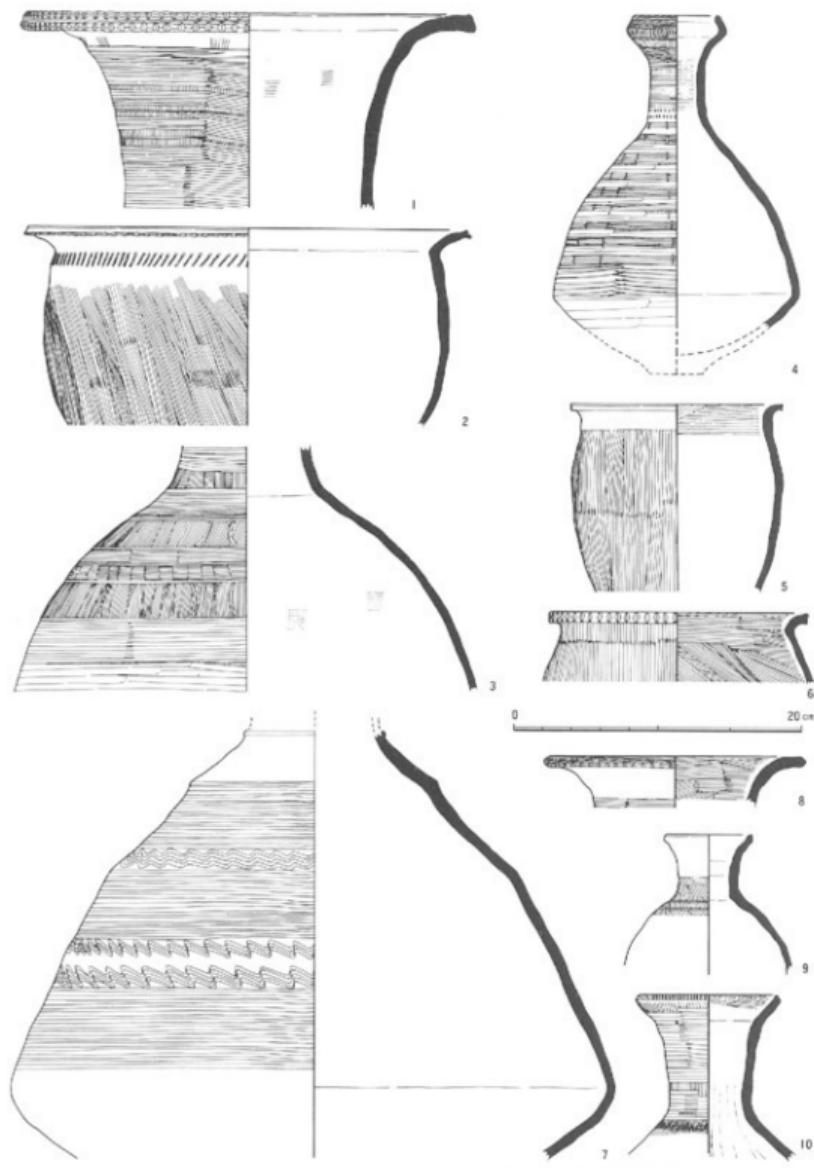
なお調査区南壁際で検出のS K4884は第71次調査のS K4739と接してはいるものの別遺構である。SD4721・4722・4725という3条の溝が調査区の西側でそれぞれ交差している。SD4721は前述D地区のSD86に、SD4725は同じくSD74につながる。新旧関係は、SD4721が一番古くSD4725が一番新しい。SD4721とSD4722は途中から重複する形で南へ続く。調査区北側で、SD4722の東3mの所を並行して走るSD4792はSB4795の南でL字に曲がりSD4798となって東行するかに見えるが、事実はSD4798は後半期の溝で、両者はL字状に重なっているにすぎない。SD4726は幅0.45~0.7m、深さ0.3mで、SD4722の東9mの所をほぼ平行に走る。

前半期の溝は調査区東端にも4条ある。SD4873と4538は幅0.9~1.1m、深さ0.3mである。両溝はS字状に蛇行する後半期の溝SD4541・4542によって削平をうけている。

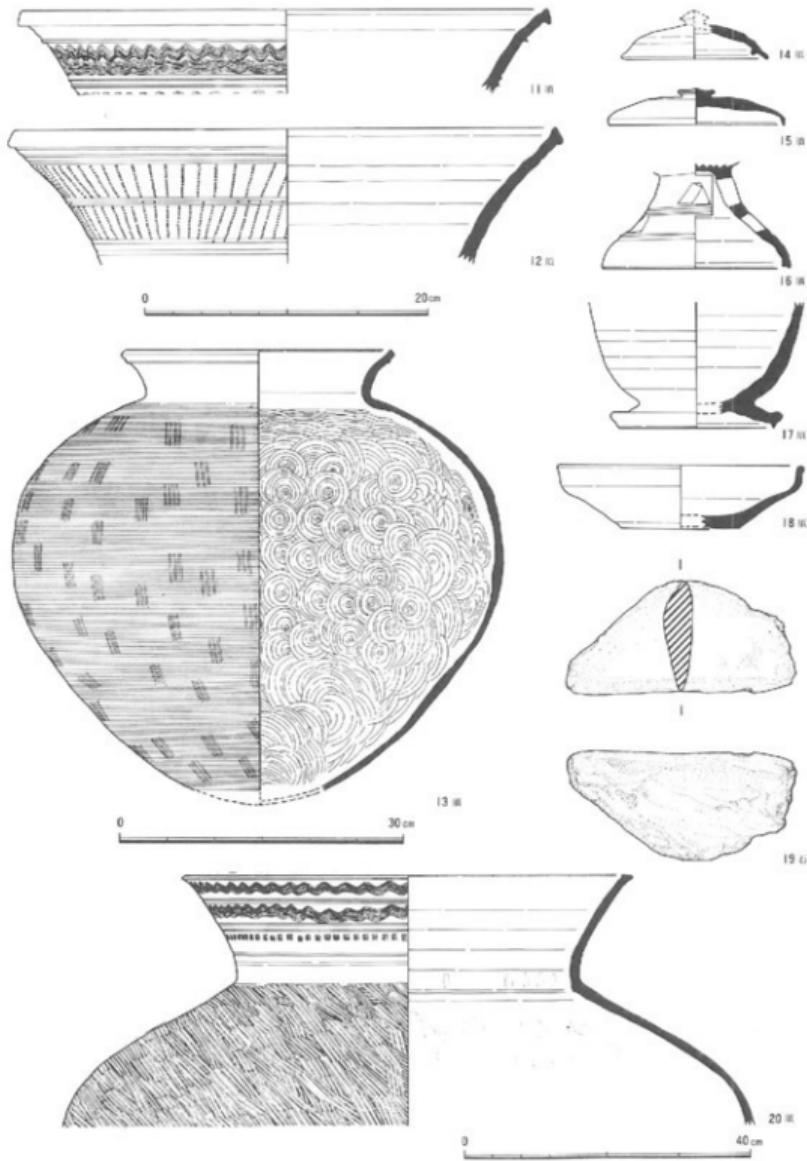
(VII) 鎌倉時代後半の遺構

掘立柱建物S B4800・4879、土塙S K4782・4784・4788・4814・4881、溝SD4541・4542・4793・4798・4799・4813、塙SA4883がある。

S B4800は3間×3間の身舎の南北に1間分ずつの廂がつく。この建物の北東隅外側には南北2間、東西1間分の柱穴がSB4800の柱通りに沿って検出された。建物の隅を囲む塙と考えてSA4883としたが、その柱間寸法はSB4800のそれぞれの柱通りのそれとほぼ同じであり、柱掘形の大きさも変わらないので、変則的な形にはなるが、SB4800の一部となる可能性もある。



第11図 第72次出土遺物
SD4948; 1、SK4949; 2、SX4771; 3、
SX4796; 4、SK4921; 5、SX4438; 6・8、
SB4952; 7、SX4910; 9、SK4912; 10



第12図 第72次出土遺物 S D4958 ; 11、S D4948 ; 13、S D4951 ; 15、
1号埴包含層 ; 12・16・17・19・20、2号埴包含層 ; 14・18
(13・19は1 : 6、20は1 : 8)

S B 4800の南で検出されたS B 4879については、第71次調査では対応する柱穴を検出していなかったので、3間×1間とした。この建物の性格も不明だが、S B 4800の簡単な物置用施設であったかもしれない。いずれにしてもS A 4883、S B 4879はS B 4800に付属する施設として理解する必要があるが、近くに井戸がないのをどう考えるべきであろうか。

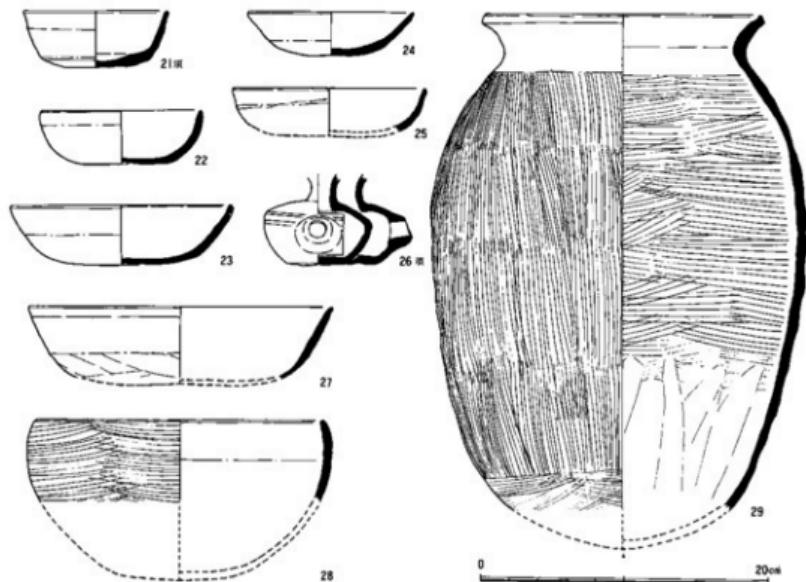
S B 4800の北側をS D 4798が東西に走る。幅約1.0m、深さ0.6mで、全長20m分しかない。また既に述べたように、S D 4541・4542は重複した状態で検出され、S字状に蛇行しながらS D 4873とS D 4538を一部削平して走る。

このほか鎌倉時代の遺構にはS K 4781・4807・4878がある。時期については保留しておく。

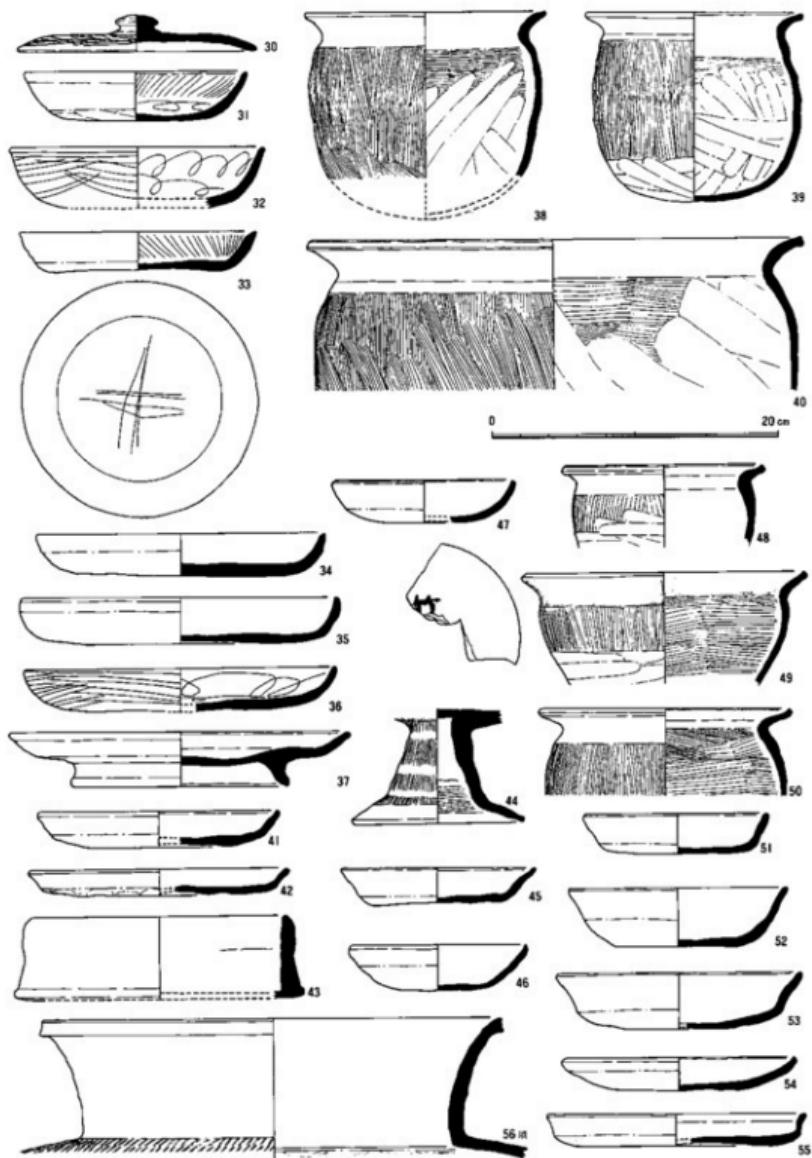
(IX) その他

S B 4724、S K 4773・4786・4838・4853・4875、S D 4815、S A 4876については必ずしも遺物が十分ではなく時期不明としておきたい。ただS B 4724については奈良時代前半代に比定しうるかも知れない。

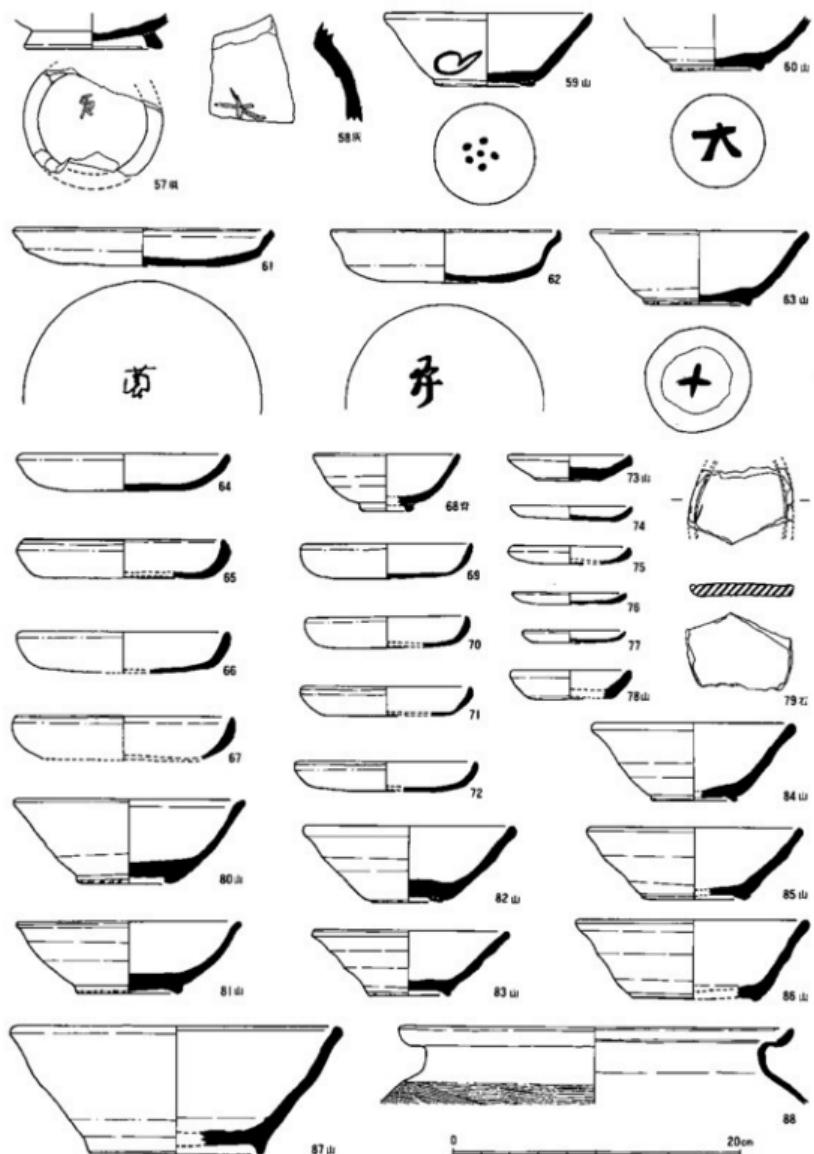
また、S E 4789・4867は埋土中より奈良・鎌倉時代の遺物が出土しているが、旧地主所有の図面と証言により昭和の井戸と判断し完掘しなかった。



第13図 第72次出土遺物 S B 4913; 21~28、S B 4451; 29



第14図 第72次出土遺物 S K 4858 ; 30~40、S K 4852 ; 41·43·44~46、
S B 4830 ; 42、S K 4852 ; 47~56



第15図 第72次出土遺物 SK4860; 57, SD4872; 59, SD4425; 60, SD4873; 63,
SD4721; 64~67, 80~81, SB4810; 68~71~73~78~82~84~87
SD4798; 72~83~88, SD4490; 79, 第72~1次包含層; 58~62,
第72~2次包含層; 61

(X) 遺物

弥生時代中期の方形周溝から少量の土器が出土している。実測可能な2点（第11図、3・4）はいずれも県内東庄内B遺跡の細頭壺Aに当る。

S X4771出土の（3）は内面が淡橙褐色で、外面はそれよりややく部分的に黒褐色を呈す。頸部上半と口縁部及び胴部下半と底部を欠失しているが、口縁部は（4）と同様に所謂受け口状に立ち上がり、胴部は中位より下で最大径を呈す器形であろう。頸部から胴部に継ぎのハケメをした後、横位範描沈線によって区画された中を横描直線文が走る。直線文ばかりではなく一部分簾状文帯があり文様にアクセントを感じさせる。また、直線文帯と直線文帯との間の空間には範描孤状文がある。わずかに残った胴部下半の断片に施されたヘラミガキは恐らく底部にまで及んでいたと考えられる。

S X4796出土の（4）は底部を欠失しているものの器高は約24.6cmと推定され、口径は6.0cm、胴部の最大径は17.0cmである。淡橙褐色で、外面の一部と内面全体は黒褐色である。受け口状の口縁部には横描波状文と簾状工具による刻み目を施す。頸部には2条1組の範描沈線を3段に分けて入れ、その間に横描直線文が走る。頸部の下位に2列の刺突文がある。胴部はハケメの後をヘラミガキし、横位の横描直線文帯がほぼ等間隔に走る。また、頸部の付根から胴部下半に向ってこれもほぼ等間隔に縦方向の範描破線状文を施す。胴部最大径より下位の部分はヘラケズリされている。

S K4858出土の土器（30～40）は奈良時代中期の古い段階のものである。土師器杯は口径16.5cm内外、器高3.5cm内外で、外面をヘラケズリの後ヘラミガキし、内面に暗文を施す。土師器皿は口径21.0cm内外、器高3.0cm内外、ヘラミガキが口縁端近くまで及ぶ。暗文のあるものとないものとがある。土師器皿は外面に丁寧なハケメをし、底部をヘラケズリする。内面もハケメの後、底部から胴部上位までヘラケズリをする。

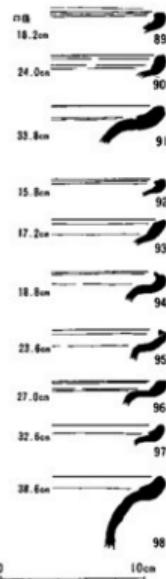
（41～56）は平安時代前Ⅰ期に属する。S K4829・4852、S B4830から出土したものである。

土師器杯はAタイプ（49・52・53・54）とBタイプ（42・50）とがあり、Aタイプはここでは更に口径により大、中、小に三分できる。口径15cm以上のもの、13～14cmのもの、12cm代のものがある。

土師器皿もAタイプ（44・45・56）とBタイプ（55）とがある。

杯、皿とともに平安時代初期まで見られた奈良時代的なCタイプは既に姿を消している。

なお、（47）の底部外面に見える墨書きは「竹」と読める。



第16図
第72次出土遺物
S B4810; 89～98

鎌倉時代の遺物には S D 4721出土の（64～67・80・81）、S B 4810出土の（68～71・73～78・82・84～87）、S D 4798出土の（72・83・88）などがある。このうち S B 4810出土のものは既述のように便宜上上層と下層に分けて取り上げたが、それらは図16に示した土師器鍋（89～98）と共に一括遺物である。しかし全体として破片ばかりで量的にも少なく必ずしも良好な資料とは言い難い。（89～98）の鍋はここではそれぞれ口径の小さいものから順に並べてあり、決して編年を示すものではない。（89～91）は上層、（92～98）は下層出土のものである。これらの鍋はどれも胎土が粗く「精良で器壁の極めて薄い」と言うものは1点もない。共伴する山茶碗の（82）は上層、（84～86）は下層出土で、これらは大旨藤沢氏の編年で言うIII-6型式に相当すると考えている。（89～98）の鍋については口縁部の形に大きく3タイプがある。出土個体数で言えば（91・97・98）のタイプが最も多く、（90）や（94）のタイプは少量であった。このうち口縁端部をつまみあげて断面が突起状になる（94・95）は口縁部の形だけを見ると、胎土は違うが、既に公にされている新田氏の編年試案の7類（16世紀）に似ている。（89・92）もあるいは同じ部類に属するかも知れない。これは既述のように同規模の遺構が重複している可能性を遺物の面から裏付けるものかも知れないと今は考えておきたい。ただしそれを確定するに足る共伴遺物はない。（90・93・96）が同試案5類の新段階に属するとすれば、S B 4810は藤沢氏の編年の7ないし8型式段階まで存続したと言いうかも知れないが、伊勢型鍋の編年には、胎土分析等による産地同定の問題も含め、より多くの良好な資料の出現をまって今後再検討すべき課題もあるかと思う。

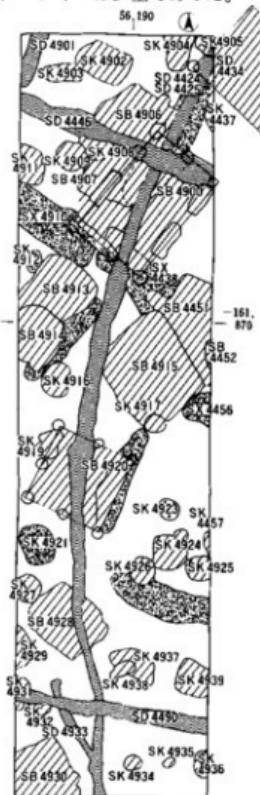
特殊遺物としてヘラ書きと墨書き土器がある。（57）は「印」、（58）は「大」の逆字、（62）は「井」と読める。（59）や（63）に見える墨書きは隣接するD地区でも出土している。

なお（57）は胴部内面に残るロクロ水挽き痕から見て細頸瓶と考えられる。（62）は、平安時代初期の典型的な土師器杯である。

(B) 第72-2次調査

第67次調査区に西接して、東西10m×南北40mの規模で調査区を設定した。

表土から遺構検出面（地山）までの深さは平均して0.5mである。基本的層序は第1層暗灰色土、第2層黒茶褐色土、第3層黄



茶褐色地山である。

ここで検出された遺構には、弥生時代の方形周溝3・土塙2、奈良時代の竪穴住居9・掘立柱建物2・土塙25、平安時代の土塙1、鎌倉時代の溝5などである。

(I) 弥生時代中期の遺構

方形周溝S X 4438・4456・4910、土塙S K 4912・4921がある。

S X 4438とS X 4456の東半分は第67次調査で既検出である。いずれも四隅に陸橋部をもつ。S X 4438は奈良時代の竪穴住居や鎌倉時代の溝によって大きく削平を受けているが、その規模は溝の内々で約8.6mと推定される。S X 4456は溝の内々で約8.5m、溝の長さ約5.5~6.7m、幅約1.3~1.7m、深さ約0.4mである。

調査区西壁際で検出されたS X 4910も奈良時代の竪穴住居に削平されている。四隅に陸橋部を持ち、溝の長さ約5.7m、幅約2.0m、深さ約0.3mである。

土塙S K 4912は長径1.2m、短径0.8m、深さ0.23m、S K 4921は長径2.2m、短径1.7m、深さ0.3m、(5)のほかに壺の破片なども出土している。

(II) 奈良時代前期の遺構

竪穴住居S B 4451・4906・4907・4913・4915、掘立柱建物S B 4900、土塙S K 4437・4457・4902・4926がある。

S B 4451の東半分は第67次調査で既検出のものである。遺構重複のため正確な規模は不明である。西壁中央部にカマドが取り付く。その埋道には長胴甕2個体を連ねて使用していた。カマドの右、北西隅に貯蔵穴を持つ。なお、第67次調査でも同様のカマドが北壁中央部に見られ、建て替えによる同規模の住居がもう1棟あったと考えなければならない。

S B 4915は切り合い関係から言ってS B 4451より新しく、5.0m×4.4m、深さ0.25mで、北東壁中央部にカマドを持つ。カマドの右側、東隅に貯蔵穴がある。

S B 4913は南側をS B 4914によって削平されるが、3.3m×(3.3)m、深さ0.3mである。カマドの跡は検出されなかった。(21~28)などが出土している。

調査区北側にあるS B 4906・4907は重複している上に、鎌倉時代の溝によって十文字に削平を受けているため、正確な規模は不明である。

掘立柱建物S B 4900は4間×2間で、柱掘形に特徴がある。所謂溝もちの掘立柱掘形である。時期差を無視すれば、長野県の小田井前田遺跡、大阪府の観音寺遺跡などにも類例がある。竪宮跡では第64~3次調査で初めて検出され、その後古里地区では第68次調査でも2棟検出されている。それらはいずれも3間×3間、時期も奈良時代に限られている。同掘形による建物で桁行が4間あるのは今回を初例とする。なお、4間×2間の建物としては古里地区では11例目にあたる。過去10例とも奈良時代のものである。

S K4437・4457は第67次調査からの続きで、それぞれ西半分を検出した。両者は長径2.8m、2.5m、短径2.0m、1.6m、深さ0.4m、0.25mを測る。S K4902は長径2.8m、短径1.8m、深さ0.3m、須恵器杯や土師器高杯・皿などが出土している。

(III) 奈良時代中期の遺構

竪穴住居 S B4452・4928・4930、土塙 S K4904・4908・4916・4919・4927・4929・4938がある。

S B4452は大半が第67次調査で検出されている。3.6m×3.5m、深さ0.25m、北壁にカマドを持つ。S B4928は3.7m×(2.9)m、深さ0.2m。カマドは検出されなかった。住居内を鎌倉時代の溝が縱走して、削平を受けている。S B4930は(3.5)m×3.2m、深さ0.17m、北東壁にカマド跡が検出された。

S K4904は第74-3次調査区へ続く楕円形状の土塙で、北端はS D4431によって削平を受けている。S K4908は遺構重複のため正確な規模は不詳だが、径約1.5mと考えられ、S B4907を切り、後にS D4446によって削平を受けた。S K4916・4919・4927はそれぞれ、長径1.8m、短径1.4m、深さ0.1mの楕円形、長径1.7m、短径0.9m、深さ0.2mの不整形、径1.4m、深さ0.5mの円形を示す。

(IV) 奈良時代後期の遺構

竪穴住居 S B4914、掘立柱建物 S B4920、土塙 S K4924・4932・4934・4939がある。

S B4914はS X4910の周溝の一部とS B4913の南側を切り込む形で検出された。壁際での検出のため、正確な規模は不詳である。カマドは検出されなかった。

S B4920は径約0.6m、深さ約0.5mの円形の柱掘形をもつ2間×2間の建物である。この規模の建物は古里地区ではこれが10例目に当るが、いずれも奈良時代のものである。

S K4924は1.9m×1.7m、深さ0.2mではほぼ正方形、S K4939は1.8m×1.7m、深さ0.25mの方形を示す。土師器杯や甕などが出土している。

以上(II)～(IV)のほかに奈良時代の遺構としては、S K4903・4905・4909・4911・4917・4925・4931・4936・4937、S X4935がある。

S X4935は径0.7m×0.5m、深さ0.25mの掘形で、埋土中に焼土や炭化物が含まれていた。土師器の長胴甕が出土しており、あるいはここで煮炊きをした可能性も考えられる。

(V) 平安時代前期の遺構

S K4923がある。長径1.1m、短径1.0m、深さ0.3mを測る。細片ながら土師器杯・皿・甕が出土している。

平安時代の建物は今回第72-1次で初めて確認されたわけだが、更に範囲を広げて調査すればこの時代の遺構はもっとあると考えられる。

(VI) 鎌倉時代前半の遺構

溝 S D4425・4446・4490・4901・4933がある。

S D4425は第67次・71次調査区から続く溝である。幅0.4~1.0m、深さ0.15~0.25m。溝幅は南の方で徐々に狭くなる。東西方向に流れるS D4446・4490は幅0.8~1.9m、深さ0.3~0.5mで、S D4425より新しい。S D4901は第71次・74次調査区へ続く溝である。幅0.8m、深さ0.4mであった。墨書きのある山茶碗の底部が出土している。

(VII) 時期不明の遺構

出土遺物の状況から土塗 S K4918・4922は時期不明とせざるを得ない。

(VIII) 遺物

弥生時代中期の遺物には甕(5・6)と壺(8~10)がある。(5)は口径14.8cm、推定器高18.0cm、乳褐色で胴部外面と口縁部内面にハケメを施す。(6)は口径18.0cm、器高は不詳で、赤褐色を呈し、内外面ともに明瞭にハケメがなされている。口縁部には刻目が施してある。(5・6)の外面にはスヌが付着している。(8)は口径17.2cm、乳褐色で、頸部と口縁部内面にハケメがあり、口縁端部には波状文と刻目を施している。(9)の口径は6.0cm、赤褐色で、頸部から胴部にかけての部分にハケメを残し笠で沈線を巡らす。胴部はヘラミガキしている。(10)の口径は9.5cm、乳褐色で、口縁端部にハケメ、端部の下から頸部全体を縦位にハケメした後、横位に難なハケメを施している。胴部との境目の部分には波状文を巡らし、胴部はヘラミガキしている。

S B4913・4451出土の(21~29)は奈良時代前期に属する。(29)は同様の長胴甕がもう一個体あってカマドの煙道として使用されたものである。いずれも底部を打ち欠いているが、口径19.0~20.4cm、推定器高37.7~38.2cmである。(21~28)については前期の古い段階のものと考えている。

墨書き器(60)は「大」の逆字、(61)は「菌」と読める。S D4490出土の(79)は石硯である。斎宮跡では3例目に当る。(79)は水野和雄氏の型式分類によれば13世紀代の楕円硯I A cタイプに属すると思われる。鎌倉時代前半としたS D4490の時期と矛盾しない。

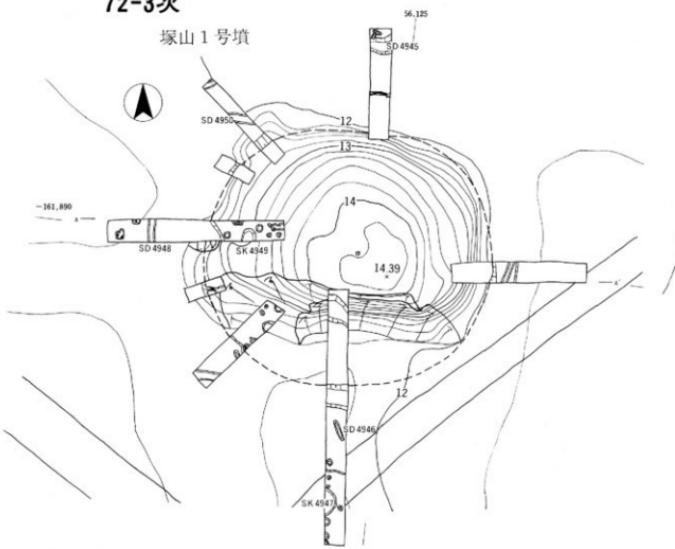
(C) 第72~3次調査

(I) 現況 塚山1号墳は博物館建設用地の西側にある。現状では墳丘裾周りの範囲は東西21m、南北15mである。墳丘上は7m×8mの広さで、平坦。標高は14.3mである。裾部から現在の墳頂部までの比高差は約2mを測る。墳丘の南側は大きく土取りされている。

(II) トレンチ 墳丘斜面から裾部の外へ向けて長短8本のトレンチを入れた。最初、東西南北4面に各1本ずつ設定し、北側のを第1トレンチとして時計回りに番号を付けた。墳形をは

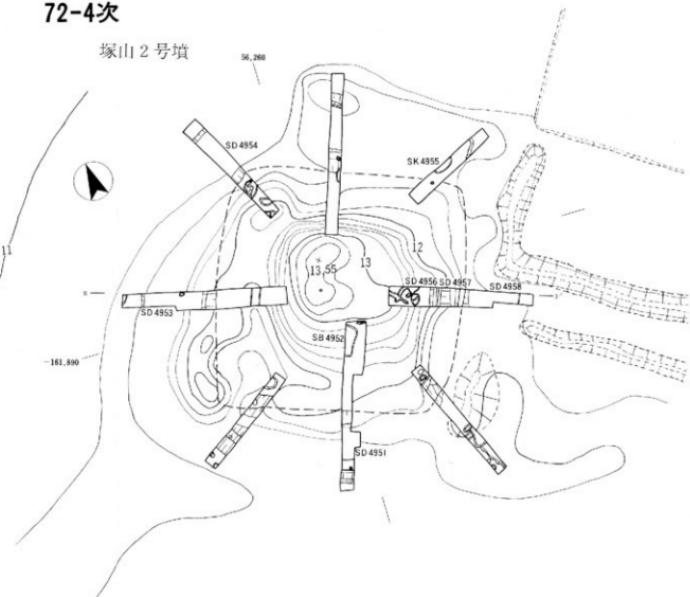
72-3次

塚山1号墳



72-4次

塚山2号墳



13.00m



12.00m

0

20m

第18図 第72-3次・72-4次遺構実測図 (1:300)

つきりさせるために西側斜面に更に4本のトレンチを設定した。3と4の間を第5トレンチ、1と4の間を第6トレンチとした後、4と5の間へ第7トレンチを、4と6の間へ第8トレンチをそれぞれ設定した。

第1～5トレンチは幅2m、第6～8トレンチは幅1m、各トレンチの長さは順に8.1m、10.2m、19.2m、13.2m、8.0m、8.1m、2.9m、2.8mである。地山までの深さは0.6～1.0mで、トレンチにより多少の差異がある。

(III) 概要 墳丘部の土層は基本的に大きく5層に分かれる。第1層表土、第2層茶褐色土、第3層暗黄褐色土、第4層暗褐色土、第5層黄茶褐色土(地山)である。第4層は第3・4トレンチ内で検出された弥生時代の土塙埋没後の旧表土である。それ以上が盛土である。第2層には流失の痕跡があるが、第3層にはそれは認められない。第3トレンチの北壁で盛土の断面を見ると、色調等により10cm前後の厚さの土層が13層確認できた。旧表土上から周溝を掘込んだ後、徐々に墳丘部の盛土をしたと考えられる。

第1及び第4トレンチを除く6本のトレンチで周溝内側の掘形を検出した。他は削平により不明である。従って周溝の幅や深さの正確な数値は分からぬが、上記6ヶ所の掘形を結ぶとほぼ円形を示す。1号墳は径約21mの円墳であったと考えられる。

トレンチ内から出土した遺物には須恵器の甕・杯・長頸壺などがある。いずれも包含層からの出土であり、かつ後述のようにかなりの削平を受けており、それらをもって1号墳の時期を確定することは今は避けたい。

掘部周辺は周溝外側の掘形が確認出来ぬほどに削平を受けており、その結果包含層中からは弥生時代中期の土師器片のはかに、奈良時代から鎌倉時代後半に至るまでの土師器片が混在して出土している。これをもってこの古墳の周溝の埋没時期に言及することはできないが、少なくとも鎌倉時代には人為的な削平が進んでいたことは否定できない。

(IV) 他の遺構と遺物 第1トレンチのS D4945は幅1.2m、深さ0.3m、奈良時代の土師器杯の細片が出土している。第3トレンチのS D4946は幅5.0m、深さ0.1m、奈良時代前期の土師器皿が出土している。S K4947は径約2.0m、深さ0.13mの土塙で、弥生式土器の破片ばかりが少量出土している中に流文水のものがある。第II様式か第III様式かの判断は出来ない。第4トレンチのS D4948は幅0.4m、深さ0.1m、ここから出土した遺物には(1・13・20)のほか奈良時代の土師器片がある。ただ、この溝出土の土器破片には包含層出土の破片と接合するもの多く、S D4948の時期は不明である。

S K4949は長径1m以上、短径1.1m、深さ0.27m、(2)の他にも、弥生時代中期の土器片が出土している。第6トレンチのS D4950は幅0.7m、深さ0.15m、鎌倉時代後半の山茶碗底部破片が出土している。

(D) 第72—4次調査

(I) 現況 博物館建設用地の東側にある2号墳はそのコンターラインから方墳であることが予想された。現状では、裾周りの範囲は東西14m、南北14mで、西側にはいびつな形に削平された跡がある。墳丘上には5m×4mの平坦部がある。墳頂部の標高は13.55mで、裾部との比高差は約2mを測る。

この古墳を地元の古老人は「田所さんのお稻荷さん」と呼ぶ。少なくとも戦前まではここにお参りをしたという記憶をもつ人は今も多い。天正年間に參宮街道が出来て以降、古里地域にあった竹川の集落は徐々に新街道筋へ移住したと言われているが、田所家は当地の旧家である。あるいはその家の屋敷神をここに祀っていたのかも知れない。最も新しい遺物には四文銭の一ツ「文久永寶」(1863年以降铸造)があり、「お稻荷さん」の歴史の一端を物語っている。

(II) トレンチ トレンチはまずコンターラインに垂直になるよう南西斜面のものを第1トレンチとし、時計回りに北西斜面に第2トレンチ、北東斜面に第3トレンチ、南東斜面に第4トレンチをそれぞれ設定した。更に対角線状に北側へ第5、東側へ第6、南側へ第7、西側へ第8トレンチを入れて、計8本とした。

第1・2・4トレンチは幅1.5m、第3・5・6・7・8トレンチは幅1mとした。但し第1・2・4トレンチでは、木の根を避けて一部分幅0.7~1.0mにしたところもある。以上第1~8までのトレンチの長さは順に、12.5m、12m、11.7m、10m、9.2m、7.3m、10m、8.4mである。地山面までの深さは平均して、周溝の外側で0.4~0.5m、周溝内では1.0~1.2m、墳丘裾部では0.8~1.0mであった。

(III) 概要 墳丘部の土層は基本的に第1層表土、第2層灰黄褐色土、第3層暗褐色土、第4層淡茶褐色土(地山)である。

第1トレンチの墳丘部の下で弥生時代中期の竪穴住居を検出したが、第3層はこの竪穴住居埋没後にその上面を覆っており、2号墳の周溝はこの第3層から切り込んでいる。従って第3層は上記竪穴住居埋没以後、2号墳築造以前の旧表土と考えられる。第2層以上が盛土で、それは周溝が掘り込まれたあとになされている。第2層の様子を第2トレンチ東壁で観ると約10cmの厚さの土層が10層確認された。

第1・2・3・4・5・8トレンチ内では周溝の掘形が確認できた。幅5.0~5.5m、深さ約0.6m。これを図上でつなぐと一辺18mの方墳である可能性が考えられる。

周溝のうちでSD4951・4953・4954・4958の埋土中からの遺物の出土状況をみると、周溝埋土下層からは弥生時代の土器片も混在するが、主として奈良時代の土師器杯・皿などの破片の他(15)が出土し、上層からは主として鎌倉時代前半の山茶碗などが出土している。このことから周溝は奈良時代にはかなり埋没しており、平安時代から鎌倉時代前半にはほぼ完全に埋没し

たものと考えられる。包含層からは鎌倉時代前期の山茶椀や土師器鍋がほぼ完形に近い形で出土しており、少なくとも中世以降人為的に削平が進んだと考えられる。

2号墳の時期については決め手を欠く。この付近で検出されている古墳の例を見ると、2号墳の北30mの所で復元径約14.5mの円墳の周溝(第68次調査)、同じく南30mの所で昭和47年に実施したC地区調査では「5世紀末～6世紀初頭の方形周溝5基と削平された古墳1基」が確認されている。2号墳がこれらと全く同時期か否かは不明だが、ここでは古墳時代後期の範疇に入ると考えておきたい。

(IV) 他の遺構と遺物 第1トレンチで弥生時代中期の壺(7)が出土したS B4952は2.3m×(1.0m以上)、深さ0.1mの竪穴住居である。第6トレンチの土塁S K4955は径1.6m、深さ0.15mで、鎌倉時代前半の山茶椀が出土している。第4トレンチのS D4956・4957はそれぞれ幅0.6m、1.3m、深さ0.2m、0.35mで、後者は鎌倉時代前半の溝である。

(E) まとめ

過去古里地区の調査において弥生時代の遺構は、A地区、C地区、D地区、第30次・36次・39次調査のほか、近くは第67次・71次調査でも検出されている。しかし、この時期の方形周溝が7基もまとめて検出されたのは今回が初めてである。これらはいずれも中期前半代に比定されるであろう。西に轍川を見おろす史跡西部の台地縁辺部は弥生時代の集落と方形周溝墓の群集する地域でもあったと想像される。

今回検出の方形周溝群はS X4730・4771・4783・4796とS X4438・4456・4910とにグルーピングしうる様相を呈している。両者を隔てる空隙地は約50mを測る。当地の弥生時代集落の在り方が墓制の上に反映された結果であるかも知れない。

古里地区に現存する2基の古墳についてはその規模と墳形が大略判明したと思う。時期については決め手を欠くが、いずれも古墳時代後期の範疇に入ると想定しておきたい。少なくともこの地域の古墳の削平は鎌倉時代にも相当進んだと思われる。

飛鳥時代の遺構は従来史跡の南西部に偏して顕著であったが、古里地区の北部にも竪穴住居のあることが判明した。更に北側にこの時期の建物群は広がるであろう。

奈良時代の遺構は予想に違わぬものであったが、平安時代の掘立柱建物が1棟ではあるが今回初めて確認されたことは、この時期の齋宮を考える上で新たな材料を得ることになった。

鎌倉時代の鍛冶工房については、齋宮寮とは切り離して中世村落の一端を示すものと言う考え方もあるが、時期的には十分豪王制度存続の期間内に入るものであってみれば、齋宮寮のために必要な鍛冶工房という視点からも非常に大切な遺構例ではないかと思う。

IV 第73次調査

6 A F F - B・C・E・G (西加座地区)

本年度第3回目の調査として実施した第73次調査は、通称中町裏といわれる字西加座地区で実施したもので、調査面積は約1,500m²、現況は畠地である。

昭和58年度の第51次調査区、昭和60年度の第61次調査区の西側にあたり、さらには第10次広域圈道路の調査区の東側にあたる。

これまでの調査結果から史跡の中央・東部には道路や区画溝による碁盤目状の方形地割りのあることが推定されている。今回の調査区は、北を東西溝S D 291、西を今回検出した南北溝S D 4976を東側溝とし、南北溝S D 520を西側溝とする道路によって区画され、東と南の区画は未確定であるが、推定一辺約120m前後の方形区画の北西隅にあたる。

第51次・61次調査では、奈良時代末期から平安時代末期に至る各時期の掘立柱建物92棟、土塙、井戸など多数の遺構が検出され、特に奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物のうち、S B 3120・3206・4032・4041・4077・4093の6棟が互いに柱通りをほぼ揃えており、計画的な建物の配置状況が確認されている。

今回の調査は、これまでの調査によって示唆されている区画溝と建物の配置の計画性、建物配置の変遷をこれまでの調査区とあわせて約6,000m²という面的な一画としてとらえることにより、さらに明確にすることを目的の一つとした。

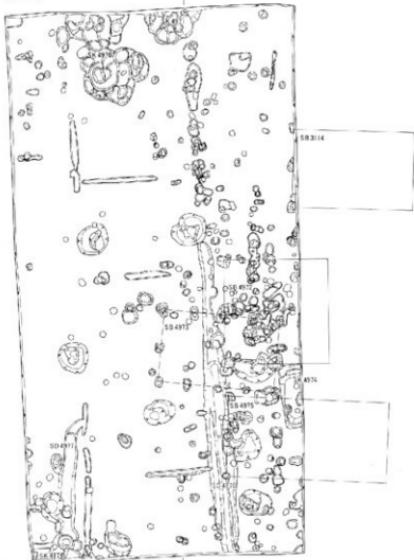
調査の結果、検出される遺構面は北で高く、徐々に南側に向かって傾斜しており、北では耕土下、約0.2mすぐ地山面となっていた。検出した遺構には、奈良時代後期の竪穴住居1・土塙4、奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物7・土塙1・溝1、平安時代前期の掘立柱建物13・土塙10、平安時代中期の掘立柱建物3・土塙1、平安時代後期の掘立柱建物2・土塙1・溝3、鎌倉時代以降の溝数条がある。

(1) 奈良時代後期の遺構

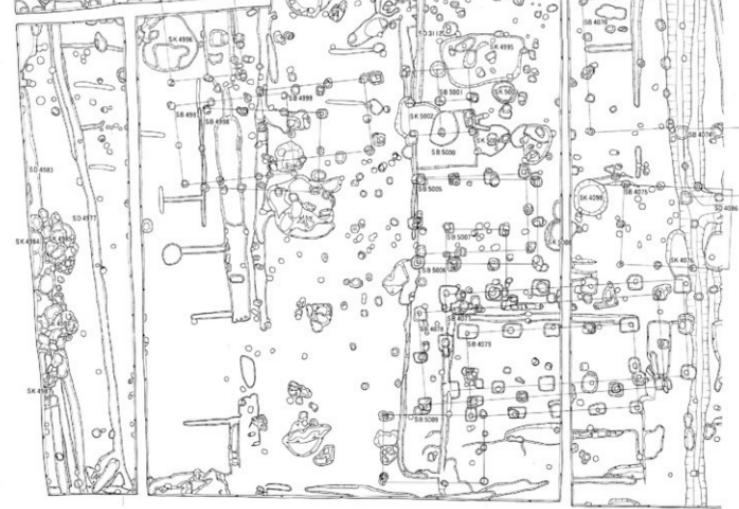
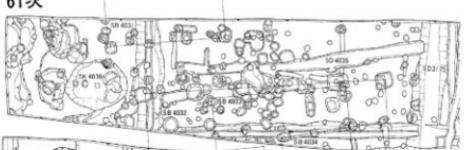
この時期の遺構は竪穴住居1・土塙4がある。

竪穴住居S B 5000は、調査区の南半中央にあり、規模は3.0m×2.8mで北東隅にカマドをもつ。住居内コーナーに設けられたカマドは第66次調査のS B 4395においても北東隅に見られたが、他の時期のものも含めると7例目である。東壁を奈良時代後期の土塙S K 5004に、北西のコーナーを平安時代前期の土塙S K 5002によって切られている。周溝および柱穴は確認されなかつた。埋土からは、土師器杯・皿・甕が出土している。なお、住居の深さは現存で約0.25mである。

73次



61次



第19図 第73次造構実測図（1:200）

土塙には北から S K4988・4995・5003・5004がある。S K5003のように $1.0\text{m} \times 1.3\text{m}$ の小さなものと、S K4995のように $4.0\text{m} \times 2.5\text{m}$ の大きなものがあるがいずれも深さは $0.2\sim 0.3\text{m}$ の浅いものである。土塙からは、土師器杯・皿・甕・鉢や須恵器杯・甕が出土している。S K5003からはカマドが出土している。

(II) 奈良時代末期から平安時代初期の遺構

この時期の遺構は掘立柱建物7、土塙1、溝1がある。

掘立柱建物は、北から S B3114・4032・4989・5001・4077・4078・4079であるが、S B4989・5001を除くと既に第51次・61次調査で確認されており、今回の調査により建物の規模が確定されたものである。特に、S B4032・4077・4078・4079は、柱掘形が一辺 $0.7\sim 0.9\text{m}$ と比較的大型の柱掘形を呈し、柱間 2.4 m 前後で柱通りの方向も概ねE 4° N にまとまる。S B4079が4間 $\times 2$ 間の東西棟であったが、S B4032・4077・4078は5間 $\times 2$ 間の東西棟であった。

南東隅における掘立柱建物の重複状況は、建て替え関係にあるものとみられ、このうち柱掘形の切り合い関係からS B4079→S B4077の順を確認している。特にS B4032とS B4077は互いに柱通りを揃えており、第51次・61次調査で確認されているS B3120・3206・4041・4093の4棟の建物を含めて合計6棟の建物が柱通りを揃えていることから、おそらく同時期に存在した建物と考えられ、計画的な建物配置が覗える。

S B4989は、当初、第61次調査で一部が確認されているS B4034としてまとまる建物を想定していたが、桁行の柱間寸法が西側2間分が 2.5 m と東側に比べて 0.8 m も広いことから、2間 $\times 2$ 間の東西棟の建物として考え、建物の時期も柱掘形の遺物よりこの時期のものとした。

2間 $\times 2$ 間の総柱建物S B5001は、その中心の柱列が、S B4032・4077の西側柱列と柱通りを同じくするものであるが、柱掘形も小さく、柱間も狭い。

土塙は、発掘区の北で、S K4974が検出されている。調査区外東へ続くもので南北は 3.0 m 、深さは $0.2\sim 0.3\text{m}$ である。土師器杯・甕・須恵器杯・甕が少量出土している。

溝は、発掘区に南北に通る溝S D4976で、溝幅は、南で 1.0 m 前後、北で 0.5 m 前後、深さは $0.2\sim 0.5\text{m}$ である。土師器杯・高杯・甕・鉢・須恵器杯・甕・長頸壺・鉢が出土している。出土量は少量である。

このS D4976は、第10次広域圏道路の調査の際に検出されている南北溝S D520とはほぼ並行する溝である。両者の溝は心々で約 13m の間隔であり、S D4976を東側溝、S D520を西側溝とするこの時期の幹線道路と考えておきたい。

(III) 平安時代前期の遺構

この時期の遺構は大きく3期に分れる。奈宮跡土師器編年の標識遺構であるS K1424→S K3127→S K2650に相当する時期である。S K1424に相当する時期を前I期、他を前II期として

まとめる。

前Ⅰ期S K1424に相当する時期の遺構は、掘立柱建物10、土塙10がある。

掘立柱建物はS B4033・4034・4069・4990・4991・4992・4993・4999・5007・5009がある。

前代の主要大型掘立柱建物は、S B4034・4990が4間×2間とやや規模を縮小して残るが、他は規模が縮小され3間×2間の東西棟を中心とした建物となる。なお、第61次調査で4間×2間の東西棟の建物が想定されていたS B4034は、今回の調査で3間×2間の東西棟の建物であることが確認された。

S B4069・4991・4992・4993は建て替えと考えられ、S B4993→S B4992→S B4069の順を確認している。また、S B4991→S B4069の順も確認しているが、S B4991とS B4992・4993の前後関係については判断し難い。

土塙は、同時期の土塙がいくつも重複していると思われる不整形な土塙S K4970・4971・4985・4986・4987、調査区外へ延び全容が明らかでないものがあるが、径2.7m前後の不整橢円形で、深さが0.5~0.6mのS K4068・4996や、径1.5m前後で深さ0.3m前後のS K4984・4994・5008がある。S K4068は第61次調査で一部が確認されていたものであるが、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・甕、製塩土器など整理箱で6箱分の土器が出土している。

次に前Ⅱ期のうちS K3127に相当する時期の遺構は、今回は検出されず、S K2650に相当する時期の遺構に掘立柱建物3、土塙1がある。

S B4972は、発掘区の北半中央東端で検出されたもので、第51次調査区までは延びない建物で2間×2間、柱間寸法2.6mの縦柱建物と考えておきたい。S B5005・5006は前Ⅰ期の3間×2間の東西棟の建物の建て替えが見られたところより10m程南に位置し、やはり3間×2間の東西棟の建物の建て替えと考えられる。柱掘形の切り合い関係よりS B5006→S B5005の順を確認している。

土塙はS K4980のみがこの時期に相当する。径1.0m前後、深さ0.3m前後で、土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

前期の遺構のうち、どの時期に相当するか判断のし難い遺構に土塙S K5002がある。奈良時代後期の竪穴住居S B5000の北西のコーナーを切っており、中央を鎌倉時代以降の溝S D3112に切られている。土師器杯・高杯・甕・鉢、須恵器杯・甕が出土している。

(IV) 平安時代中期の遺構

斎宮跡土師器編年の標識遺構であるS E3134の時期に相当するもので、掘立柱建物3、土塙1がある。

掘立柱建物は、発掘区北半で2棟、南半中央で1棟が検出されているが、S B4973・4975が4間×2間の東西棟、S B4998が3間×2間の東西棟の建物である。これらの建物は、柱通り

の方向が北に対して 2° ないし 5° 東へ偏るものでこれまでの建物と異なった方向を示す。これは、これまで行った第51次・61次調査でも同じような傾向が窺われ、この時期に何らかの理由で、建物の方向が大きく転換する一時期が存在することが今回もまた確認された。

土塙 S K4981は、前Ⅰ期にも見られた、同時期の土塙がいくつも重複していると思われるものである。中央を平安時代後期の溝 S D4977に切られているが、この土塙は、奈良時代末期から平安時代初期の幹線道路の中央に営まれたもので、既にこの時期には道としての機能がなくなっていたことを示している。折戸53号窯期の時期の灰釉陶器皿・楕が出土している他、土師器杯・皿・甕が出土している。

(V) 平安時代後期の遺構

斎宮跡土師器編年のS E2000からS K1730・1074に相当する時期の遺構をこの時期のものとしている。前者を後Ⅰ期、後者を後Ⅱ期としてまとめる。

後Ⅰ期、S E2000の時期に相当する遺構は、溝2、土塙1がある。

溝 S D4979・4983は、ほぼ並行する。幅0.4~0.5m、深さ0.1~0.15mの溝であるが、両者は、溝の心々ではほぼ2.5m前後であり、やはり、この間は道を想定しておきたい。

S K4978は、北の発掘区の南端で検出されたもので、S D4977よりは古いことが埋土の切り合ひ関係で確認されている。土師器杯・皿・甕が出土している。

後Ⅱ期の時期に相当する遺構には掘立柱建物2がある。

S B4982は5間×2間の南北棟、S B4997は3間×2間の東西棟の建物である。いずれも柱通りの方向は北に対して 7° 西に偏っており、北に対して西へ偏るという点で、再び前期の建物の柱通りの方向に戻る。第51次・61次調査でも同じような傾向が窺われ、建物の方向が大きく転換することが今回も確認された。

後期の遺構のうち、どの時期に相当するか判断し難いものに東西溝 S D4979がある。

(VI) その他の遺構

鎌倉時代以降の溝として第51次・61次調査で確認されている南北溝 S D3112がある。

(VII) 遺物

調査面積の割には遺物は少なく整理箱で約80箱しかない。これらは奈良時代後期から平安時代前期にかけての遺構から出土したものが大半で、平安時代中・後期のものは少なく、鎌倉時代以降の遺物はほとんど見られない。出土した遺物は土師器が中心で、須恵器、灰釉陶器は少ない。特殊な遺物としては、綠釉陶器24点、墨書き土器2点、奈良時代後期のものと思われる丸瓦・平瓦の破片16点などがある。

奈良時代後期の遺物は土塙から主に出土している。

土塙 S K4995から出土した遺物には、土師器杯・皿・蓋・甕がある。杯・皿ともに底部をへ

ラケズリしない、口縁部のみヨコナデする奈良時代後期でも新しい様相を持つものである。杯には、口縁部が外反し端部がやや内弯気味となる杯A(69・70)と内弯気味に立ちあがる杯B(68)、ほぼまっすぐに立ち上がる杯C(71)がある。口径は15.0cm前後のものと17.0~18.0cm前後のものと大小の区別がある。蓋(72)は外側にミガキが見られる。皿は口径が17.0~18.0cmで、器高は2.4cmのもの(73)と2.7cmのもの(74)がある。甕(75)は口径16.5cmと小型のものである。

土塙S K4988から出土した遺物には、土師器杯・皿・甕・鉢・鍋、須恵器杯・杯蓋・甕がある。杯(88)は、底部をヘラケズリし、口縁部をヨコナデするb手法で調整され、底部内面には不明瞭ながら螺旋状暗文が施され、口縁部下半にはミガキが見られる。口径は21.5cm、器高は3.7cmである。皿は、口縁部の下半までヘラケズリされ、口縁端部はヨコナデされるb手法で調整されている。他には、甕(91)・鍋(92)がある。須恵器は土師器と比べて出土数は少ない。杯(90)と杯蓋(89)がある。他の遺構から出土している須恵器には、土塙S K5003より小型甕(78)・杯(79)、土塙S K5004より杯(83)などがある。

奈良時代後期の遺物についてまとめるならば、土塙S K4995出土の杯・皿のように、比較的新しい様相を持つものと、土塙S K4988出土の杯・皿のように奈良時代の様相の根強いものとに大別できる。

次に平安時代前期の遺物については、前I期の比較的まとまった資料が土塙S K4068・4994から出土している。また、今回の調査で出土の遺物はほとんどが前I期のものである。

土塙S K4068は、第61次調査で既に確認されていたもので、その際出土の遺物もあわせて今回まとめてみた。出土した遺物には、土師器杯・皿・甕・須恵器杯・杯蓋・製塩土器など整理箱で6箱ある。

土師器杯は、底部外面を指先でナデツケ、口縁部をヨコナデするe手法によって調整されている。口縁部がなだらかに外反する杯A、ヨコナデの部分をナデの部分との境界が明瞭で強く外反する杯B、口縁部が内弯気味に立ちあがる杯C、底径が小さく長めの口縁部がまっすぐに外方へ開く杯D、底径は大きく短めの口縁部がまっすぐに外方へ開く杯E、口縁端部内面に面をなす杯Fがある。

杯Aは、口縁端部が明瞭に内弯するもの(12~15)と丸くおさまるもの(16~18)があり、両者とも口径は13.0~14.0cm前後のものと15.0cmをこえるものとがある。杯Bは口径が12.8cm前後のもの(22・23)、13.4cm前後のもの(19~21)、15.0cmをこえるもの(24)がある。杯Cは口径が12.0cm前後のもの(1・2)、13.0cm前後のもの(4・5)、13.4cm前後のもの(3・6・7)、16.0cmをこえるもの(8・9)がある。杯Eは口径が11.4cmと小ぶりな(25)と13.2cmの(27)がある。杯Fは口径が15.0cmの(28)のみである。大別するならば、13.0cm

以下のもの、13.0~14.0cmのもの、15.0cmをこえるものとなり、法量の規格化が進んだものと思われる。出土した杯のほとんどがe手法で調整されるものであるが、b手法で調整されているものもある。口縁部内面にミガキのみられる(11)と、底部外面に「七」のヘラ記号のみられる(41)である。

土師器皿は、杯と同様にe手法で調整されるものである。底部と口縁部との境が明瞭でなく断面弓状となる皿A、口縁部が外反する皿B、口縁部がまっすぐ外方へ延びて底部との境が明瞭な皿C、奈良時代の特色を残す皿Dがある。皿Aには口縁端部が丸くおさまる(30~34)と端部に細い沈線をもつ(29)とがある。皿B(37)は杯Bと似た様相を示すものである。皿Cには、器高が2.4cmと深い(36)と2.0cm以下の(35・38・39)がある。皿Dは器高が2.5cmと深い(40)がある。

台付皿(44)は口径23.2cm、器高3.6cmで、口縁部下半にはハケメが見られる。甕は、口縁部と体部細片がほとんどである。大型のもの(45~47)と(48)のように口径12.5cm、器高が約9.0cmと小型のものがある。須恵器には杯蓋(42)と杯(43)がある。製塩土器は口径が19.2cmのもので、いわゆる志摩式製塩土器と呼ばれるものである。

S K4994出土遺物には、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、黒色土器椀、製塩土器がある。

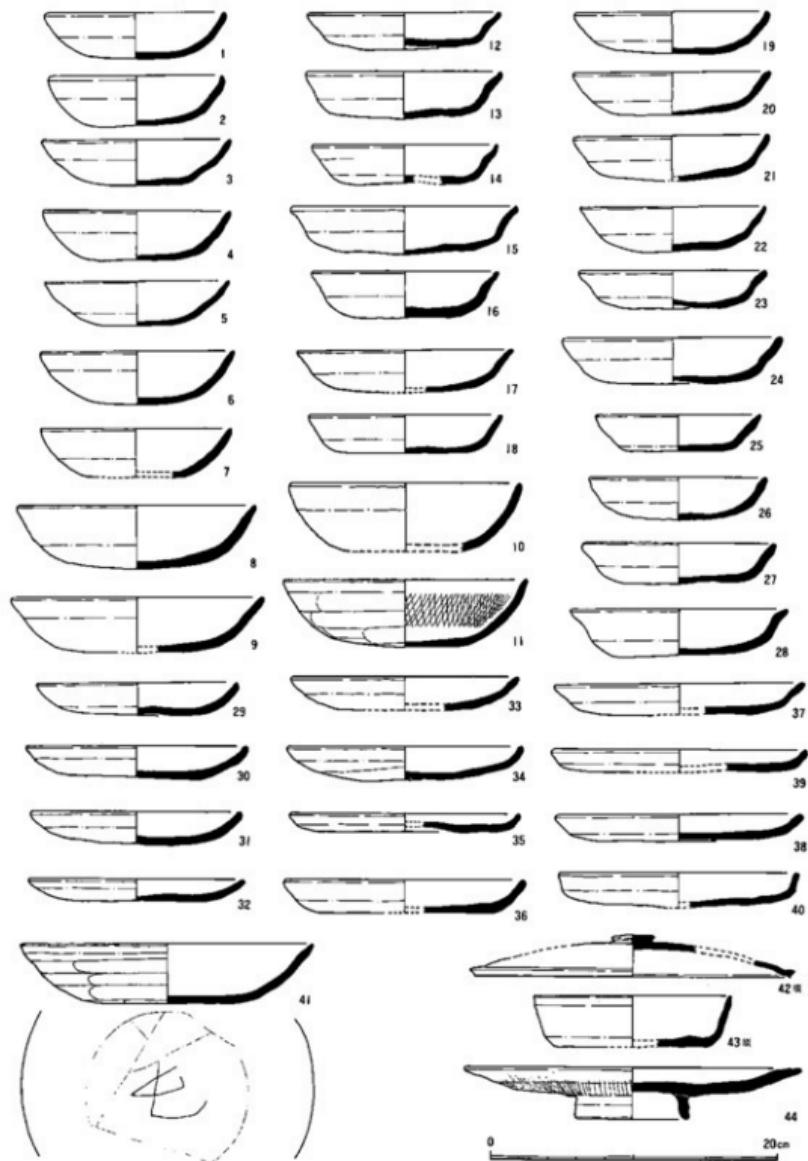
土師器杯は、S K4068の分類の杯Aが出土している。いずれも口縁端部は内弯するものである。口径により、13.0cmまでのもの(50~52)、14.0cmをこえるもの(53・54)がある。

杯(55)はe手法で調整されるものであるが、口縁部内面にミガキが見られる。口径17.9cm、器高4.9cmと椀に近いものである。皿(56~58)は口縁部がなだらかに外反し、口縁端部が内弯するものである。杯・皿とともにe手法で調整されるものであるが、奈良時代的な様相を残すものである。黒色土器(61)は、口径16.5cm、器高5.9cm、外面は赤褐色でヘラケズリの後、ヘラミガキ、内面は黒色でヘラミガキが施されている。いわゆる、黒色土器A類である。甕(59)は外面はハケメ、内面は横方向のヘラケズリを行っている。他には、高台を持つ須恵器杯(60)がある。

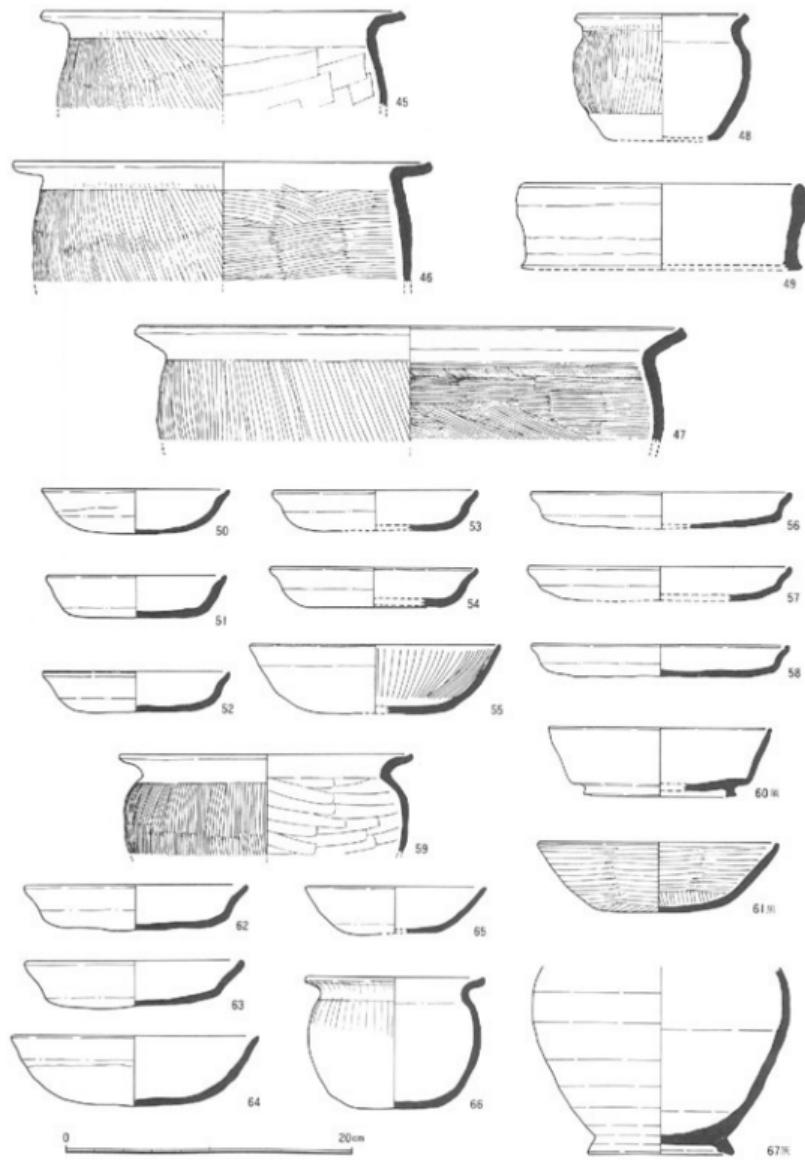
S K4970出土遺物には、土師器杯・甕、灰釉陶器長頸壺がある。杯には杯A(62・63)と杯D(64・65)がある。甕(66)は、口径12.5cm、器高9.3cmと小型のものである。灰釉陶器長頸壺(67)は、体部上半を欠くが、墨笔14号窯期の時期に相当するものである。

その他の前I期の遺物としては、S K4984出土の土師器甕(94)は、口径15.8cm、器高15.6cmで球形に近い甕である。S K4985からは、土師器鉢(93)が出土しているが、内面底部に黒色の付着物が見られた。

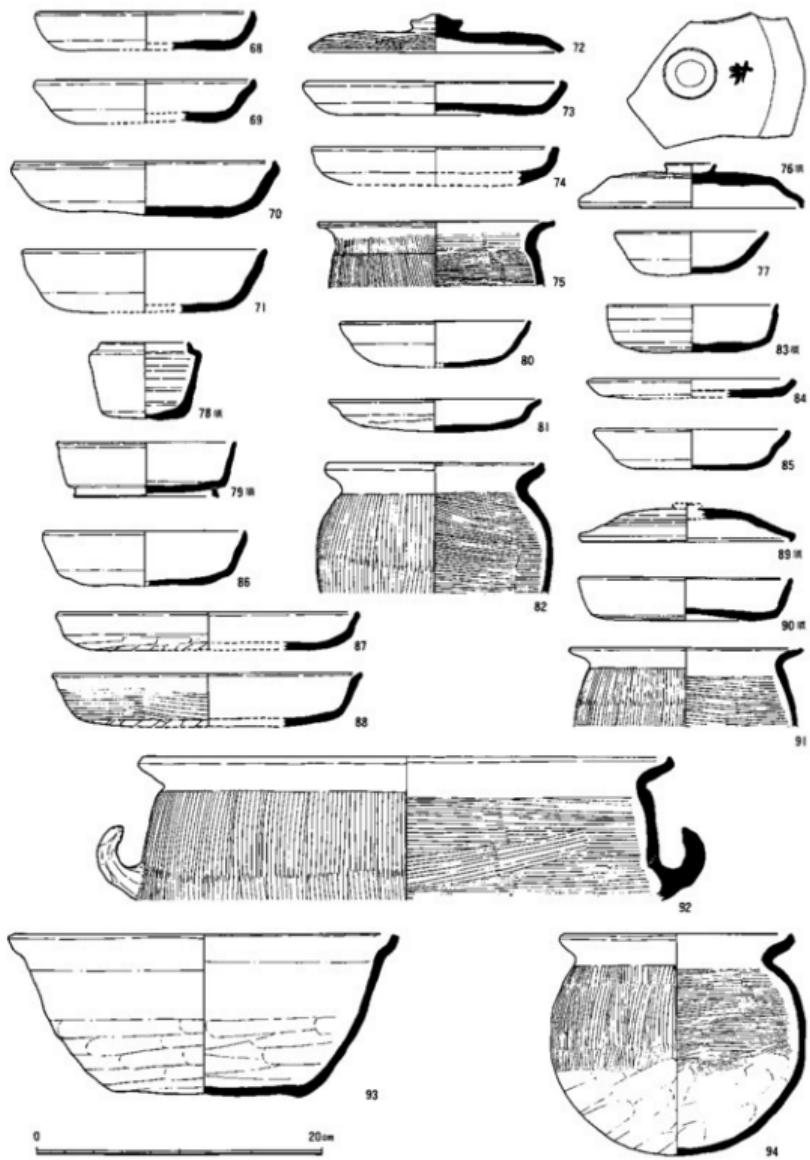
特殊な遺物として、「井」の墨書きされた須恵器杯蓋(76)がある。また、これまで斎宮跡では、約70点の瓦の破片が出土しているが、今回の調査では、16点の瓦が出土している。図



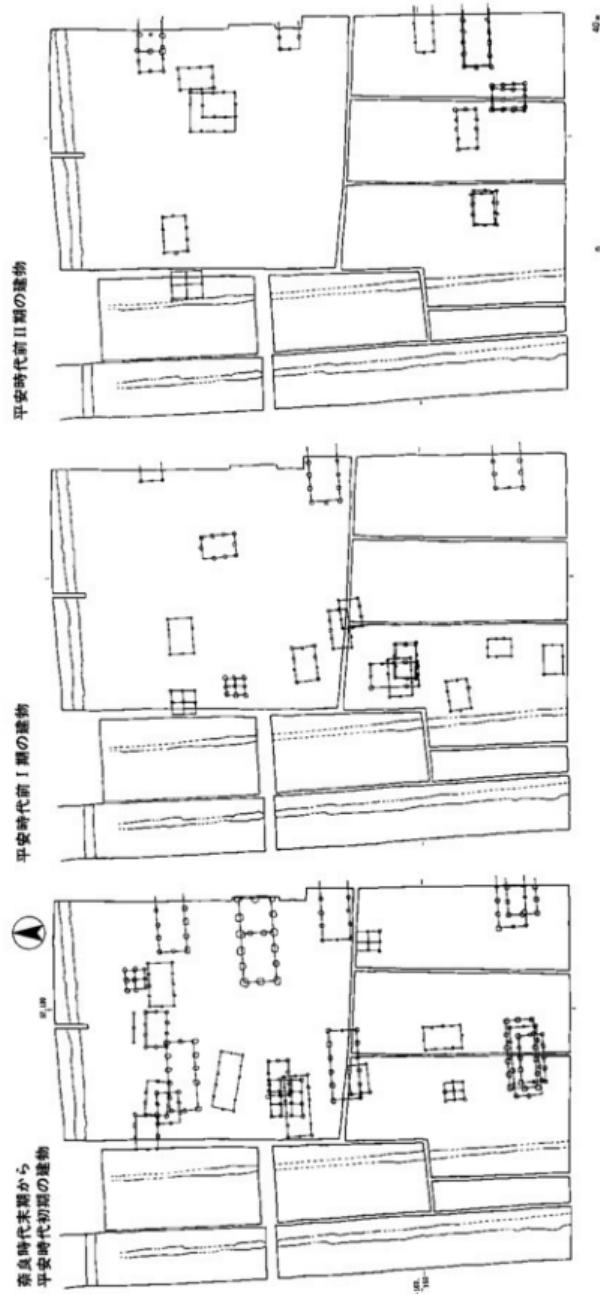
第20図 第73次出土遺物 S K 4068; 1~44



第21図 第73次出土遺物 S K4068; 45~49、S K4994; 50~61、S K4970; 62~67



第22図 第73次出土造物 SK4995; 68~75、包含層; 76、SK4987; 77、SK5003; 78~79、
SD4983; 80~82、SK5004; 83、SK4986; 84~85、
SK4988; 86~92、SK4985; 93、SK4984; 94



第23図 握立柱建物の配置変遷 (1 : 1000)

示はしえなかったが、丸瓦・平瓦の断片がほとんどである。外面に縄目タタキ、内面に布目を残すものがあり、時期的には全て奈良時代後期のものである。

(VIII) まとめ

今回の調査では、方形地割りの西側を区画する道路の東側溝と考えられる S D 4976が確認されたが、整然と配置された建物及びその時期的な推移についてはこれまでの調査による知見を再び確認する結果を得た。以下、第51次・61次調査の結果とも合わせて簡単にまとめてみたい。

まず、奈良時代末期から平安時代初期の建物は、第51次で12棟、第61次で10棟、第73次で2棟の合計24棟が確認されている。これらの建物のうち主要な建物は5間×2間の東西棟の建物である。概ね柱間は2.4 m (8尺) 等間で、柱通りの方向は北に対し西へ4° 傾る建物である。これは、S D 4976が北に対して4°~5° 西へ偏っており、S D 291も同じ関係にあるところから、この時期の建物の造営が区画溝あるいは道路と非常に関連の深い配置を行っていたことを示すものである。また、建て替えはそれぞれの場所で1回から2回行われているようである。

こうした建物配置は、平安時代前Ⅰ期までは、建物の規模・柱間は縮小されるが、ほぼ踏襲されるようであり、今回、新たに確認された7棟を含めて17棟の建物が確認されている。やはり、1回から3回建て替えが行われている建物が見られる。

今回の調査では、前Ⅱ期の建物は3棟が確認されているが、この時期になると今まで建物が建てられていた場所に重複するのではなく、これまで空閑地であった、特に調査区の南部に建物が形成される。この時期に建物配置の第一の画期が認められるのである。

平安時代中期になると、今回の調査で確認した3棟を含め、前代まで北に対して西へ偏っていた建物が、北に対して東へ偏る建物となる。何らかの理由で建物の方向が変化したもので、これが建物配置の第二の画期と考えられる。

平安時代後期になると、再び建物の偏りは、北に対して西へ偏るものへ戻る。これを建物配置の第三の画期と考えたい。

以上のような建物の規模や配置の動向は、第51次・61次・73次の調査での見方であるが、宮城の中・東部に見られる碁盤目状の方形地割り全体に通じるものであるかどうかは、今後の調査によって面的に把握されることにより解決されることであろう。

第51次調査では、S D 291は平安時代中期に埋没することが確認されているが^c、今回、検出した S D 4976も、その埋土に中期の建物の柱掘形が掘られていること、S D 520との間約13m の幹線道路に中期の土塙 S K 4981が見られることにより、この区画が中期のある時期には崩れ始めているようであり、建物の方向が急変していることからも、この時期に斎宮寮としての機構に何らかの大きな変化があったことが想定される。

V 第74次調査

6 ABE・F (古里地区)

博物館建設予定地の調査は、今年度第71・72次調査と昨年度の第67・68次調査の4回の計画調査が実施されているが、今回の調査はその補足調査として昭和62年10月29日～12月25日にかけて実施した。調査区はこれまでの第67・68・71・72次調査地の周辺に5ヶ所設定し、総面積は790 m²である。出土した遺物は全体で整理箱33箱、墨書き土器は13点である。以下第74-1～74-5次調査に分けて述べることにする。なお、遺構図については付図を参照のこと。

(A) 第74-1次調査

第72-2次調査の西に接する位置で、東西6m、南北18mのトレンチを設定した。遺構面までの深さは0.4mで、検出した主な遺構には、弥生時代の方形周溝1・土塙1、奈良時代の掘立柱建物1・掘立柱塙1・溝1・土塙2、鎌倉時代の溝2がある。出土した遺物は整理箱で6箱ある。

(I) 弥生時代の遺構

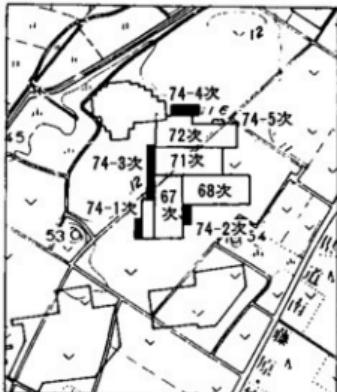
方形周溝S X5020は、調査区中央部にあり幅1.0m、深さ0.1mの東西溝と、その南4mの位置に残りの悪い南北溝があり、方形周溝と思われる。さらに東に延びるものであるが規模は不明である。弥生時代中期の遺物を少量出土している。

土塙S X5021は調査区中央にある東西3.0m、南北1.0m、深さ0.2mのもので弥生時代中期の遺物を少量出土している。方形周溝の可能性もある。

(II) 奈良時代の遺構

掘立柱建物S B5025は調査区南にある東西2間、南北2間以上の規模で、棟方向は北で東に26°振れる。また、掘立柱塙S A5022は調査区東北部にあり3間分検出した。方位は北で東に17°振れる。これらの柱掘形は径0.5mの円形で深さは0.4m前後である。出土した遺物がほとんどなく、奈良時代のものとしか判断できなかった。

東西溝S D5024は調査区南にあり、幅0.6m、深さ0.1mの浅い溝で、奈良時代前期の遺物を少量出土している。東の第72-2次調査では、浅いためか検出されていない。



第24図 調査位置図

土塙 S K4924・4931はいずれも第72—2次調査で東半分を検出している。遺物は奈良時代中期のものを少量出土している。

(III) 鎌倉時代の遺構

東西溝 S D4490は第67次調査地から続くもので、幅0.6m、深さ0.5mの比較的規模の大きなものである。南北溝 S D5023は調査区西側にあり、幅0.5m、深さは北端で0.1m、南で0.2mの北に向かって延びるやや小型の溝である。調査区北端ではやや東に蛇行するよう、第72—2次調査区のS D4901と同一の溝の可能性もある。いずれの溝も鎌倉時代前期の遺物を出土している。

(B) 第74—2次調査

L字状の第67次・68次調査地に接する位置で東西8m、南北16mのトレンチを設定した。遺溝面までの深さは0.5mと比較的深い。検出した遺構は鎌倉時代前半のもので、掘立柱建物1・土塙1・東西溝1・井戸1がある。出土した遺物は整理箱で6箱あり、特殊な遺物としては墨書き器が5点ある。

調査区西南隅に位置する掘立柱建物 S B4475は、第67次調査で検出したものの続きで、北東隅の柱を検出した。おそらく、3間×2間の南北棟と思われる。

土塙 S K5026は調査区北西隅にある東西2.5m以上、南北1.0m、深さ0.1mの長方形を呈する。北側の第68次調査では、同時期の掘立柱建物の東南隅には長方形の土塙が掘られたものがあり、同様な可能性もあるが建物については確認できなかった。

東西溝 S D4446は第67次調査から続くもので幅1.0m、深さ0.5mの規模を有する。東端では幅1.4mと広く、断面から2本の溝が重複していることが判明した。時期はあまり隔たらなもので作り替えと思われる。

井戸 S E5027は、東西溝 S D4446の南に位置する。遺構検出面では南北2.0m、東西3.0mの不整円形を呈するが、途中から径1.2mの円形を呈する。遺構面から1.5mまで下げたが完掘はしていない。

これらの遺構はいずれも鎌倉時代前期の遺物を少量出土している。ほかに径0.3m前後の柱穴を多数検出したが建物としてまとまるものはなかった。

(C) 第74—3次調査

第72—2次調査の北側で第67次・68次調査の西にあたる位置で東西6m、南北34mのトレンチを設定した。遺構面までの深さは0.3m前後と比較的浅く、検出した主な遺構には奈良時代の竪穴住居2・土塙4、鎌倉時代の溝6がある。出土した遺物は整理箱で5箱ある。

(I) 奈良時代の遺構

竪穴住居 S B 5030は調査区の南に位置し、東西4.2m、北側は搅乱によって壊されているため南北は4m以上である。深さ0.15m。北側中央部には焼土がありカマドの残存部と考えられる。奈良時代中期の遺物が少量出土している。S B 5029は調査区北側にあり、鎌倉時代の溝や搅乱によって壊されており、南北4m、東西4m以上、深さ0.1mである。遺物は奈良時代中期のものがわずかに出土している。

土塙 S K 4904・4905・5032は第72-2次調査から続くものでS K 4904が奈良時代中期、S K 4905・5032は出土した遺物が少ないが奈良時代の遺物を出土しておりS K 4904とあまり時期を離れてないものと思われる。また、S K 5731は遺物を出土していないが、奈良時代前期の竪穴住居 S B 5030より古いものである。

(II) 鎌倉時代の遺構

溝はこれまでの調査で検出されているものの続きで南の第67次から続く東西溝 S D 4431、第71次からの南北溝 S D 4727・4723・4722・4721と新たにL字形に折れ曲がる溝 S D 5028を検出した。S D 5028は調査区北端にあり、幅0.5m、深さ0.1mの規模である。これらの溝は、いずれも出土した遺物が少ないが鎌倉時代前期のものと考えられる。

ほかに調査区南で人頭大の石を多量に詰め込まれた土塙が検出されているが、遺物が出土していないため時期を決め難い。近世の耕作に伴う可能性もある。

(D) 第74-4次調査

第72-1次調査の北側で、東西24m、南北10mの調査区を設定した。検出した主な遺構には弥生時代の方形周溝1、飛鳥時代の竪穴住居1、奈良時代の掘立柱建物1・土塙2、鎌倉時代の溝8がある。出土した遺物は整理箱で11箱ある。

(I) 弥生時代の遺構

方形周溝 S X 5036は調査区中央部で検出した。西辺の南北溝は長さ4.4m以上、幅1.0m、深さ0.3mである。北辺の溝は一部検出しただけで、調査区外に延びる。また、南辺の溝は鎌倉時代の遺構によって壊されており、一部を検出しただけである。溝の内々の長さは南北6.4mである。東辺の溝は後世の溝によって壊されており、確認できなかった。遺物は弥生時代中期のものを少量出土した。

(II) 飛鳥時代の遺構

竪穴住居 S B 4770は第72-1次調査から続くもので、東西4.5m、南北4.2m、深さ0.3mの規模であることが判明した。北辺中央部では、カマドが検出されている。また、幅0.2m、深さ0.1mの周溝が巡っている。径0.4m、深さ0.3mの柱穴を2個検出している。前回の調

査でも南東部で1個検出しており西南部の柱穴については不明であるが、竪穴住居に伴う柱と思われる。遺物は飛鳥時代後半のものを少量出土した。

(III) 奈良時代の遺構

掘立柱建物S B5035は調査区中央北に位置し西列3間、南列3間検出しており、北列は西端柱穴のみ検出しただけで他は調査区外に延びる。東柱は検出していないが、おそらく、3間×3間の総柱建物と考えられる。柱掘形は径0.6mの円形で深さは0.4m。棟方向は北で西に36°振れる。奈良時代前期の遺物を出土している。

土塙は調査区西部で重複して検出した。SK5033は径3.6m、深さ0.3mの不整円形を呈する。奈良時代前期の遺物を少量出土している。また、SK5034からほぼ完形の須恵器長頸壺を出土した。

(IV) 鎌倉時代の遺構

検出した溝8条のうち5条(S D4722・4726・4781・4791・4792)は第72-1次調査から続くもので、新たに南北溝SD5037~5039を検出した。SD5037は飛鳥時代の竪穴住居SB4770と重複するもので幅0.5m、深さ0.3mの小さなものである。SD5038は調査区南端では幅が狭く1.0m、深さ0.1mであるが、北に向かって蛇行しながら広くなり北端では幅2.2m、深さ0.3mである。SD5039は調査区東北隅にある幅0.4m、深さ0.1mの規模の小さなものである。いずれの溝も出土した遺物は少ないが、SD4781は鎌倉時代後半に、他の溝は鎌倉時代前半と考えられる。

(E) 第74-5次調査

第72-1次調査の東北部で南北5m、東西10mのトレンチを設定した。遺構面までの深さは西端で0.4m、東端では0.7mである。検出した主な遺構には奈良時代前期の竪穴住居2・土塙1がある。出土した遺物は整理箱で7箱ある。

竪穴住居SB5040・5041は重複するもので、削平を受けたため西壁の一部と堅く締まる床面の一部を検出しただけで規模は不明である。このうち東にあるSB5040はSB5041より新しいもので、カマドを検出した。竪穴住居から出土した遺物は少ない。

土塙SK4860は第72-1次調査から続くもので、1.8mの不整円形を呈し、深さは0.4mである。奈良時代前期の遺物を少量出土している。

VI 第75次調査

6 A G F-C (西加座地区)

本年度第5回目の調査として実施した第75次調査は、宮城東部の字西加座地区で実施したもので、調査面積は約900m²、現況は荒地である。昭和58年度の第52次調査区の北側にある。

宮城中・東部において碁盤目状に走る区画溝による方形地割りの存在が想定されているが、今回の調査地はこの方形地割りの北から1列目、東から2列目にあたる。

これまで、この区画では第24次・52次・57次調査が行われている。第24次調査では正殿・後殿・脇殿といった計画的な建物配置が見られ、第52次調査では9世紀代の井戸及びそれに先行する建物群が確認されている。第57次調査では奈良時代末期から平安時代末期に至る数条の区画溝が検出されている。「殿司」と墨書きされた土器、円面硯、転用硯などの硯類が出土している。第75次調査は、これらの調査の成果と合わせ、さらに一区画の中における遺構の状況を明らかにする目的で実施された。

調査の結果検出した遺構には、奈良時代中期の土塙1、奈良時代後期の竪穴住居1・掘立柱建物1・土塙15、奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物2、平安時代初期の掘立柱建物1・土塙1、平安時代前期の掘立柱建物8・土塙8・塚1、平安時代中期の土塙1、平安時代後期の掘立柱建物3がある。

(I) 奈良時代中期の遺構

猿投塲編年の岩崎25号窯期に相当する時期の遺構をこの時期のものとした。土塙1がある。

土塙S K5072は発掘区南西隅の土塙群の中の一つである。西は発掘区外へ続き、北は土塙S K5070に切られている。深さは0.3~0.4mである。埋土からは、土師器杯・蓋・皿・カマド、須恵器杯・平瓶、鉄製紡錘車、ワゴ羽口などが出土している。

(II) 奈良時代後期の遺構

調査区北西隅の竪穴住居S B5074、掘立柱建物S B5062、土塙S K5064~5071・5073・5075、調査区中央北端の土塙S K5079・5080・5083~5085がある。

竪穴住居S B5074は、東西4.6m、南北5.7mで、長軸方向で北に対して3°西へ偏る。これまで斎宮跡で確認されているなかでも大きなものである。一部を土塙や柱穴によって切られているが四壁に周溝をもつ。周溝は幅0.1~0.2mで深さは床面より0.25m程である。主柱穴は確認されなかった。東壁中央に少量の焼土が見られ、S B5075の柱穴に切られており全容は明らかでないが、カマドがあった可能性もある。出土遺物は、土師器杯・蓋・皿・高杯・甕・鉢、須恵器杯・杯蓋・甕・平瓶等である。

掘立柱建物 S B5062は3間×2間の南北棟の建物である。柱掘形は0.7m前後の方形を呈するものである。柱間はおよそ7尺である。柱掘形は竪穴住居 S B5074を切っており、S B5074より新しい建物である。この区画の中では、これまでの調査でこの時期の土塙は数多く確認されていたが掘立柱建物の確認はS B3671について2棟目である。

土塙は、発掘区北西隅と中央北端で1.0~3.0mの不整構円形のものが多数検出された。そのほとんどが互いに切り合って土塙群を形成しており、土器をはじめとする廃棄物の捨場が一定の場所に限定されていたものと思われる。切り合い関係の明らかなものでは、S K5066→S K5068→S K5069、S K5066→S K5070、S K5079→S K5080、S K5084→S K5083の順を確認している。これらの土塙からは土師器杯・蓋・皿・甕・高杯・盤・鍋・須恵器杯・杯蓋・甕等が出土している。S K5079からは、把手付き鍋が出土しているが、把手が5ヶ所に付く珍しいものである。

(III) 奈良時代末期から平安時代初期の遺構

この時期の遺構は掘立柱建物2がある。

今回の調査区のはば中央に位置する掘立柱建物 S B5059・5060の2棟である。柱掘形は0.6m前後のやや丸いものとなり前代のものより小さくなる。どちらも3間×2間の東西棟の建物で同一場所における建て替え関係とみられる。柱掘形の切り合いから新旧関係はS B5060→S B5059である。

(IV) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物1、土塙1がある。

掘立柱建物 S B5058は、S B5059・5060の建て替えと考えられる。4間×2間で東に廂がつく。柱間は前代のものも含めておよそ7尺であるが廂柱間はおよそ5尺である。

土塙 S K5061は、調査区中央東端にあり、さらに東側へ続くものである。南北4.5m程、東西は1.5mが確認されている。深さは約0.3mと浅い。土師器杯・皿・甕・須恵器杯・高杯・甕が出土している。

(V) 平安時代前期の遺構

この時期の遺構は大きく3時期に分かれる。斎宮跡土師器櫛年の標識遺構であるS K1424→S K3127→S K2650に相当する時期である。S K1424に相当する時期を前Ⅰ期、他を前Ⅱ期としてまとめる。

前Ⅰ期S K1424に相当する時期の遺構は、掘立柱建物5、土塙6がある。

掘立柱建物はS B5076・5077・3249・3250・3251がある。

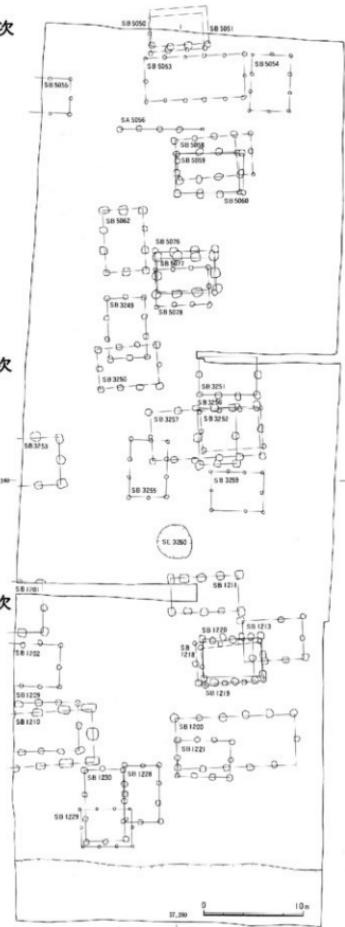
S B5076・5077は、発掘区南中央に位置している。3間×2間の東西棟の建物で同一場所での建て替えと考えられる。柱掘形はどちらも0.8~1.0mと大きく、確認された柱痕跡は、径0.3

75次



第25図 第75次造構実測図（1：200）

75次



m前後である。柱掘形の切り合いから新旧関係はS B5076→S B5077であり、S B5077の方がやや規模が小さくなるようである。

S B3249・3250・3251は、第52次調査で確認されていたもので今回の調査により規模が確定された。いずれも3間×2間の建物でS B3249が南北棟、S B3250・3251が東西棟である。

土塙は、北からS K5052・5057・5086・5087・5089・5090がある。大小様々なものがあり、S K5086・5087のように径1.2mの小さなものから、S K5089のように2.5m×2.7mの大きなものまであり、深さも0.2~0.5mである。出土遺物は、土師器杯・皿・甕・高杯・須恵器杯・杯蓋・甕等がある。製塙土器の断片がS K5052・5057・5086・5089から出土している。発掘区北端でさらに北に続くS K5052からは、灰釉陶器の風字硯も出土している。S K5089・5090の新旧関係はS K5090→S K5089である。

次の前II期のうちS K3127の時期に相当する時期の遺構は、掘立柱建物2がある。

調査区北端のS B5050・5051は北へ続く建物であるが、おそらく3間×2間の東西棟の建物が想定される。同一場所における建て替えと考えられ、柱掘形の切り合いから新旧関係はS B5050→S B5051である。

前II期のうちS K2650に相当する時期の遺構は、掘立柱建物1、土塙2がある。

S B5078は、柱掘形が0.5m前後の丸いもので小さくなるが前I期のS B5076・5077と同じ場所に建てられた3間×2間の東西棟の建物である。

土塙にはS K5082・5088がある。S K5082は、奈良時代後半の土塙群を切り込むもので、径2.0m前後の不整橈円形である。深さは0.2mと浅い。出土遺物は、土師器杯・皿・甕・須恵器杯・甕、灰釉陶器皿、製塙土器等である。S K5088は同時期の小さな土塙が重複しているもので、こうした土塙は、第37~4次調査のS K2413、第40次調査のS K2310、第57次調査のS K3726、第73次調査のS K4970・4971・4981・4985・4986・4987などに類例が求められるが、その性格については不明である。出土遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・杯蓋・甕・製塙土器である。

また、前期の遺構のうち、どの時期に相当するか判断し難い遺構に塙S A5056がある

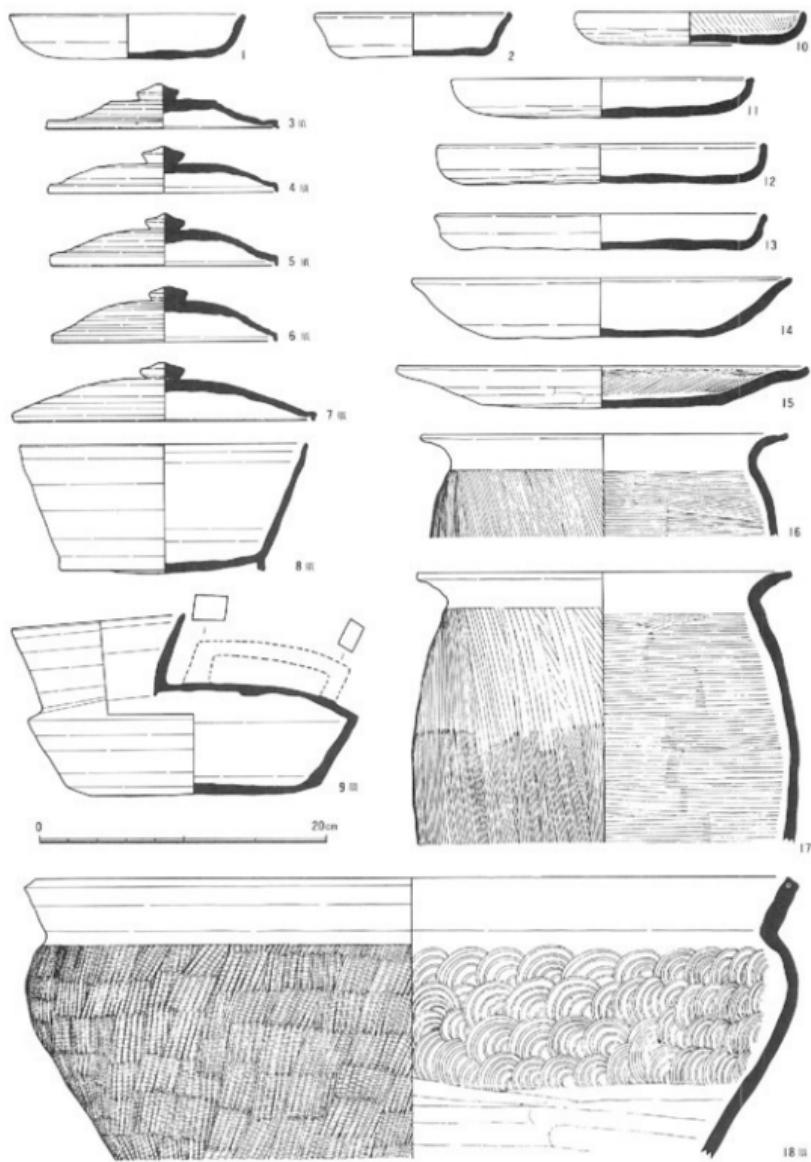
(VI) 平安時代中期の遺構

斎宮跡土師器編年の標識遺構であるS E3134の時期に相当するもので、土塙1がある。

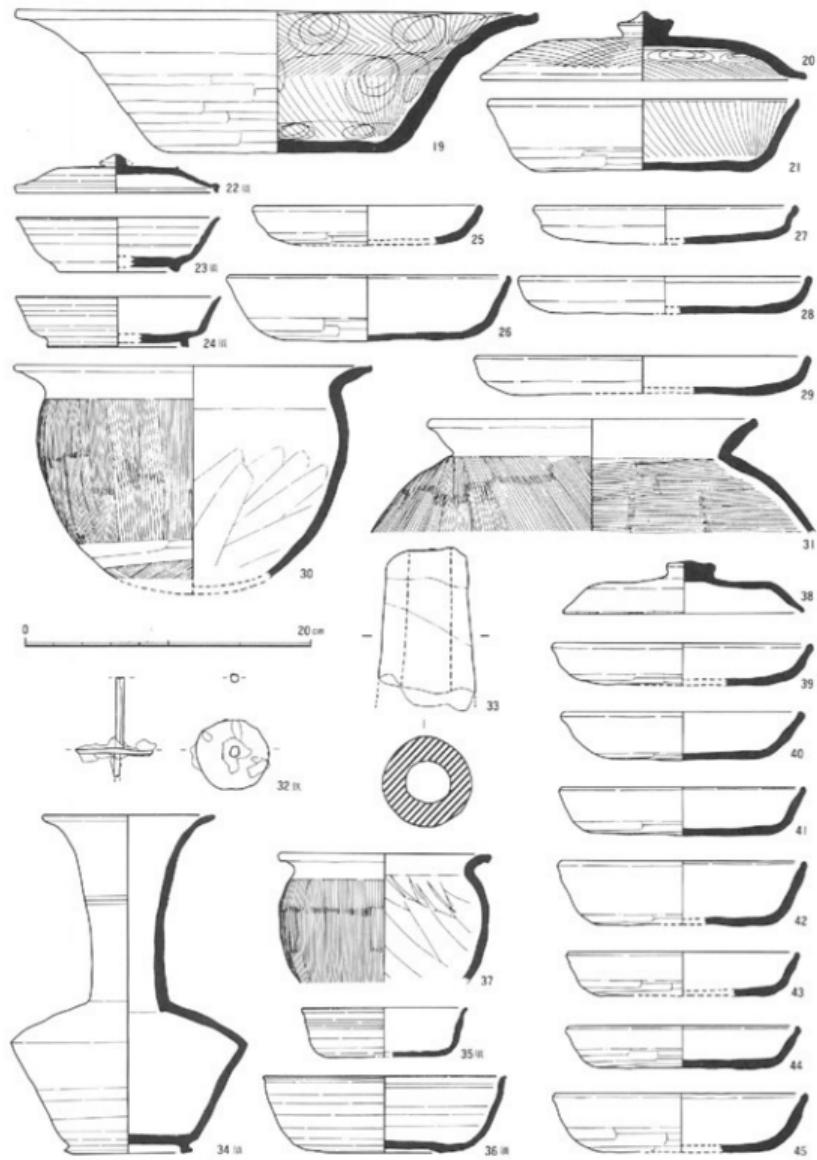
調査区の中央に位置する土塙S K5063は2.7m×2.0mの橈円形で、深さは0.1~0.2mと浅いものである。出土遺物は、土師器杯・皿・甕・須恵器杯・甕、灰釉陶器碗、製塙土器である。灰釉陶器碗は、折戸53号窯期に相当するものである。

(VII) 平安時代後期の遺構

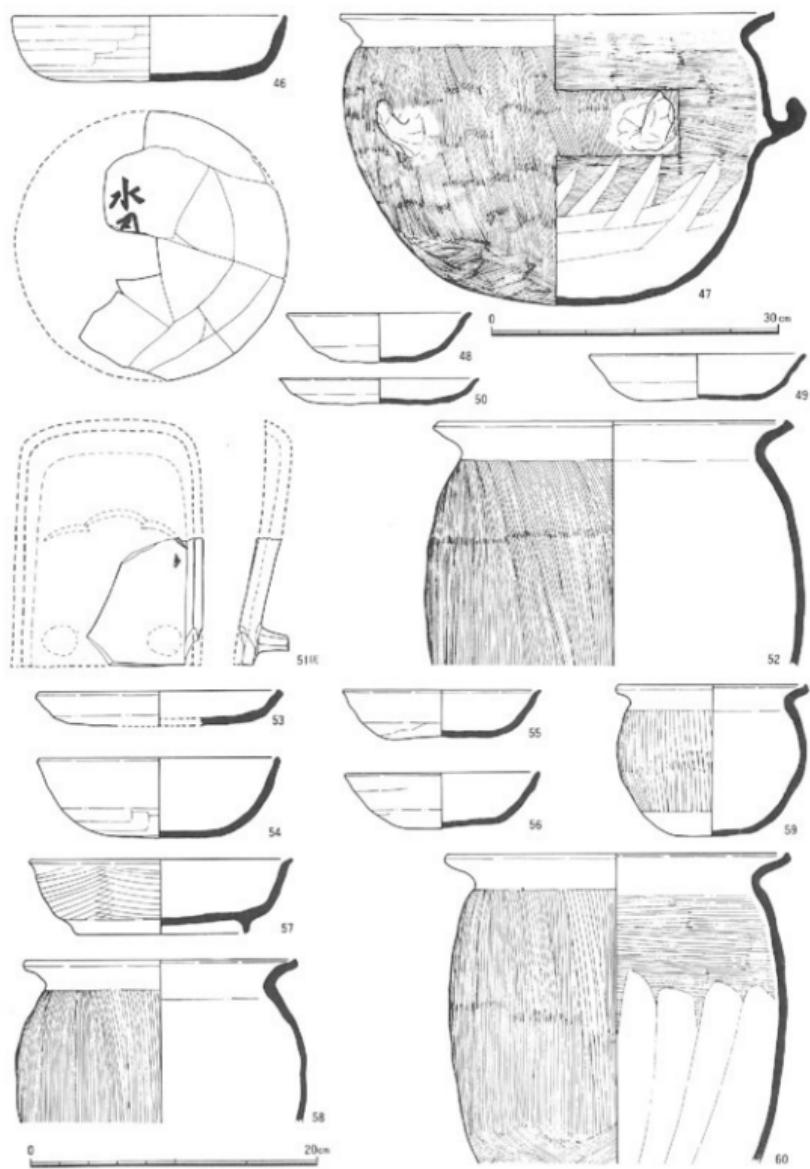
今回の調査で確認された遺構は後期の中でも、斎宮跡土師器編年の標識遺構であるS E2000



第26図 第75次出土遺物 SB 5074 : 1~18



第27図 第75次出土遺物 S B 5074 ; 19~21、S K 5068 ; 22~31、S K 5072 ; 32~45



第28図 第75次出土遺物 包含層；46、SK5079；47、SK5052；48～52、SK5061；53～60
(47は1:6)

の時期に相当する後Ⅰ期のものである。掘立柱建物3がある。

掘立柱建物SB5053・5054・5055は、いずれも調査区の北で確認されたものである。SB5053は調査区外の西へ続くため規模は不明であるが、SB5053は5間×2間の東西棟、SB5054は3間×2間の南北棟の建物である。いずれも、この時期になると柱掘形は0.3m前後で丸い小さなものとなる。

(VII) 遺物

遺物は比較的少なく整理箱で約90箱である。これらは奈良時代中期から平安時代前期にかけての遺構から出土したものが大半で、特に調査区北西隅の土塙群からは奈良時代後期の遺物が多く出土している。平安時代中・後期の遺物は少なく、鎌倉時代以降の遺物はほとんどない。特殊な遺物としては、綠釉陶器10点、「水司」の墨書き器1点、フイゴ羽口1点、鉄製紡錘車1点、瓦の破片1点などがある。

奈良時代中期の遺物は土塙から主に出土している。

土塙SK5072出土の遺物には、土師器杯・蓋・皿・カマド、須恵器杯・平瓶、鉄製紡錘車、フイゴ羽口などがある。斎宮跡土師器編年の標識遺構のSK1098・SK1970の時期に相当するもので、須恵器から岩崎25号窯期に相当する。

土師器杯(39~45)は口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリするb手法で調整されている。内面に(42)は螺旋状暗文、(45)は放射状暗文が施されているようであるが器壁の残りが悪いため図示はしていない。口径によって15~16cm前後の杯Aと17cm前後の杯Bとにわかれる。器高は杯A・杯Bとともに3.0~3.5cmであるが、杯Bのうち(42)が4.5cm、(45)が4.2cmと4cmをこえるものもある。蓋(38)は器壁の残りが悪いが、口縁端部をヨコナデし、内外面ともにヘラミガキが施されているようである。甕(37)は小型でざんぐりとした球形の体部のものである。

須恵器杯(35・36)は丁寧なつくりで、底部はどちらも回転ヘラケズリされている。鉄製紡錘車(32)は、円板の径が約5cmで、紡基の断面は方形を呈している。

奈良時代後期の遺物は、竪穴住居SB5074や調査区北西隅の土塙群、中央北端の土塙群から主に出土している。斎宮跡土師器編年の標識遺構のSK1291の時期に相当するもので、須恵器からは鳴海32号窯期から折戸10号窯期の古い段階の時期に相当する。

SB5074より出土した遺物は土師器杯・蓋・皿・高杯・甕・鉢、須恵器杯・杯蓋・甕・平瓶等がある。

土師器杯(1・2)とともに底部をヘラケズリしない口縁部のみヨコナデする奈良時代後期でも新しい様相をもつものである。杯(21)は、底部をヘラケズリし、口縁部をヨコナデするb手法で調整され、内面にはミガキ、放射状暗文が施されている。口径21.4cm、器高5.1cmと大

型のものである。蓋（20）は、外面ヘラミガキ、内面はミガキ、螺旋状暗文、放射状暗文の施される口径22.8cmのものである。皿（10～12）は底部をヘラケズリし、口縁部をヨコナデするb手法で調整されている。（10）は内面にミガキ、放射状暗文が施されている。皿（13）は口縁部をヨコナデし、底部をナデで調整されるe手法のものである。鉢（19）は、口径32.0cm、底径15.8cm、器高9.8cmのものである。外面は下半までヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、放射状暗文を3段施した後、螺旋状暗文を3段施している。

須恵器杯蓋には、口径が15～16cmの間の（3～6）と20.8cmと大きい（7）がある。器高は3～4cmであるが、（3）は器高がやや低く上部が扁平となる。

S K5068より出土した遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・甕などが出土している。土師器杯（25・26）ともに口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリするb手法で調整されている。皿は（27）が口縁部をヨコナデし、底部はナデで調整するe手法であるが、（28・29）は残りが良くないが底部をヘラケズリするb手法で調整されているようである。須恵器杯には高台のつく（23・24）があるが、（23）は青灰白色でやや焼成のあまい軟質のものである。

土塙S K5079より出土した遺物は土師器杯・鍋、須恵器杯蓋等がある。土師器鍋（47）は、口径はひずみがあるため43.0～46.0cm、器高は30.7cmである。体部外表面は、縱方向の、底部外表面は不定方向のハケメ調整、内面上半は横方向のハケメ調整、下半はヘラケズリが施される。体部上面に把手がつくが、把手は約25cm間隔で5個つくようであるが、4個現存している。

平安時代初期の遺物は主に土塙から出土している。

土塙S K5061出土の遺物には、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・高杯・甕等がある。斎宮跡土師器編年の標識遺構S K1445の時期に相当するものである。

土師器杯（54～57）のうち、（54）はb手法、（55・56）はe手法で調整されている。（54）は口径16.5cm、器高5.6cmと深く椀に近いものである。（57）は高台がつくもので口縁部外表面はヘラミガキが施され、内面にもヘラミガキが施されているようである。皿（53）は、e手法で調整され、底部と口縁部との境が明瞭でなく段面弓状となるもので、法量も口径16.6cm、器高2.4cmとこの時期によくみられるものである。甕は、小型のもの（59）、胴部が球形に近い形となるもの（60）がある。

平安時代前期の遺物は主に土塙から出土している。

土塙S K5052出土の遺物には、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器の風字硯等がある。斎宮跡土師器編年の標識遺構S K1045・S K1424の時期に相当するもので、灰釉陶器は、猿投窯編年の黒雀14号窯期に相当するものである。

土師器杯（48・49）は口縁部をヨコナデし、底部を指押さえのあとナデるe手法で調整される。皿（50）もまたe手法である。灰釉陶器風字硯（51）は全体の約1/4程の破片である。

その他特殊な遺物としては、調査区北西隅の奈良時代後期の土塙群中より出土した土師器杯(46)の底部に「水司」の墨書きがみられる。口径18.6cm、器高4.6cmである。口縁部近くまでヘラケズリするc手法のものである。奈良時代後期のものと考えられる。

(IX) まとめ

今回の調査で確認された遺構は、奈良時代後期から平安時代前期の遺構を中心である。

竪穴住居 S B5074については、從来から奈良時代の竪穴住居は掘立柱建物に先行するものであり、住居が竪穴住居から掘立柱建物へと移行する中にあって、掘立柱建物が居住用、竪穴住居が厨房として機能分化がなされたと考えられてきているが、今回のS B5074も奈良時代後期の掘立柱建物 S B5062の柱掘形が埋土に切り込んでおり、掘立柱建物に先行するものである。

掘立柱建物は、奈良時代後期から平安時代後期の建物まで15棟が確認されているが、そのうち8棟は平安時代前期のものである。建物の規模は3間×2間のものが多く、その多くは1つの区画内における中心的な官衙の建物に対する付属的な建物と思われる。第57次調査でも同じような傾向が窺われ、第57次調査区の西端部で確認されたS B3685・3715は大型の柱掘形をもつところから官衙を構成する主要な建物として位置付けが想定されているが、おそらく、第75次調査区と第57次調査区の間に主要な建物が想定される可能性が強まった。

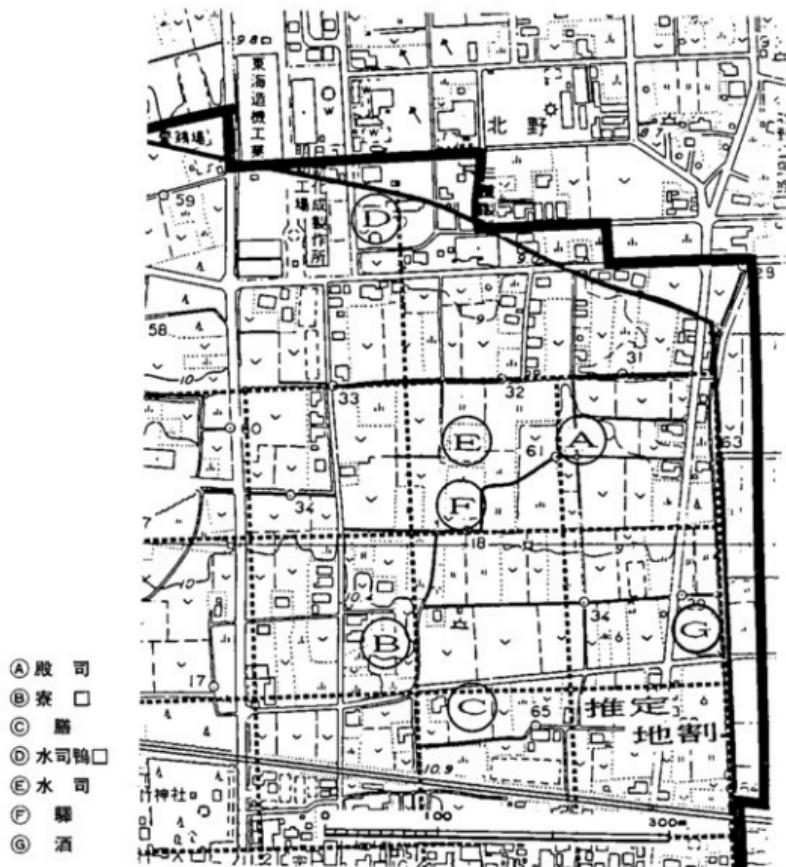
奈良時代後期の土塙群が確認されているが、これまでそれに関連するような建物があまり確認されていなかった。しかし、今回確認されたS B5074は、土塙群と何らかの関連をもつ建物と想定される。

遺物は、奈良時代後期から平安時代前期にかけてのものが主で、主に土塙から出土している。

S K5072出土の鉄製紡錘車は県下で6例目である。県下の他の出土地は、鈴鹿市の寺垣内館址、上野市の上寺遺跡、大山田村の西沖遺跡・三谷遺跡、歌野遺跡である。伊賀地方に多いようである。

今回の調査では、「水司」と墨書きされた土器が奈良時代後期の土塙群より出土している。これまでに文献資料『延喜式』から知られる斎宮寮13司の役所名に該当しうるものと考えられる墨書き・ヘラ書きされた土器は、昭和55年度に西加座地区で実施した第34次調査で240点に及ぶ綠釉陶器片とともに「寮□」の墨書き土器、昭和57年度の鍛冶山地区で実施した第46次調査では円面硯及び「膳」の墨書き土器、昭和59年度に東加座地区で実施した第57次調査では円面硯・転用硯とともに「殿司」と書かれた墨書き土器、昭和61年度に東加座地区で実施した第69次調査で「酒」と書かれた墨書き土器、さらには、昭和54年度に西加座地区で実施した第24次調査で「驛」と書かれた墨書き土器がある。今回と同じ水部司に関連する資料としては、昭和57年度に実施した第37-4次調査では、「水司鴨□」とヘラ書きされた土器が出土している。このように当地域一帯が斎宮跡の解明にとって重要な一郭であることはかねてより示唆されてきている。

今回の「水司」の読み方としては『和名類聚鈔』に載っている中央官制の主水司の万葉仮名による訓読み「毛比止里乃豆加佐」^{モヒシロノタカサ}が当てられる。この役所は主に水と氷を調達管理する役所である。第37-4次調査区とは約200mしか離れておらず、今回が2例目となった。しかし同じ区画内では「殿司」の墨書き土器も出土しており、奈良時代末期から平安時代初期の2つの役所（「水司」・「殿司」）の比定については今後十分な検討が必要とされよう。



第29図 官司名墨書き土器出土地点

VII 第70次調査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

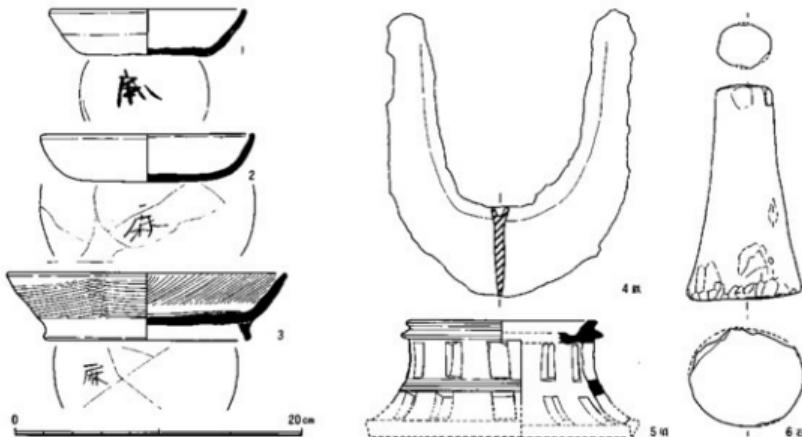
第70-1次調査 6ACC-X (江崎 個人住宅の新築)

申請地は宮城西部の塚山地区でも北に位置する畠地で、東西8m、南北22mの調査区を設定し、176m²の調査を実施した。検出した主な遺構には奈良時代前期の掘立柱建物S B5101・土塙SK5102がある。掘立柱建物は、東西2間、南北3間以上。土塙SK5102は、南北4.0m、東西5.0m、深さ0.5mの隅丸方形を呈する。土塙の遺物には土師器を中心に整理箱で10箱ある。鉄製U字形鍵先1、円面硯1、フイゴの羽口1の他、「麻」の字の残る墨書き土器(1)、ヘラ書き土器2(2・3)が出土している。他に方形土塙SK5103があり、埋土から焼土、骨、炭化物、銭、鉄釘等が出土していて、鎌倉時代以降の中世墓と考えられる。

全体の遺物は整理箱で28箱あり、特殊なものでは他に、包含層から用途不明の石製遺物(6)が出土している。高さ14.5cm、上円径3.2~3.7cm、下円径7.0~8.0cmの円錐形を呈する。上下の面は摩耗しており、朱の痕跡が薄く残っている。

第70-2次調査 6AEE-W (岡田 個人住宅の新築)

申請地は史跡中央北側にあたり、東西6m、南北2.1mのトレンチを設定し調査面積は12.6m²である。かつて漬物屋や農業実習所があったところでもあり、遺構はほとんど検出されなかった。奈良時代後期と平安時代後期の遺物が整理箱で2箱出土している。



第30図 第70-1次出土遺物 SK5102; 1~5 包含層; 6

第70—3次調査 6 A D R—I (大西 農業用倉庫の新設)

申請地は斎宮駅から南西約300mの位置にあり、史跡指定地の南辺にあたる地域である。調査は第9—2次調査の行われたトレーナーをはさみ西調査区30m²、東調査区230m²を設定して行った。検出した主な遺構は、東調査区では、奈良時代末期から平安時代初期の掘立柱建物SB 5110・溝SD 5108・土塙SK 5112、平安時代前期の掘立柱建物SB 5109・5111、鎌倉時代前期の溝SD 5107がある。検出した建物のうちSB 5110の柱掘形は、一辺1.0~1.2m、深さ0.8m、柱間は3.0m。SB 5109の柱掘形は、一辺0.8~0.9m、深さ0.4m、柱間は2.1mというようだ。史跡指定地の南辺にあたるこの地域ではあまり検出されていない平安時代前期の大型掘立柱建物である。また、西調査区では、鎌倉時代の土塙SK 5106を検出した。遺物は整理箱で7箱あり、特殊な遺物には、西調査区から縁軸陶器2点、二面円頭風字硯1点が出土した。

第70—4次調査 6 A C N—A・B・E・L (林 盛土)

申請地は斎宮小学校の東側に位置する。遺構面までの深さ、地下遺構の密度等の把握に主眼をおき、幅1mのトレーナーを約164m入れて調査を実施した。検出した遺構には、主に平安時代の東西溝や南北溝6・土塙3・井戸1がある。このうちAトレーナーで検出した東西溝SD 5118・5119は、小学校の調査で検出された四脚門に取り付く埠の南北両側溝と考えられる。この東西溝はB・C・Dトレーナーでは検出されていないため、途中で北側に曲がるものと思われる。遺物はすべてを合わせて整理箱で1箱と少なく、Cトレーナー南端の井戸SE 5125は完掘はしていないが、平安時代後期の遺物を少量出土している。

第70—5次調査 6 A E W—A (八田 農業用倉庫の増設)

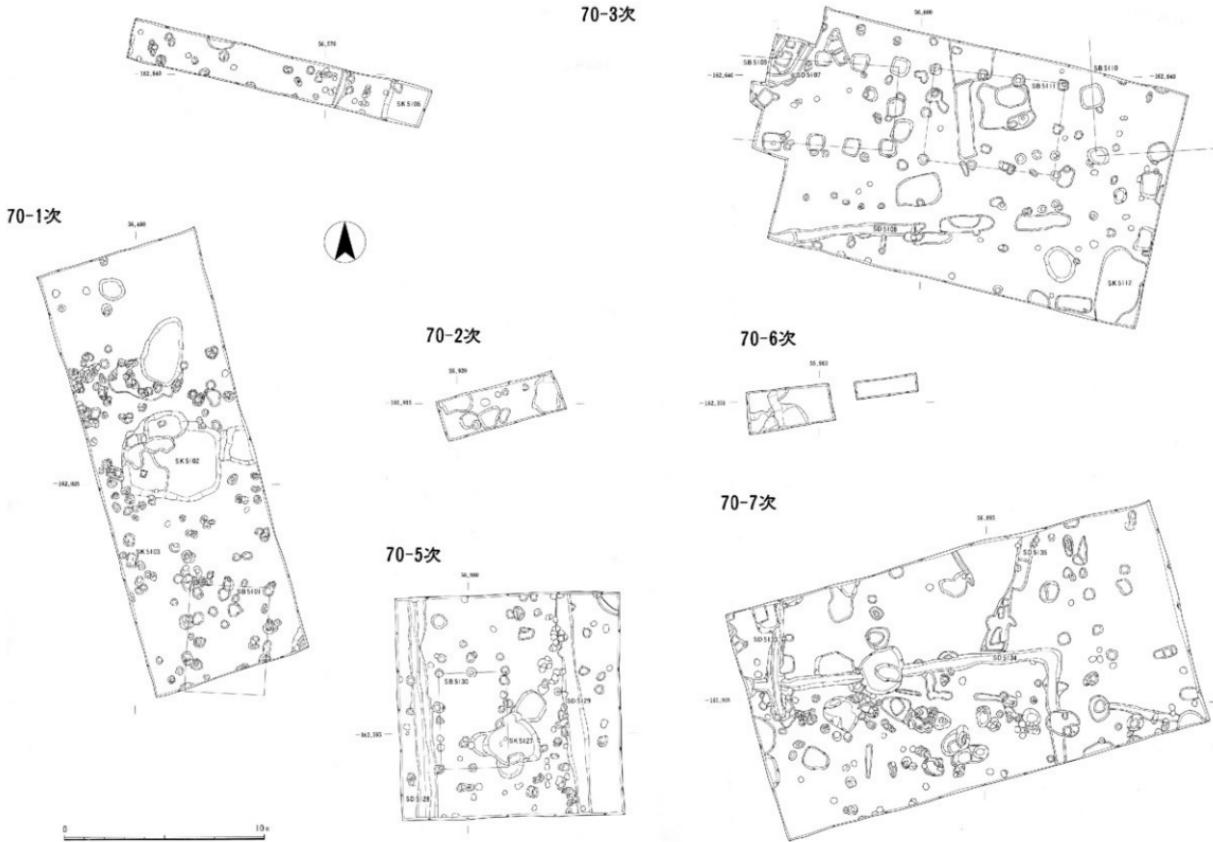
申請地は竹神社の南西約100mの箇所で、旧参宮街道の南側、史跡指定地の南辺にあたる地域である。検出した遺構には、奈良時代中期の掘立柱建物1、平安時代の溝2、平安時代後期の土塙1がある。SB 5130は3間×2間の南北棟の建物で、この地域で奈良時代の掘立柱建物が検出されたのは初めてである。SD 5128・5129は約8m間隔で並行する溝である。SK 5127は、径2.5m前後、深さ0.6mの不整筋円形を呈する。遺物は整理箱で9箱あり、特殊な遺物には縁軸陶器がSK 5127の5点を含め全体で10点出土している。

第70—6次調査 6 A B L—S (奥山 盛土)

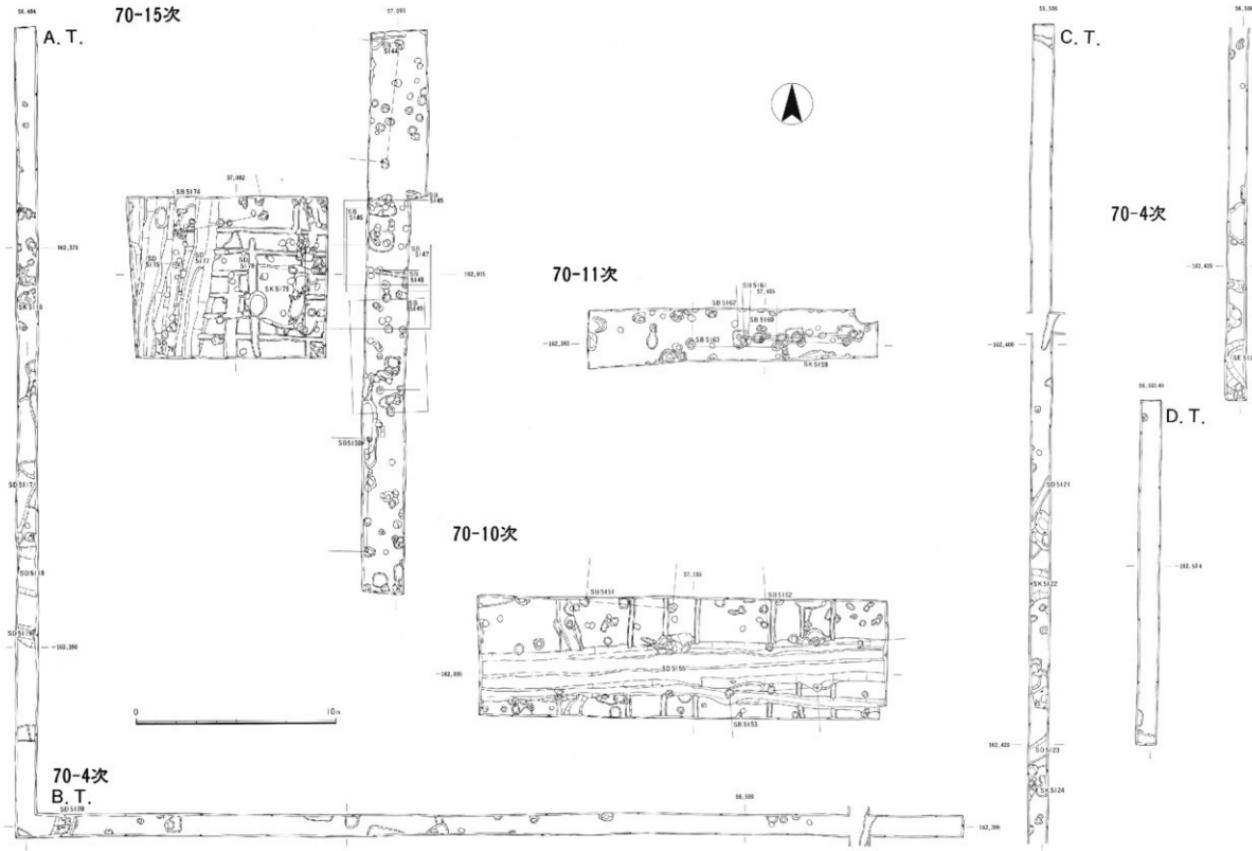
申請地は竹川墓地の西100mに位置し、山林中のすり鉢状の窪地である。調査は、この斜面に2m×4.5mと1m×3mの2本のトレーナーを設定し、12m²について窪地の形成の解明に主眼をおいて実施した。遺構は検出されず、窪地の形成は土取りによるものであると考えられ、擾乱された埋土からは、近代の陶磁器とともに飛鳥時代の土師器、須恵器が出土した。

第70—7次調査 6 A E E—T (浅尾 盛土)

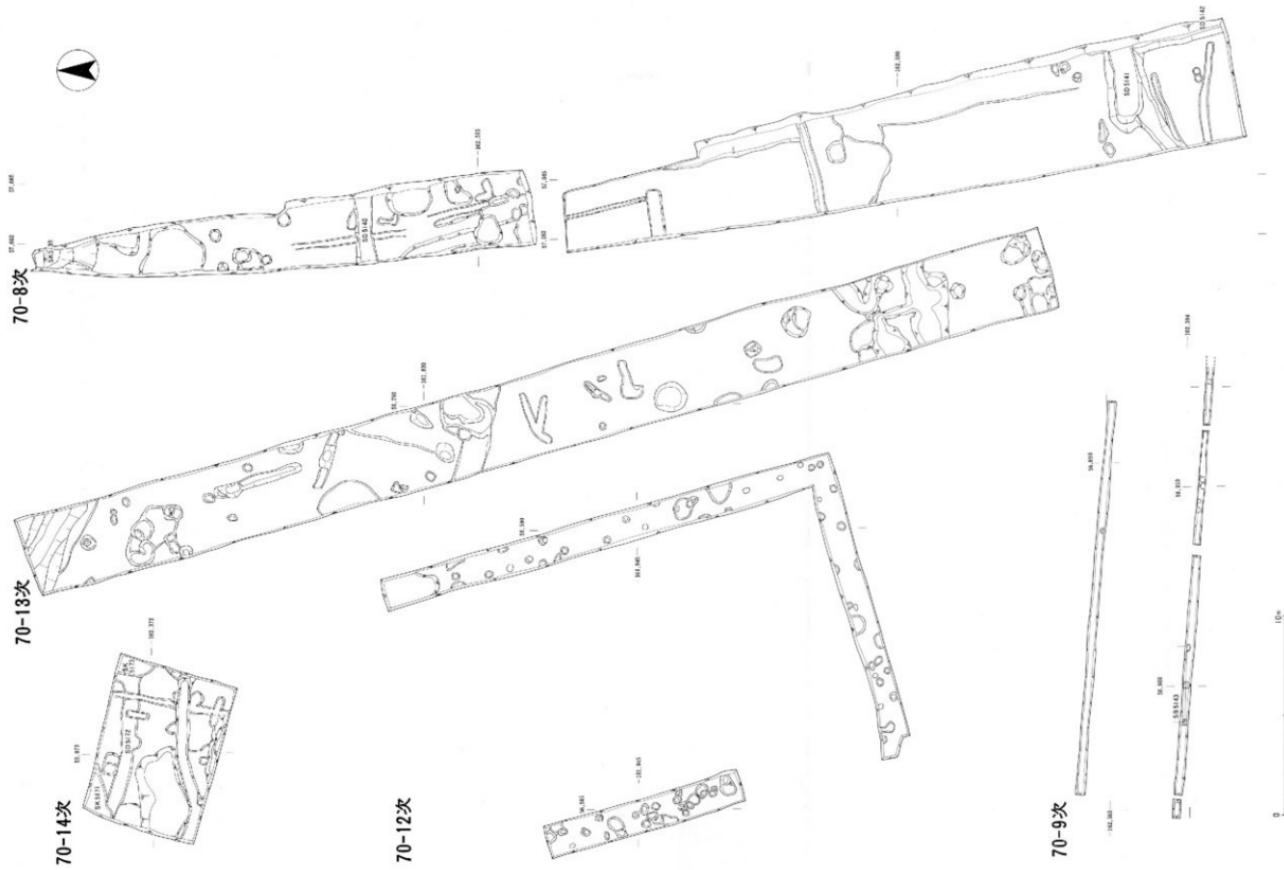
申請地は「斎王の森」の東北160mの位置で、264m²の調査を実施した。検出した遺構は



第31図 第70次造構実測図 (1 : 200)



第32図 第70次造構実測図（1:200）



第33図 第70次造構実測図 (1 : 200)

溝3と柱穴等があり、溝の時期は奈良時代のものがS D5134・5135で、S D5133は平安時代末期のものである。出土した遺物は整理箱で4箱あり、奈良時代と平安時代後期以降のものが中心で、特殊なものとしては縁釉陶器が2点出土した。

第70-8次調査 6 A E U、6 A E X-A (三重県 県道田丸停車場・斎明線改良)

現在の竹神社から南に延びる県道田丸・斎明線の道路拡幅に伴う調査である。調査地は南の水田部分と北の住宅地部分に分けられ、検出した主な遺構には水田部南で東西溝S D5141、南北溝S D5142、住宅地部分で東西溝S D5140、土塙S K5139がある。東西溝S D5141は調査区中央から東に延びる幅2m、深さ0.8mの規模の大きなもので、平安時代末期の遺物を少量出土した。南北溝S D5142は東西溝S D5141と同時期の溝で、西肩の一部を検出したのみで規模は不明である。東西溝S D5140は、幅0.5m、深さ0.3m。遺物は土師器の小片を2点出土したのみであるが、平安時代前期の遺構と考えられる。土塙S K5139の埋土から平安時代後二期の遺物の小片が整理箱で1箱出土している。

第70-9次調査 6 A E D-C・D (近畿日本鉄道 保全柵の新設)

近鉄宇治山田線沿い(斎宮駅東方150m)北側に柵垣建植(延長146m)の工事中に遺構面が検出されたので、遺構面の検出された41.4mについて幅0.4mのトレンチ調査を実施した。調査面積は16.56m²。検出した遺構はS B5143だけで、柱掘形の径は0.3mと小規模のもので、南北のいずれかに延びる掘立柱建物である。出土した遺物は少なく明確な時期決定はむずかしいが、平安時代後期の範疇を出るものではない。

第70-10次調査 6 A F D-B・D (大西 盛土)

当申請地は宮城東部でも西北よりの西前沖地区に位置し、西側のB区で65m²、南東のD区で123m²の計188m²の調査区を設定して調査を実施した。B区で検出した主な遺構には掘立柱建物5棟がある。平安時代中期のS B5144は3間×(1)間の南北棟である。平安時代後期から末期のものは6棟あり、S B5145~5147は3間×2間の東西棟、S B5148~5150は3間×2間の南北棟であろう。このうちS B5147は第70-15次調査でも検出されているが、他の建物については不明な点が多い。D区で検出した主な遺構には平安時代前II期の掘立柱建物2棟(S B5152・5153)、平安時代後期のS B5151がある。その他、東西溝S D5155は幅2.2m、深さ0.5mで鎌倉時代前半。重複するS D5154は室町時代のもので、幅0.6m、深さ0.3mを測る。遺物は整理箱で16箱あり、特殊なものには縁釉陶器が59点、瓦片1点がある。

第70-11次調査 6 A G O-H (川合 盛土)

調査地は史跡指定範囲の東南にあたり、2.5m×14.5mのトレンチを東西に設定して約36m²の調査を実施した。検出された遺構は、掘立柱建物4、土塙1である。掘立柱建物はいずれも一部が検出されているだけで規模は不明である。S B5160は、0.7~0.8mの柱掘形を持つ建物

であるが、東西に2間が確認されている。サブトレンチの結果から、この建物は、北へ続く建物である。S B5163は、東西2間×南北1間以上の南北棟。S B5161・5162は共に東西2間が確認されており、共に西と南へは続かない建物である。建物の時期は遺物が少なく決め難いが、S B5160は奈良時代後期と考えられ、他の建物については埋土の切り合い関係よりS B5163・5161はS B5160より古く、S B5162はS B5160より新しい。土塙S K5159は、一部を検出しただけであるが、平安時代前期の土師器、須恵器、製塙土器、土鍤が出土している。

第70—12次調査 6 A D D—F・G (長谷川 個人住宅の新築)

申請地は史跡中央部の篠林地区の中央西部に位置し、擁壁部分に合わせて幅約1m、コの字形に調査区を設定した。検出した遺構には柱穴、土塙など多数あるが、調査区の制約もあり掘立柱建物についての詳細は不明である。出土した遺物は整理箱で2箱あり、特殊な遺物としては縁釉陶器1点がある。

第70—13次調査 6 A C D—N・G (佐藤 個人住宅の新築)

申請地は宮城北辺部の苅子地区に位置し、東西4m、南北53mのトレンチを入れ212m²の調査を実施した。検出した遺構は調査区北端の東西溝1条だけである。東西溝S D5170は、幅2.2m、深さ0.5mの比較的規模の大きな溝であるが、出土した遺物がなく時期は不明である。また、出土した遺物はほとんどなく土師器片、須恵器片が数点あるだけである。

第70—14次調査 6 A B L—R (北岡 農業用倉庫の新設)

申請地は竹川墓地の西100m程に位置し、6m×8mの48m²を実施した。遺構としては、土塙2(S K5171・5173)、溝S D5172があり、S K5173からは弥生式土器が出土しており、弥生時代後期と考えられる。S K5171とS D5172からの遺物は少なく、かつ細片で時代決定はできないが、埋土の切り合い関係により、S D5172の方が新しい。

第70—15次調査 6 A F D—A (山本 個人住宅の新築)

当申請地は宮城東部でも西北よりの西前沖地区に位置し、東西9.5m、南北8mの76m²である。検出した主な遺構には掘立柱建物2、土塙1、南北溝4がある。掘立柱建物S B5174は東西2間分を検出したが、時期については不明である。S B5147は東の第70—10次調査でも検出されており平安時代末期の3間×2間の東西棟と思われる。南北溝4条は、埋土の違いから二者に分かれ、前者(S D5175・5177)は出土する遺物から平安時代後期から鎌倉時代に、後者(S D5176・5178)は出土する遺物がほとんどないか前者より古く(S D5176)、奈良時代の土塙S K5179より新しい(S D5178)。おそらく平安時代前期のものと思われる。土塙S K5179は一辺約3.0mの方形を呈し、深さは0.2mである。奈良時代の遺物を少量出土した。出土した遺物は整理箱で3箱あり、特殊なものには縁釉陶器が2点と南北溝S D5175から軒丸瓦が1点出土している。

VIII 第3次環境整備事業

昭和57年度と昭和61年度の2次にわたって、「斎王の森」の東側と南側で環境整備事業を実施している。そのことについては、既にそれぞれの年報で報告したとおりである。

この「斎王の森」を中心とした史跡公園は、県内外からの見学者の学習と休息の場として定着してきている一方、毎年盛大になってきた町の「斎王まつり」のメイン会場としても活用されているところである。

今年度は史跡西部の古里地区に予定された「斎宮歴史博物館」（仮称）の建設事業が具体的に進行する中で、博物館の周辺地域をどのように整備するか、更に史跡全体をどう整備活用していくかという、将来にわたる大きな問題が改めてクローズアップされた。

とりわけ、博物館と近鉄斎宮駅とを結ぶ遊歩道及びその沿道のベルト地帯の環境整備が優先課題となつた。

この遊歩道には、古里地区の南から県道南藤原・竹川線を越えて塚山地区南端を東行し史跡中央部へ達すると想定されている古道のうち、塚山地区内の350m分をそのまま活用することとした。この区間は現在の農道とほぼ重複している。

この所謂塚山地区古道沿いの地域では、過去4回の面的な調査（第32次・38次・49次・50次）を実施している。今回の整備事業は上記第32次調査区を対象としたが、古道復元は別事業であるため、現農道から北へ4mひかえて第34図のように史跡公園とした。面積にして1,274m²である。地下の遺構を守るために全体に0.25mの盛土をした。

（I）造構標示

第32次調査で検出された掘立柱建物の中から平安時代のS B 408・1695・1715の3棟を選びその直上に藤棚及び花壇として標示した。

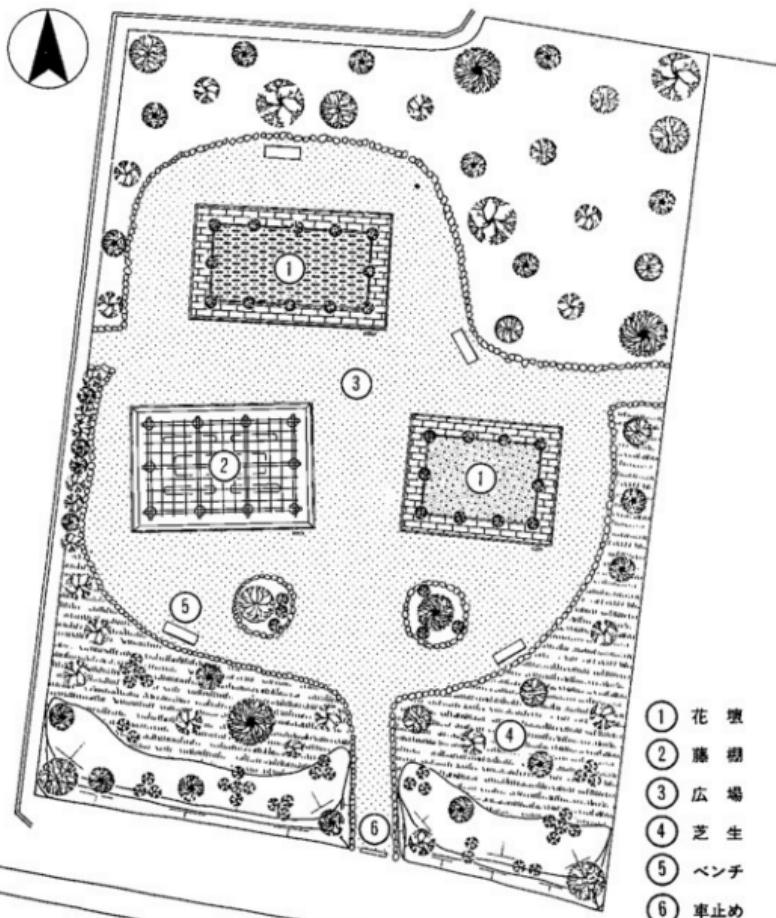
（1）藤棚

S B 408を藤棚として標示した。桁行は3間で7.5m、梁行は2間で4.6m。軒の出をそれぞれ1.0mとし、周囲にレンガ縁石を巡らせた。従って標示した規模は9.5m×6.6mになる。

基礎掘りの深さを考慮してレンガ縁石内にさらに0.2mの盛土をし、全面に芝生を張った。レンガ縁石から0.3m控えて法面を築成したので、法面勾配は1割5分となる。

柱穴直上に径0.25mの松材を支柱として使用した。皮はぎ、カンナ仕上げでCCA加工したものである。高さは地上2.5mとした。ルーバーには同じくCCA加工をした桟材を用いた。支柱の基礎はそれぞれ1.0m×1.0m×0.45mとし、地下遺構を壊さないように配慮した。

盛土した藤棚下中央部には擬木テーブル2基、擬木ベンチ4基を設置し、支柱に添わせて藤



第34図 史跡環境整備図 (1 : 300)

を10本植栽した。

(2) 花壇

S B 1695・1715を花壇として標示した。S B 1695は桁行4間(8.3m)、梁行2間(4.0m)、S B 1715は桁行3間(6.0m)、梁行2間(4.2m)である。それぞれ軒の出を1.0mとした。従って前者の標示規模は $10.3\text{m} \times 6.0\text{m}$ 、後者の標示規模は $8.0\text{m} \times 6.2\text{m}$ となる。軒の出の部分は平面にレンガを布設し、外周をレンガ縁石とした。

柱穴直上に径0.2m、長さ0.15mの円形ヒューム管カラーを布設し、中にキンメツゲを植栽して柱の位置と形状を標示した。

(II) 標示石設置

遺構標示をした藤棚と花壇の前には、 $0.5\text{m} \times 0.5\text{m} \times 0.15\text{m}$ の鏡面仕上げした御影石に、「掘立柱建物」と彫字して設置した。

(III) 広場

藤棚と花壇のまわり約411m²については、タンバ締固めの後に5~25mmの砂利を敷均して広場とし、擬木平板ベンチを4基設置した。

また、広場の周囲は玉石縁石を布設して植栽空間との境界とした。

(IV) 芝生

藤棚と花壇を含む砂利敷き広場の周囲を植栽空間としたが、そのうちの南過半については、約200m²分に藤棚基壇部と同様の芝生を張った。

なお、将来にその復元的修景が予定されている古道との境目には、不整形でゆるやかな(高さ約0.5m、幅3.0~5.0m)崩れた土手状のイメージに盛土をして植栽し、古道の雰囲気を演出するべく準備した。

(V) 植栽

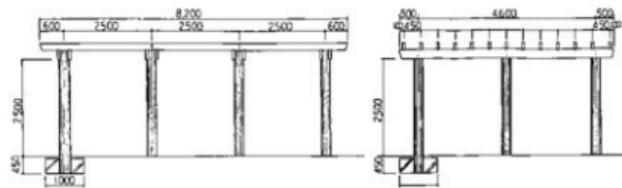
樹木には常緑樹と季節によって花の咲く種類を中心に選んだ。高木13本、中高木37本、低木53本の樹木名は次のとおりである。

高木：シラカシ、ケヤキ、スダジイ、アラカシ、イチョウ、ヤマモモ、クスノキ。

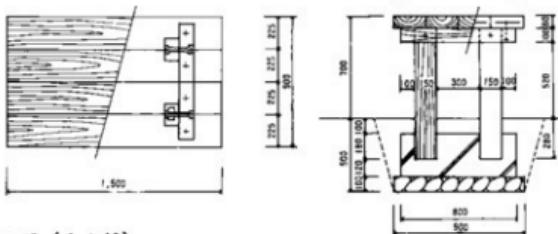
中高木：コブシ、サザンカ、ヤブツバキ、モチノキ、キンモクセイ、イロハモミジ、ヤマボウシ、ムクゲ、ゲッケイジユ、サクラ、ウメ、シモクレン、ハナミヅキ、シラカシ、ツバキ。

低木：クチナシ、カンツバキ、ヤマツツジ、ハギ、ムラサキシキブ、ヤマブキ、マンサク、ボケ、サツキツツジ、ヒラドツツジ。

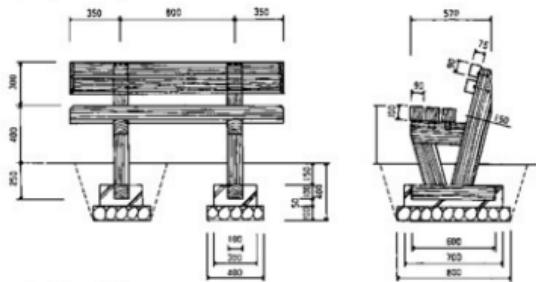
藤 棚 (1 : 150)



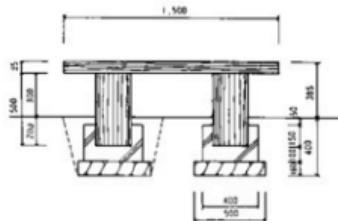
擬木テーブル (1 : 40)



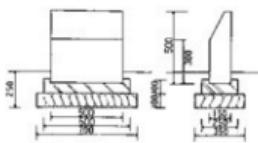
擬木ベンチ (1 : 40)



擬木ベンチ (1 : 40)



造構標示石 (1 : 40)



第35図 設置物計測図

IX 調査事務所要覧

I 調査概要

(1) 調査事業	9,784m ²
ア 計画発掘調査	5次
第71次調査	古里地区 1,440m ²
第72次調査	古里地区 2,300m ²
第73次調査	西加座地区 1,500m ²
第74次調査	古里地区 790m ²
第75次調査	西加座地区 900m ²
イ 緊急発掘調査(個人住宅新築等)	
第70-1~16次調査	2,854m ²
(2) 環境整備事業	
第3次史跡環境整備事業	
施行場所	坂山地区古道沿
施行面積	1,274m ²
施行内容	藤棚による建物標示1棟 花壇による建物標示2棟
(3) 普及事業	

ア 現地説明会の開催
(ア) 第71次発掘調査現地説明会

日 時 昭和62年6月7日(日)
13時30分

報 告 泉 雄二

参加人員 約300名

(イ) 第72次発掘調査現地説明会

日 時 昭和62年9月6日(日)
10時30分

報 告 田版 仁

参加人員 約230名

(ウ) 第73次発掘調査現地説明会

日 時 昭和62年11月1日(日)
10時30分

報 告 上村 安生

参加人員 約220名

(エ) 第75次発掘調査現地説明会

日 時 昭和63年1月31日(日)
10時30分

報 告 上村 安生

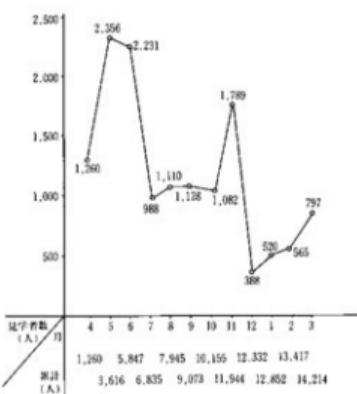
参加人員 約220名

イ 調査報告等

「斎宮案内記(その三)、(その四)」
『あすの三重 No66・69』

三重社会経済研究センター
田 版 仁

ウ 資料展示室見学者数



エ その他

斎宮講演会

日 時 昭和62年11月1日
午後1時30分
場 所 明和町中央公民館
演 題 「斎内親王のことども」
講 師 平安博物館館長

角 田 文 衡 氏

斎宮講演会(斎宮研究会等主催)

日 時 昭和62年9月6日
午後2時
場 所 伊勢市商工会議所大ホール
演 題 「大伯皇女を想う」
講 師 国際日本文化研究センター
教授
筑波大学教授 中西 進氏

II 予 算

斎宮跡保存対策費 83,298千円

(単位:千円)

区分 事業名	歳 出	財 貨 内 財		備 考
		県 費	国 費	
発掘調査費	37,128	19,128	18,000	
史跡公有化補助金	36,000	36,000	-	公有化面積約 0.8ha
保存修復事業	500	500	-	
維持管理	2,563	2,563	-	
環境整備	10,000	5,000	5,000	塚山古道沿
計	86,191	63,191	23,000	

III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規定抜粋

(昭和43年4月1日
(教育委員会会則 第6号))

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会会則第6号

第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務 (県立学校関係事務を除く。) を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては次に掲げる事務をつかさどる。
一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。
二、斎宮跡に関する各種資料の

収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則 (昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄)

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

IV 職 員

職	氏 名
所 長	横 山 洋 平
主 幹	山 沢 義 貴
主 事	田 阪 仁
技 師	泉 雄 二
主 事	上 村 安 生
事 務 助 働 員	刀 根 やよい
事 務 助 働 員	坂 真弓美
事 務 助 働 員	松 田 早 苗
事 勿 助 働 員	上 田 真 登
事 勿 助 働 員	中 桐 真 紀

V そ の 他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

1. 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期すため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員(以下「委員」という)を置く。

2. 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

- (1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。
- (2) 当史跡の遺物の調査、検討に関すること。
- (3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。

- (4) 当史跡の環境整備の計画、検討に關すること。
- (5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に關すること。

3. 定 数 等

- (1) 委員の定数は、10人以内とする。
- (2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに關し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

4. 任 期

任務が完了するまでの間とする。

5. 会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

6. 座 務

会議の座務は、三重県教育委員会事務局文化課において處理する。

7. そ の 他

この要綱に定めるもののほか、委員に關し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附 則

この事項は、昭和54年10月19日から施行する。

○調査指導委員

氏 名	専 攻	現 職
福山敏男	建築史	(財)京都府經産文化財調査研究センター理事長
服部貞蔵	考古学	三重大学名譽教授
久徳高文	国文学	福山女学園大学名譽教授
坪井清足	考古学	(国)文化財保護審議会専門委員
門脇横二	古代史	京都府立大学学長
橋崎彰一	考古学	名古屋大学教授
早川庄八	古代史	名古屋大学教授
渡辺 寛	古代史	皇學館大学助教授
北原理雄	都市工学	三重大学助教授

○委員会の開催

1. 第1回斎宮跡調査指導委員会

日時 昭和62年6月9日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

明和町役場 第3会議室

指導内容

斎宮跡史跡整備（斎王の森地区）現地指導

第71次調査現地指導

昭和61年度事業結果について

昭和62年度事業計画について

斎宮歴史博物館（仮称）について

2. 第2回斎宮跡調査指導委員会

日時 昭和63年1月14日

場所 明和町中央公民館、視聽覚室

指導内容

第75次調査現地指導

博物館建設予定地現地指導

昭和62年度発掘調査等について

昭和63年度発掘調査等について

保存整備事業について

斎宮歴史博物館（仮称）建設について

昭和62年度所内日誌

自 昭和62年4月1日
至 昭和63年3月31日

月 日	内 容
4月4日	斎王まつり実行委員会……明和町公民館
7日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（明和町）
8日	県立博物館常設展に斎宮跡出土品展示（～9/26）
13日	第70-1次発掘調査開始（個人住宅）
"	博物館に関する協議（設計事務所）……勤労者福祉会館
21日	町づくり事業協議（明和町）……第3分庁舎13会議室
24日	第70-1次発掘調査完了
25日	第4回斎宮歴史博物館（仮称）建設指導委員会……勤労者福祉会館
5月1日	博物館に関する協議（設計事務所）……県庁
6日	第71次発掘調査開始（古里地区）
12日	資料展示室見学者総数 80,000人となる
22日	地方連絡会議……松阪庁舎
26日	第5回斎宮歴史博物館（仮称）建設指導委員会……勤労者福祉会館
30日	浩宮様視察（第71次調査現場・展示室）
6月3日	博物館周辺の環境整備協議……文化庁
7日	斎王まつり
"	第71次発掘調査 現地説明会（泉雄二報告）
9日	斎宮跡調査指導委員会……明和町役場
10日	斎宮跡地権者の会（総会）……明和町中央公民館
19日	博物館に関する協議（明和町）……明和町役場
22日	第70-2次発掘調査開始（個人住宅新築）
"	第70-3次発掘調査開始（農業用倉庫新設）
24日	第70-2次発掘調査完了
29日	第71次発掘調査完了
7月1日	文化審議会……吉田山会館
2日	第70-3次発掘調査完了
3日	史跡環境整備協議（文化庁・明和町・都市環境研究所）……東京
6日	第72次発掘調査開始（古里地区）
13日	博物館協議（明和町）……明和町役場
"	中町役員会において博物館等を報告……中町公民館
15日	博物館に関する協議（設計事務所）……勤労者福祉会館
29日	斎宮跡体験発掘（下御糸小学校6年生、29～30日）

月 日	内 容
7月31日	博物館周辺の環境整備に関する協議（明和町・都市環境研究所）……調査事務所
8月3日	第70-4次発掘調査開始（盛土）
5日	博物館周辺の環境整備に関する協議（明和町・都市環境研究所）……東京
8日	第70-4次発掘調査完了
10日	博物館に関する協議（松阪・飯多地区議会、明和町）……松阪市役所
11日	博物館基本設計公表（知事記者発表）
20日	いつき会……明和町役場会議室
24日	副知事視察
〃	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町農構センター
25日	博物館及び周辺整備に関する協議（中部電力）……労働者福祉会館
〃	斎王イメージポスター記者発表
9月1日	博物館周辺の環境整備協議（明和町・設計事務所・都市環境研究所）……労働者福祉会館
6日	第72次発掘調査 現地説明会（田代仁報告）
〃	講演会「大伯皇女を想う」国際日本文化研究センター教授 中西進氏……伊勢商工会議所 5Fホール
11日	第73次発掘調査開始（西加座地区）
14日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場
28日	斎宮跡地権者の会（公有化小委員会）……明和町役場
30日	第72次発掘調査完了
10月1日	博物館にともなう道路協議（明和町）……明和町役場
12日	斎宮跡地権者の会（公有化小委員会）……明和町農構センター
27日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町農構センター
29日	第74次発掘調査開始（古里地区）
〃	大規模遺跡五県会議……福岡県
31日	文化振興・斎宮跡保存促進三重県議員連盟視察（彦根城博物館・西明寺）
11月1日	第73次発掘調査 現地説明会（上村安生報告）
〃	斎宮文化財講演会「斎内親王のことども」平安博物館館長 角田文衛氏……明和町中央公民館
5日	博物館排水問題協議（明和町）……明和町役場
9日	第70-5次発掘調査開始（農業用倉庫）
〃	博物館建築工事入札現地説明会
17日	第70-5次発掘調査完了
19日	博物館排水問題協議（明和町）……明和町役場

月 日	内 容
11月20日	博物館建築工事入札
22日	斎宮跡保存啓発事業 先進地視察（彦根城博物館・西明寺）
26日	第70-6次発掘調査開始（盛土）
27日	博物館排水問題協議（設計事務所・都市環境研究所）……吉田山会館
30日	第70-6次発掘調査完了
〃	第73次発掘調査完了
12月 1日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町農構センター
2日	道路整備協議（松阪土木・明和町）……松阪庁舎
7日	第75次発掘調査開始（西加座地区）
〃	第70-7次発掘調査開始（盛土）
19日	博物館建築工事契約
22日	第6回斎宮歴史博物館（仮称）建設指導委員会……勤労者福祉会館
25日	第74次発掘調査完了
1月13日	第70-7次発掘調査完了
14日	斎宮跡調査指導委員会……明和町中央公民館
18日	第70-8次発掘調査開始（県道田丸斎明線）
19日	第70-16次発掘調査開始（町道塚山線）
20日	博物館起工式
22日	博物館基礎工事工法協議……調査事務所
31日	第75次発掘調査 現地説明会（上村安生報告）
2月 3日	第70-8次発掘調査完了
8日	第70-9次発掘調査開始（保全柵）
〃	塚山地区史跡整備事業開始
9日	第70-9次発掘調査完了
10日	第70-10次発掘調査開始（盛土）
12日	基準杭設定測量（奈良国立文化財研究所指導 12~18日）
22日	第70-11次発掘調査開始（盛土）
〃	県民局協議
23日	博物館排水問題協議（明和町）……調査事務所
25日	第75次発掘調査完了
26日	情報処理検討協議……県庁
27日	第70-12次発掘調査開始（個人住宅・盛土）
29日	第70-11次発掘調査完了
3月 2日	第70-10次発掘調査完了

月 日	内 容
3月2日	第70-12次発掘調査完了
3日	博物館排水問題協議（明和町）……調査事務所
7日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町農構センター
9日	第70-13次発掘調査開始（個人住宅）
10日	第70-14次発掘調査開始（農業用倉庫）
14日	調査作業見学旅行（大阪）
23日	第70-14次発掘調査完了
"	第70-15次発掘調査開始（個人住宅）
25日	第70-13次発掘調査完了
29日	斎宮跡活性化対策協議（明和町）……明和町役場
30日	第70-15次発掘調査完了
31日	塙山地区史跡環境整備事業完了

掘立柱建物・塀一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 間	備 考
					桁行	梁間		

第71次調査 (6 A B E)

4740	4 × 2	E 33° S	7.2	4.0	1.8	2.0	飛鳥	
4741	4 × 2	E 37° S	7.2	4.4	1.8	2.2	"	
4720	3 × 3	N 39° E	5.1	4.5	1.7	1.5	奈良前	
4735	3 × 2	N 39° E	5.1	4.0	1.7	2.0	"	
4496	3 × 2	E 21° S	6.3	4.0	2.1	2.0	奈良中	
4421	4 × 2	N 40° E	7.2	4.4	1.8	2.2	奈良後	第67次調査で検出
4734	4 × 3	E 50° S	6.8	4.8	1.7	1.6	"	
4748	3 × 2	E 25° S	5.1	4.0	1.7	2.0	"	

第72-1次調査 (6 A B E)

4780	3 × 3	N 28° E	4.3	4.2	1.4 1.5	1.4	奈良前	総柱建物(柱間不揃)
4820	3 × 2	N 39° E	5.4	3.8	1.8	1.9	"	
4870	(2) × 2	E 25° S	-	3.8	1.9	1.9	"	
4839	4	E 18° S	6.8		1.7		奈良中	塀
4828	3 × 2	E 31° S	5.5	4.8	1.7 2.1	2.4	奈良	桁行柱間西から 1.7m、2.1m、1.7m
4856	3	N 24° E	6.6		2.2		"	塀
4861	2 × 1	N 34° W	4.0	3.3	2.0	3.3	"	塀 棟方向は柱通りの長い方で測る
4862	3 × 2	N 18° E	4.5	3.5	1.5	1.5 2.0	"	塀 棟方向は柱通りの長い方で測る
4830	3 × 2	E 27° S	6.2	4.2	2.0 2.2	2.1	平安前 I	桁行柱間西から 2.2m、2.0m、2.0m
4879	3 × 1	E 9° S	5.1	2.0	1.7	2.0	鐵倉後	
4800	3 × 5	E 10° S	6.5	8.7	2.1 2.2	1.7 1.9	"	身倉 3 × 3 (6.5×5.3) 南北両面廂 3 × 5 (6.5×8.7)
4883	2 × 1	N 12° E	3.0	2.1	1.5	2.1	"	塀 棟方向は柱通りの長い方で測る
4876	3 × (1)	E 5° S	8.7	(2.2)	2.9	(2.2)	不明	塀 棟方向は柱通りの長い方で測る

第72-2次調査 (6 A B F)

4900	4 × 2	N 39° E	6.4	4.2	1.6	2.1	奈良前	溝もち
4920	2 × 2	N 25° E	4.2	4.2	2.1	2.1	奈良後	

第73次調査 (6 A F F · B · C · E · F · G)

3114	3 × 2	E 1° S	6.0	3.9	2.0	1.95	奈良末 ~平安初	第51次調査で検出 柱間寸法変更
4032	5 × 2	E 4° N	12.0	4.9	2.4	2.45	"	
4077	5 × 2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	"	第61次調査で検出 SB 4079より新しい
4078	5 × 2	E 5° N	12.0	4.6	2.4	2.3	"	第61次調査で検出
4079	4 × 2	E 4° N	8.4	4.2	2.1	2.1	"	第61次調査で検出 桁行変更

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁間		
4989	2 × 2	E 7°N	5.0	3.4	2.5	1.7	奈良末 ～平安初	
5001	2 × 2	E 4°N	3.2	3.2	1.6	1.6	"	總柱建物
4033	4 × 2	E 6°N	6.7	3.6	1.68	1.8	平安前 I	第61次調査で検出
4034	3 × 2	E 10°N	5.1	3.6	1.7	1.8	"	第61次調査で検出 建物規模変更
4991	3 × 2	E 4°N	6.4	4.2	2.13	2.1	"	S B 4069より古い
4069	3 × 2	E 0°	6.0	3.8	2.0	1.9	"	第61次調査で検出 棟方向・梁行変更 S B 4992より新しい
4990	4 × 2	N 3°W	8.4	4.2	2.1	2.1	"	
4993	3 × 2	E 0°	5.8	3.6	1.93	1.8	"	
4992	3 × 2	E 2°N	6.0	3.8	2.0	1.9	"	
4999	3 × 2	E 7°N	5.2	3.6	1.73	1.8	"	
5007	3 × 2	N 0°	3.9	3.0	1.3	1.5	"	
5009	3 × 2	E 0°	5.1	3.4	1.7	1.7	"	
4972	2 × 2	E 1°N	5.2	5.2	2.6	2.6	平安前 II	總柱建物
5006	3 × 2	E 0°	6.0	4.2	2.0	2.1	"	
5005	3 × 2	E 2°N	5.6	3.8	1.87	1.9	"	SB 5006より新しい
4973	4 × 2	E 5°S	5.8	3.6	1.45	1.8	平安中	
4975	4 × 2	E 2°S	8.0	4.0	2.0	2.0	"	
4998	3 × 2	E 2°S	5.8	4.0	1.93	2.0	"	
4982	5 × 2	N 7°W	9.0	3.6	1.8	1.8	平安後 II	
4997	3 × 2	E 7°N	5.6	4.0	1.87	2.0	"	

第74次調査 (6 A B E · F)

5035	3 × 3	N 36°W	5.1	4.5	1.7	1.5	奈良前	總柱建物か
5022	3 × -	N 17°E	6.0		2.0		奈良	堀 3間分 柱間2.0m
5025	(3) × 2	N 26°E	-	4.4	1.9	2.2	"	
4475	3 × 2	N 6°E	6.0	3.4	2.0	1.8	鐵倉前半	第67次調査で検出

第75次調査 (6 A G F - C)

5062	3 × 2	N 4°W	6.3	4.0	2.1	2.0	奈良後	
5059	3 × 2	E 2°N	6.4	4.0	2.13	2.0	奈良末 ～平安初	SB 5060より新しい
5060	3 × 2	E 0°	6.6	4.0	2.2	2.0	"	建て替え
5058	4 × 2	E 5°N	7.5	4.0	2.0	2.0	平安初	東面廂、廂柱間1.5m
5056	3	E 0°	6.0		2.0		平安前	堀
3249	3 × 2	N 2°W	6.0	3.8	2.0	1.9	平安前 I	第52次調査で検出 棟方向変更
3250	3 × 2	E 5°N	5.7	4.0	1.9	2.0	"	"
3251	3 × 2	E 0°	5.7	3.8	1.9	1.9	"	第52次調査で検出
5076	3 × 2	E 3°N	6.0	4.0	2.0	2.0	"	
5077	3 × 2	E 1°N	5.8	3.6	1.93	1.8	"	建て替え SB 5076より新しい
5078	3 × 2	E 3°N	5.4	3.8	1.8	1.9	平安前 II	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		期 間	備 考
					桁行	梁間		
5050	3×(2)	E 4° N	5.4	—	1.8	1.8	平安前II	建て替え
5051	3×(2)	E 4° N	5.7	—	1.9	—	"	S B5050より新しい
5053	5×2	E 3° N	10.0	4.4	2.0	2.2	平安後 I	
5054	3×2	N 2° E	5.7	4.0	1.9	2.0	"	
5055	(2)×2	E 2° S	—	3.5	2.0	1.75	"	

第70-1次調査 (6 A C C - X)

5101	(3)×2	N 3° E	—	4.0	1.8	2.0	奈良前
------	-------	--------	---	-----	-----	-----	-----

第70-3次調査 (6 A D R - I)

5110	(2)×(2)	E 4° N	—	—	3.0	3.0	奈良未 ~平安初
5109	(3)×2	E 4° S	—	4.2	2.0	2.1	平安前
5111	3×2	E 7° S	6.6	4.6	2.2	2.3	"

第70-5次調査 (6 A E W - A)

5130	3×2	N 2° W	4.8	3.4	1.6	1.7	奈良中
------	-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----

第70-9次調査 (6 A E D - C · D)

5143	(1)×2	N 2° E	—	3.8	—	1.9	平安後(?)
------	-------	--------	---	-----	---	-----	--------

第70-10次調査 (6 A F D)

5152	(3)×(2)	E 4° N	(4.6)	(2.0)	2.3	2.0	平安前II
5153	(1)×2	N 4° W	—	4.4	—	2.2	"
5144	3×(1)	E 6° S	6.0	—	2.0	—	平安中
5151	(1)×2	N 5° E	—	4.4	—	2.2	平安後
5145	(1)×2	E 0°	—	(4.2)	—	(2.1)	平安末
5146	(1)×2	E 0°	—	(4.2)	—	(2.1)	"
5147	(3)×2	E 0°	—	4.4	2.1	2.2	"
5148	3×(1)	N 0°	6.0	—	1.9	—	"
5149	3×(2)	N 2° W	5.7	—	1.9	—	"

第70-11次調査 (6 A G O - H)

5161	(3)×(1)	E 2° S	—	—	2.5	—	奈良後	S B5160より古い
5163	(1)×2	N 0°	—	4.2	(1.9)	2.1	"	S B5160より古い
5160	(3)×(1)	E 3° N	—	—	2.6	—	"	
5162	(3)×(1)	E 3° N	—	—	2.7	—	奈良後(?)	S B5160より新しい

第70-15次調査 (6 A F D - A)

5174	(1)×2	N 12° W	—	4.4	—	2.2	不 明
------	-------	---------	---	-----	---	-----	-----

豎穴住居一覧表

S B	規模 (m)	長軸方向	深さ回	柱穴	カマド	時期	備考
第71次調査 (6 A B E)							
4728	- × 3.0	N 31° E	10			飛鳥	
4743	3.2 × 2.6	E 17° S	40			〃	
4724	- × 5.1	E 35° S	10		北壁	奈良前	
4742	3.1 × 3.3	N 39° E	10		北壁	〃	
第72-1次調査 (6 A B E)							
4770	4.8 × 4.2	E 19° N	30		北壁	飛鳥	周溝あり
4777	(6.2) × 5.7	E 40° N	25		北東壁	〃	〃
D-83	5.1 × 4.5	N 9° W	20	○	(東壁)	奈良前	昭和48年度古里D地区で検出 規模・棟方向変更 カマド削平、周溝一部残
4795	5.6 × 5.4	E 43° N	12	○	北東壁	〃	周溝一部残
4790	5.3 × (4.5)	E 43° S	10			奈良中	
4805	(4.5) × 4.3	N 37° E	20			〃	
4811	4.4 × 3.1	N 22° E	20		東壁	〃	
4825	4.0 × 3.2	E 31° S	30		北東壁	〃	
4840	3.5 × 3.0	N 28° E	20		東壁	〃	} 重複建て替え S B 4840より古い
4841	4.5 × 4.4	E 28° S	15			〃	
4865	3.0 × (2.8)	N 42° E	10		東壁	〃	
D-84	4.2 × 3.4	E 44° S	30		東壁	奈良後	昭和48年度 古里D地区で検出 規模・棟方向変更
D-85	- × -	(N 43° W)	20		(北東壁)	〃	D-84より古い
4821	3.6 × 3.3	N 42° W	30		—	〃	
4801	- × -	—	—		—	奈良	張床のみ残存
4848	3.0 × (2.7)	N 36° E	10		東壁	〃	
4810	3.9 × 3.6	E 15° S	20			鎌倉前	建て替えか。屋外に焼土
第72-2次調査 (6 A B F)							
4451	- × (4.0)	E 24° S	20		西壁	奈良前	第67次調査で検出。二棟重複か。煙道あり。
4906	- × -	—	30			〃	
4907	- × (3.7)	—	25			〃	
4913	3.3 × (3.3)	N 43° E	30			〃	
4915	5.0 × 4.4	N 31° W	25		北東壁	〃	S B 4451より新しい
4452	3.6 × 3.5	N 29° W	25		北壁	奈良中	第67次調査で検出
4928	3.7 × (2.9)	N 42° W	20			〃	
4930	(3.5) × 3.2	N 22° W	17		北東壁	〃	
4914	- × (2.7)	E 34° S	25			奈良後	
第72-4次調査 (6 A B F)							
4952	2.3 × -	N 31° E	10			弥生中	
第73次調査 (6 A F F - B · C · E · G)							
5000	3.0 × 2.8	E 2° N	25		北東壁	奈良後	

第74次調査 (6 A B E・F)

S B	規模 (m)	長軸方向	深さ(m)	柱穴	カマド	時 期	備 考
5041	- × -	N 25° S	10			奈良前	
5040	- × -	28°	10		西 壁	〃	S B 5041より新しい
5029	- × 4	E 37° S	10			奈良中	
5030	4.3× -	E 28° S	15		北 壁	〃	

第75次調査 (6 A G F-C)

5074	5.7×4.6	N 3° E	25			奈良後	周溝あり
------	---------	--------	----	--	--	-----	------

斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	45	試掘	13-3	51	古里3283（村上）
2	46	古里A地区	13-4		樂殿2916~2917（松井）
3		B地区	13-5		御館2974-1（川本）
4	47	C地区	13-6		中垣内375-1（南）
5	48	D地区	13-7		東裏328（小川）
6-1		Aトレンチ	13-8		西加座2771-1（細井）
6-2		Bトレンチ	13-9		" 2773（細井）
6-3		Cトレンチ	13-10		東裏362-1（児島）
6-4		Dトレンチ	13-11		西加座2681-1（浮田）
6-5		Eトレンチ	13-12		" 2721-3、2724-2（森川）
7	49	古里E地区	13-13		東前沖2506-2（宮下）
8-1		Fトレンチ	14-1	52	2Eトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-2		2Fトレンチ
8-3		Hトレンチ	14-3		2Gトレンチ
8-4		Iトレンチ	14-4		2Hトレンチ
8-5		Jトレンチ	14-5		2Iトレンチ
8-6		Kトレンチ	15		斎宮小学校
8-7		Lトレンチ	16-1		竹川町道A
8-8		Mトレンチ	16-2		" B
8-9		Nトレンチ	16-3		" C
8-10		Oトレンチ	16-4		" D
8-11		Pトレンチ	16-5		" E
9-1	50	Qトレンチ	16-6		" F
9-2		Rトレンチ	17-1		竹神社社務所
9-3		Sトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-4		Tトレンチ	17-3		西加座2721-6（西沢）
9-5		Uトレンチ	17-4		樂殿2894-1（中川）
9-6		Vトレンチ	17-5		" 2895-1（西口）
9-7		Wトレンチ	17-6		出在家3237-3（吉川）
9-8		Xトレンチ	17-7		" 3237-1（里中）
9-9		Yトレンチ	17-8		樂殿2894-1（西村）
9-10		Zトレンチ	17-9		東海造機
10		広域囲道路	18	53	6AEL-E・I（下園）
11-1		西加座2661-1（山中）	19		6AEN-M・N・O（御館）
11-2		" 2681-1（山名）	20		6AE0-I・J（柳原）
11-3		東前沖2483-2（前田）	21-1		6AGN-B（鍛冶山、中山）
11-4		下園2926-9（吉木）	21-2		6AFI-D（西加座2711-2、2717-4他、山路）
12-1	51	2Aトレンチ	21-3		6AFD-D（西前沖2649-1、大西）
12-2		2Bトレンチ	21-4		6AFH-F（西加座2678、2679-3、森下）
12-3		2Cトレンチ	21-5		6ACD-K（東前沖、渡部）
12-4		2Dトレンチ	21-6		6ACA-T（古里3269-2、中西）
13-1		西加座2436-7（浜口）	21-7		6AFE-F（東前沖2631-1、鈴木）
13-2		" 2436-4（中村）	21-8		6AEG-A（樂殿2909-3、大西）

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
21-9	53	6AED-R (篠林3218-3、宇田)	37-3	56	6AFC-F (西前沖2604-6、押田)
22-1		6AGU	37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本経木)
22-2		6AGU	37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)
22-3		6AGW	37-6		6ABD-A (古里 588-2、北蔽)
23	54	6AEL-B (下園)	37-7		6AEC-M (鶴千2861-2、斎王公民館)
24		6AGF-D (西加座)	37-8		6ADR-P (木葉山128-8・13・14、富山)
25-1		6ADP-K (牛葉3029-1、三重土地ホーム)	37-9		6ACK-E (東加座2355-1、竹内)
25-2		6ACA-Y (古里3270、駒田)	37-10		6AED-O (栄殿3217-1、渡部)
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)
25-4		6AER-H (牛葉3014、牛葉公民館)	37-12		6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)
25-5		6AGN-H (鐵治山2392、丸山)	37-13		6AGK-F (東加座2385-3、2386-3、竹内)
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	38		6ACD-S (塚山)
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	39		6ABD-R・S・T (古里)
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	40		6AGH-L・M (東加座)
25-9		6ACN-C (広頭3387-1、北出)	41		6AGJ-J (他 (斎宮地内))
25-10		6AEV-A (鈴池 339-1、永島)	42-1	57	6AEI-D・F (楽殿)
25-11		6ACF-B (東裏 364-1、沢)	42-2		6AEK-A・B (楽殿)
25-12		6AEE-Y (栄殿2892-3、山本)	43-1		6ADC-C (出在家3235-2、永田)
25-13		6AFJ-E (西加座2766-1、山内)	43-2		6ADT-B (木葉山 308-1、山本)
26-1		6AFR (中西)	43-3		6ACP-T (南裏 241-1、辻)
26-2		6AEX-SACQ (鈴池、木葉山、南裏)	43-4		6ADS-D (牛葉 123-3、西山)
26-3		6AEV-W・X (鈴池)	43-5		6ADE-D (篠林3220-3、満野)
26-4		6ACR (木葉山、南裏)	43-6		6AGE (東前沖、町道御溝)
27		6ACG-S・T (東裏)	43-7		6ABD-F (古里 588-6、今西)
28		6AEO-D (柳原)	43-8		6ADQ-H (牛葉3025-2、大西)
29		6AFI, 6AFL, 6AFK, 6FM, 6GJ	44		6AFL-A・B (鐵治山2759-1、他)
30	55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	45		6AEG-P・Q (栄殿2904-2、他)
31-1		6ADQ-M (内山3038-13、岩見)	46		6AGN-C・D (鐵治山2737-1、他)
31-2		6ACP-I (南裏 227-2、鈴木)	47		6ADJ-D・G (他 (西加座、御館、宮ノ前、上園))
31-3		6ABD-A (古里 588-4、北蔽)	48-1	58	6ACM-M (広頭3385、斎宮小)
31-4		6ADQ-T (牛葉3018-2、百五銀行)	48-2		6ADP-Q (牛葉3033-1・2、吉田)
31-5		6ACC-G (塚山3338-3、水谷)	48-3		6ABL-M (中垣内 434-6、西川)
31-6		6ABO-X (古里 576-1、池田)	48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-5		6AGD-SAFE (東前沖、町道御溝)
31-8		6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-9		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-7		6ADT-H (木葉山 307、森西)
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)	48-8		6ACL-E・F・G (東裏 334-15、他)
31-11		6ADT-I (木葉山 304-2、満野)	48-9		6AEV-J (鈴池 341-1、乾)
31-12		6ADT-J (木葉山 304-7、宇田)	48-10		6AGT (牛葉、町道御溝)
32		6ACE-D・E・F (塚山)	48-11		6ADP-E (鐵治山2351-1、2352-1、柳原)
33		6ADE-C・D (他 (篠林))	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
34		6AFK-F・G・H (西加座)	48-13		6ACM-O (南裏、斎宮小)
35		6APE (西前沖)	48-14		6AET (牛葉、町道御溝)
36	56	6ABI-F (中垣内)	49		6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	50		6ACH-H (東裏 294、297、山本)
37-2		6ADQ-R (牛葉3021-2、野田)	51		6AFF-D (西加座2663-1・4、2664、森下)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
52	58	6AGF-D (西加座2703、他)	64- 8	61	6AGR-J (笛川2341-6、山下)
53- 1	59	6ACM-P (東裏 284、体育馆)	64- 9	6ADQ-M (牛葉、町道御溝)	
53- 2		6ACA-M (古里3280-2、中西)	64-10	6ACF-A (東裏 365-1、樋口)	
53- 3		6ABE (古里 573-2、永納)	64-11	6ACM-O (東裏3385-2、斎宮小)	
53- 4		6ACL-S (東裏 271-1、田所)	64-12	6ADE-B (篠林3162-3、江崎)	
53- 5		6ACR (木葉山97-5、田中)	65- 1	6ACC-M (塚山3331-1)	
53- 6		6AGO (鍛冶山、町道御溝)	65- 2	6AEC-S (楽殿2908-2、他)	
53- 7		6ADD-U (篠林3147-3、野呂)	65- 3	6AEI-L・M (樂殿2917-4、他)	
53- 8		6ACE-O (東前沖2470-2、上田)	66	6AGC-C (東加座2437-1、他)	
53- 9		6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)	67	6ABF (古里 523、他)	
53-10		6ACA-R (古里3267-1、西川)	68	6ABF (古里 502、他)	
53-11		6ADR-W (木葉山 131-7、西村)	69	6AGM-E~H (東加座2373、他)	
53-12		6ABL-K (中垣内 464-2、沢)	70- 1	6ACC-X (塚山3325-1、江崎)	
53-13		6ADQ-L (牛葉3022、辻)	70- 2	6AEE-W (楽殿2875-2、岡田)	
53-14		6ACM-O (東裏 287-3、体育馆)	70- 3	6ADR-I (木葉山 129-5、大西)	
53-15		6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	70- 4	6ACN-A・B・E・L (広瀬3389-8、林)	
54		6AFE-N (西前沖2630、他)	70- 5	6AEW-A (鈴池 333-1、八田)	
55		6AEN-P (柳原、御館2785-1、他)	70- 6	6ABL-S (中垣内 430-6、奥山)	
56		6ACH-S (東裏 289-1、他)	70- 7	6AEE-T (楽殿 577、浅尾)	
57		6AGF-H・I (東加座2441、他)	70- 8	6AU・SAEX-A (牛葉、鈴池、三重県)	
58- 1	60	6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	70- 9	6ADF-C・D (御館、柳原、近鉄)	
58- 2		6AFH-N (西加座2681-8、三村)	70-10	6AFD-B・D (西前沖2649-4、大西)	
58- 3		6ACM-N (東裏3385-2、斎宮小)	70-11	6AGO-H (鍛冶山2363-2、川合)	
58- 4		6ABL-A (中垣内4731-1、小家)	70-12	6ADD-F・G (篠林3158、長谷川)	
58- 5		6ADQ-Q (牛葉、町道御溝)	70-13	6AEC-N・G (苅子、佐藤)	
58- 6		6ADR-V (木葉山 131-3、西山)	70-14	6ABL-R (中垣内 459、北岡)	
58- 7		6AGS-G (中西 611、山路)	70-15	6AFD-A (西前沖2644-1、山本)	
58- 8		6ABM-A (中垣内 430-3 他、近鉄)	70-16	6ACB-A 他 (町道塚山線拉幅)	
59		6ACJ-I (広瀬3379-1、他)	71	6ABE (古里 501、他)	
60		6AGJ-B・D・G (東加座2450-1、他)	72- 1	6ABE (古里 500、他)	
61		6AFF-H・I・D (西加座2663-1、他)	72- 2	6ABF (古里 523、他)	
62		6AGI-J・K (東加座2425、他)	72- 3	6ABF (古里 551-2、他)	
63		6AGF-M・N (西加座2659-1、他)	72- 4	6ABF (古里 528-1、他)	
64- 1	61	6ACO-H (牛葉3395-1、トーカイ)	73	6AFF-B・C・E・G (西加座2663-5、他)	
64- 2		6AGL-F (東加座2435-1、大和谷)	74- 1	6ABF (古里 523、他)	
64- 3		6ADD-A (篠林3136-1、山路)	74- 2	6ABF (古里 522、他)	
64- 4		6AGR-N (笛川2340、丸山)	74- 3	6ABE-F (古里 524、他)	
64- 5		6ACM-R・Q・O (東裏3385-2、斎宮小)	74- 4	6ABE (古里 548-1、他)	
64- 6		6ACK (東裏 361-2、竹川自治会)	74- 5	6ABE (古里 543、他)	
64- 7		6AGI-G (東加座2435-2、大和谷)	75	6AGF-C (西加座2702、他)	



斎宮跡・地区表示

図 版



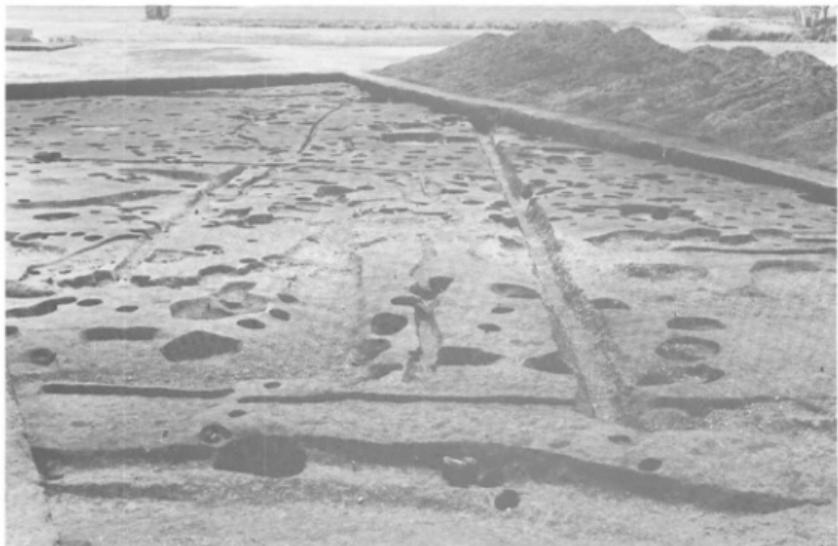
第71次調査 全景（西から）



第75次調査 全景（北西から）



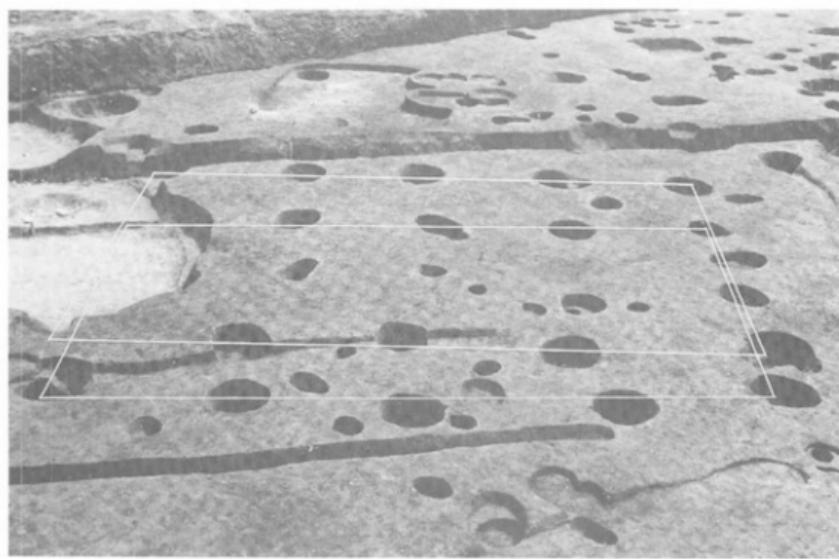
全 景 (西から)



鎌倉時代の溝群 (北西から)



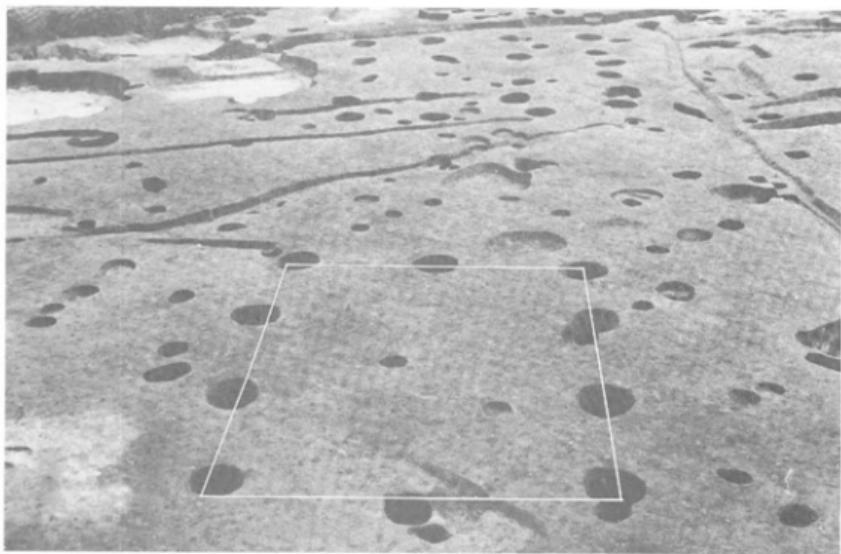
S X 4730 (北から)



S B 4740・S B 4741 (北東から)



S B 4720 · S D 4495 (北西から)



S B 4735 (北東から)



S B 4734 (北西から)



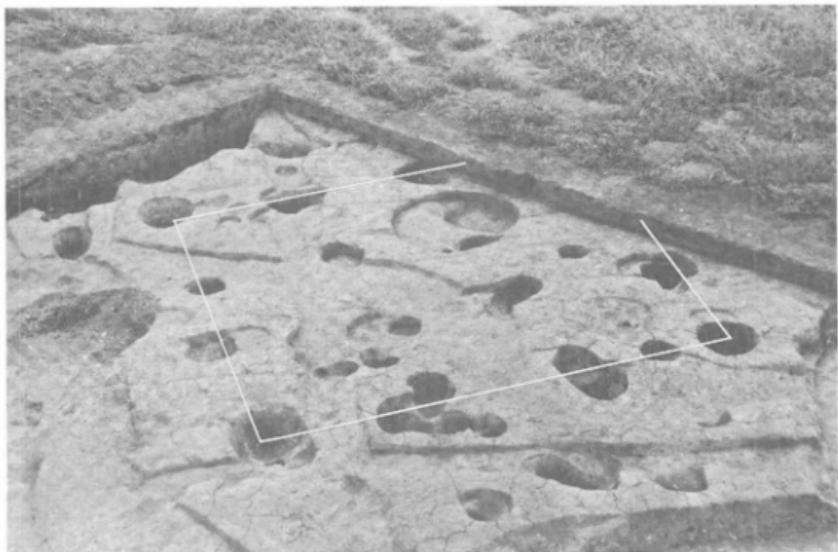
S K 4729 (北から)



第72-1次調査 全景（西から）



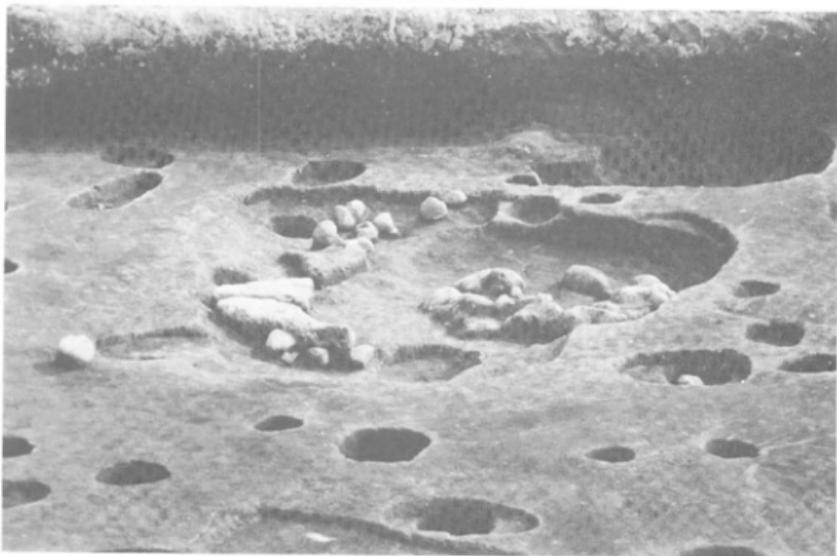
第72-1次調査 S X4783 (南東より)



第72-1次調査 SB 4780 (北東から)



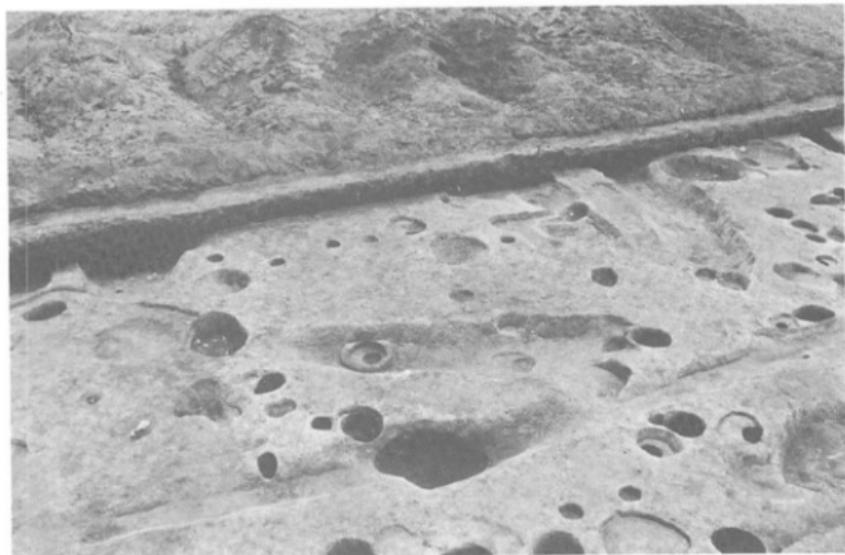
第72-1次調査 SB 4795 (南西から)



第72-1次調査 SK4854・SK4855 (北から)



第72-2次調査 全景 (北から)



第72-2次調査 S X4456 (北西から)



第72-2次調査 S B4900 (北東から)



第72-3次調査前（南から）



第72-3次調査（東から）



第72-4次調査前（北から）



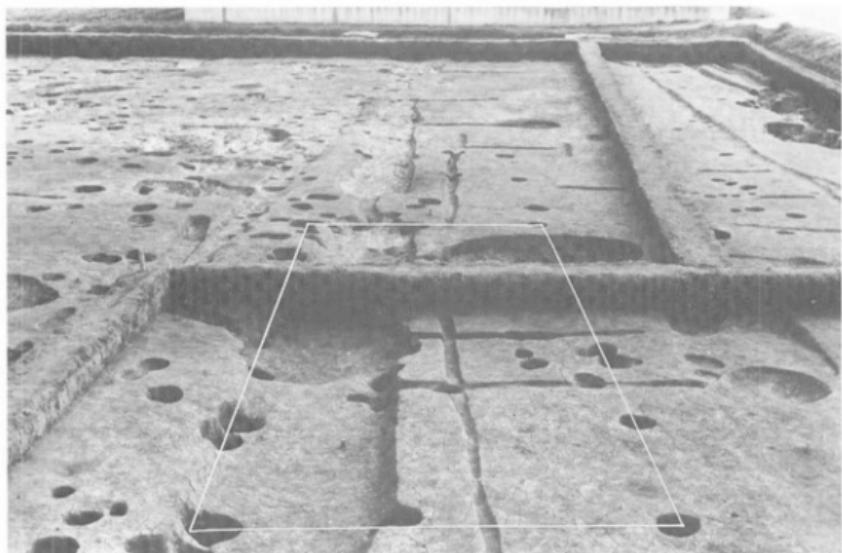
第72-4次調査（北から）



全 景（北から）



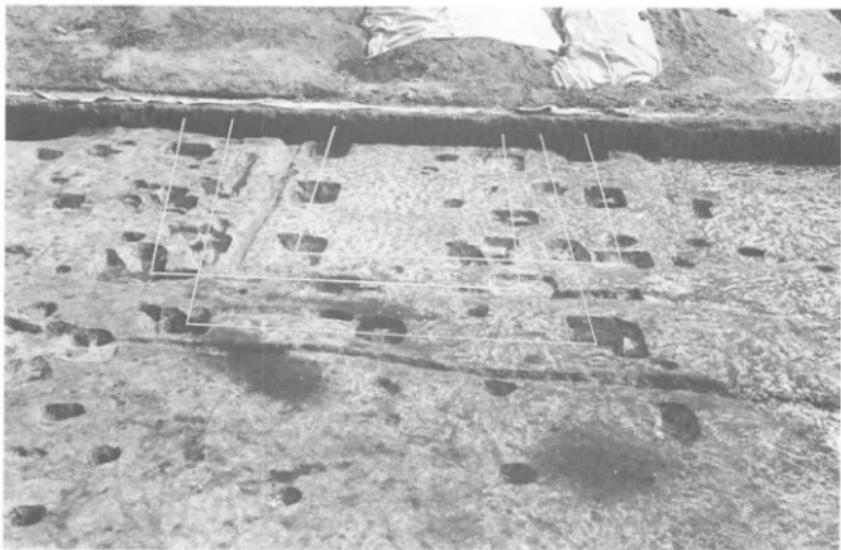
B地区全景（南から）



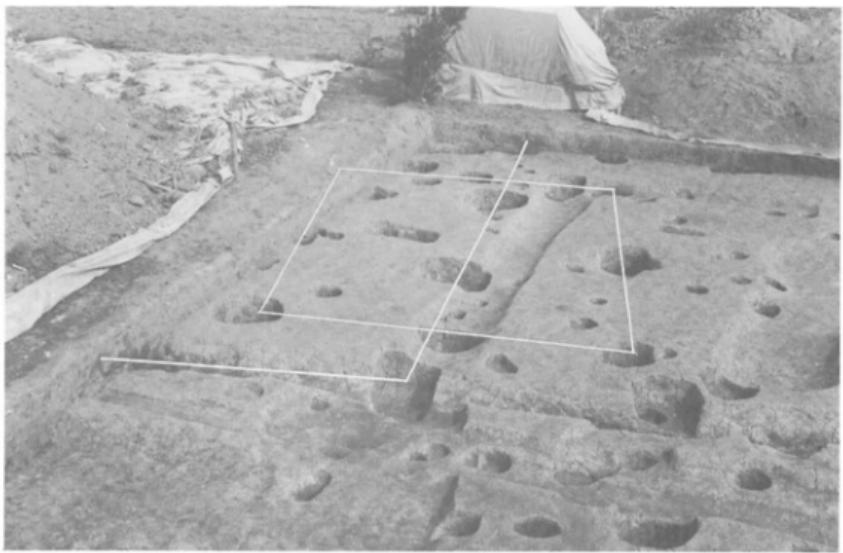
S B 4982・S D 4976 (北から)



S D 4977 (北から)



S B 4077 · S B 4078 · S B 4079 (西から)



S B 4989 · S B 4032 (西から)



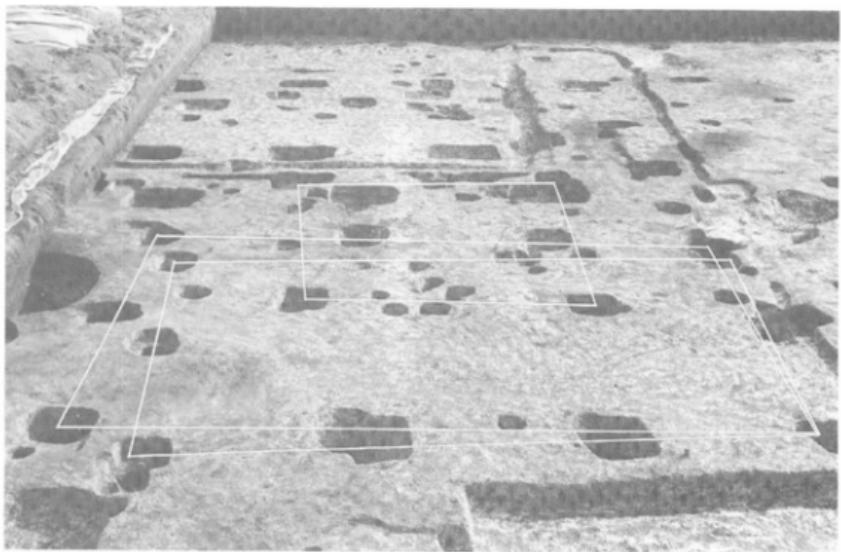
SB4990 (北から)



SB4992・SB4993・SB4069 (西から)



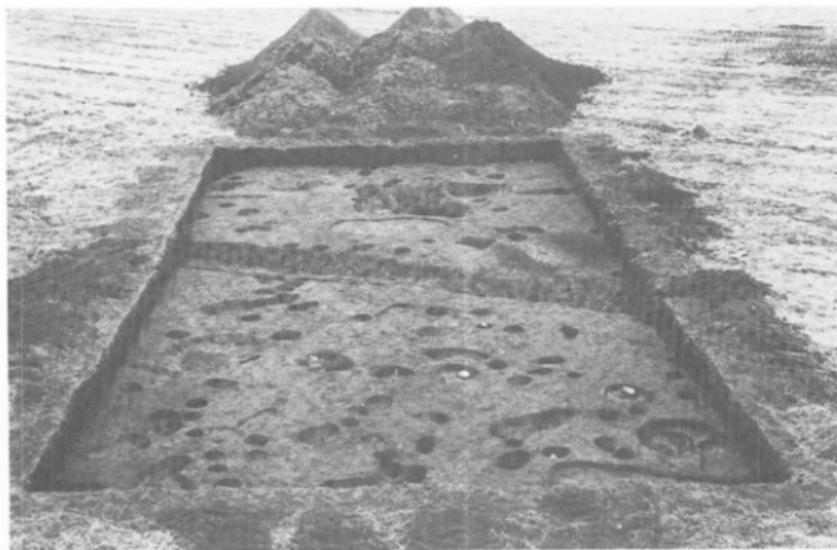
SB4999 (東から)



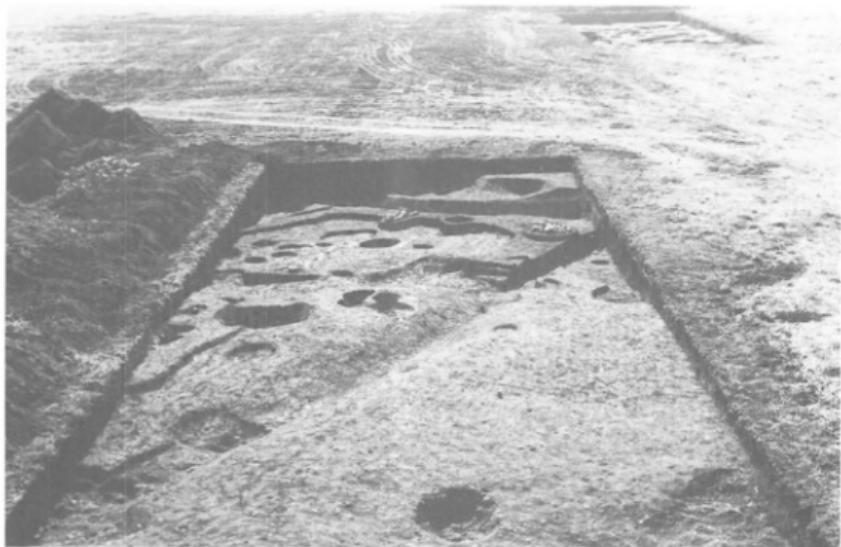
SB5005・SB5006・SB5007 (北から)



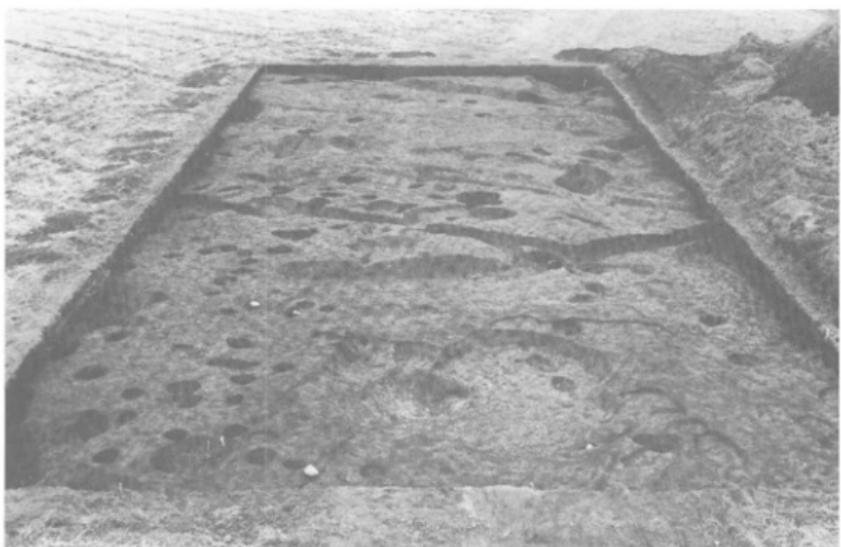
第74-1次調査 全景 (北から)



第74-2次調査 全景 (北から)



第74-3次調査 SB 5030 (北から)



第74-4次調査 全景 (西から)



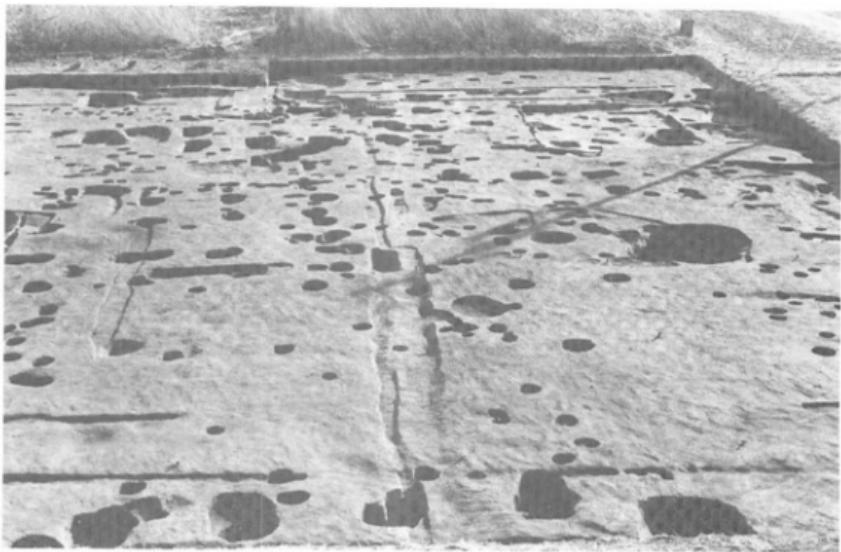
第74-4次調査 SB4770 (北から)



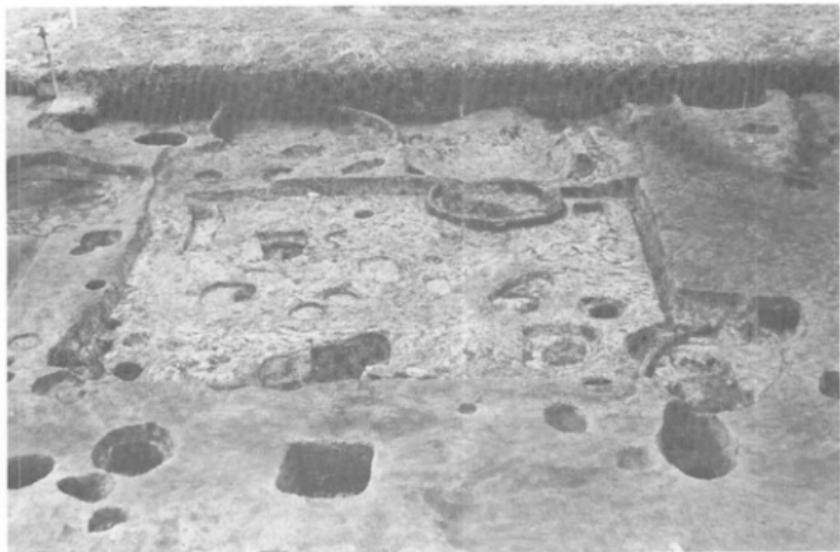
第74-4次調査 SB5035 (東南から)



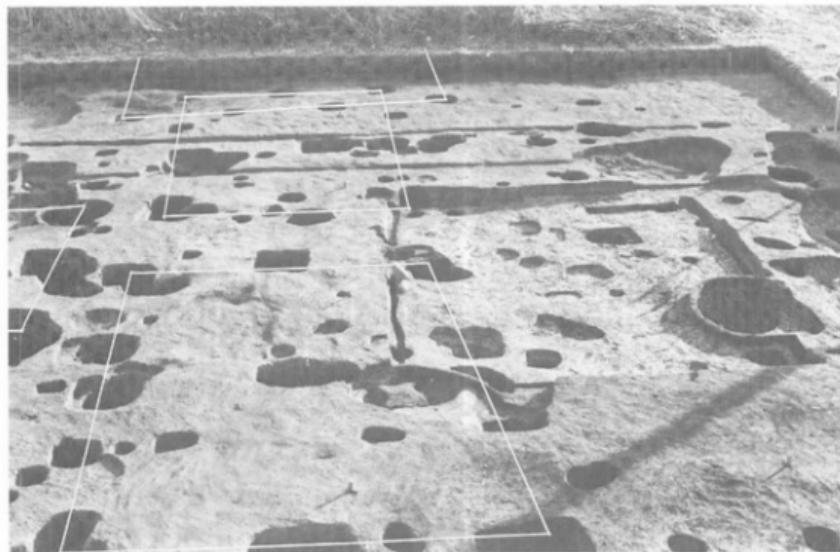
全 景 (北から)



東部景 (北から)



SB 5074 (東から)



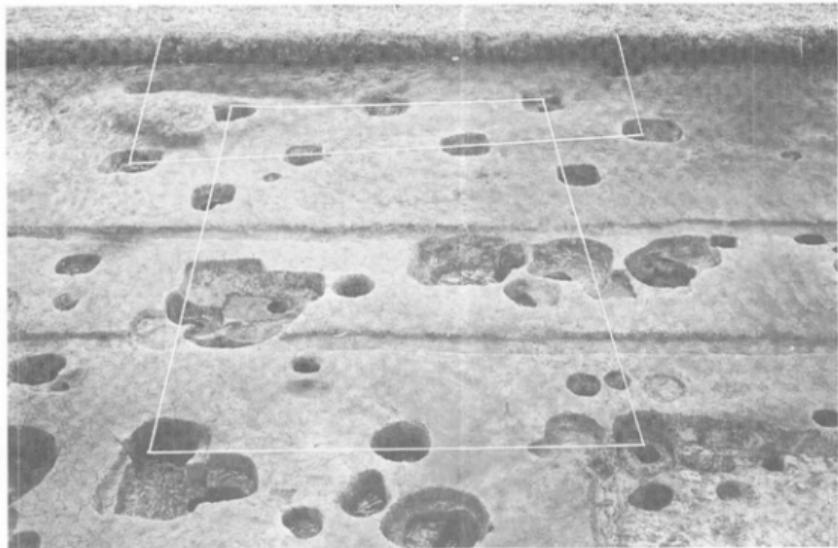
SB 5062・SB 3249 (北から)



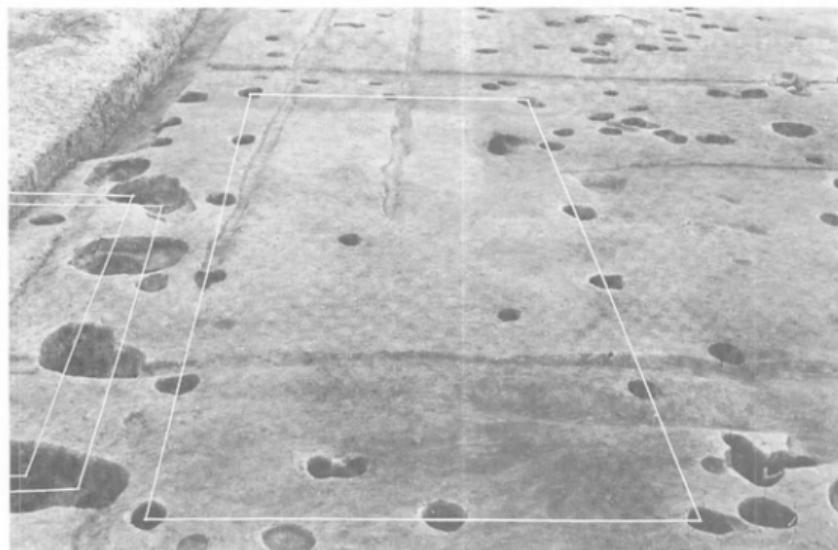
S B 5058 · S B 5059 · S B 5060 (北から)



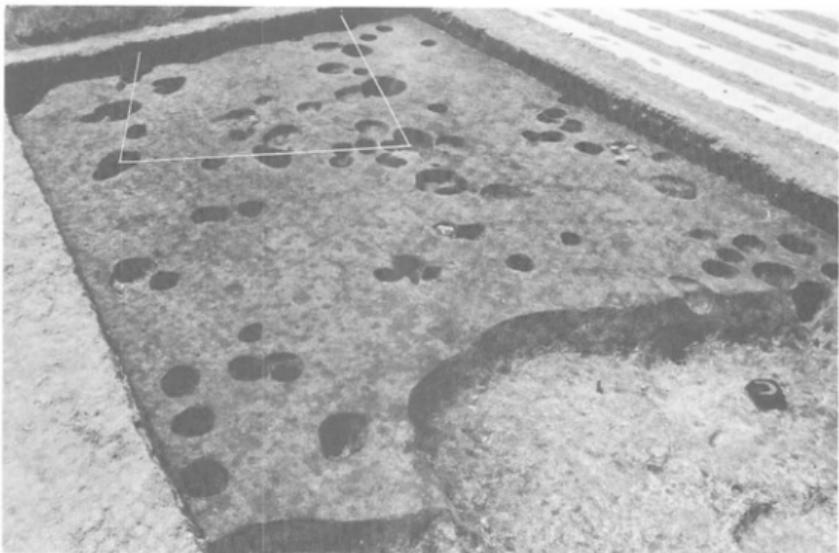
S B 5076 · S B 5077 (東から)



SB 3249・SB 3250（北から）



SB 5050・SB 5051・SB 5053（西から）



第70-1次調査（北から）



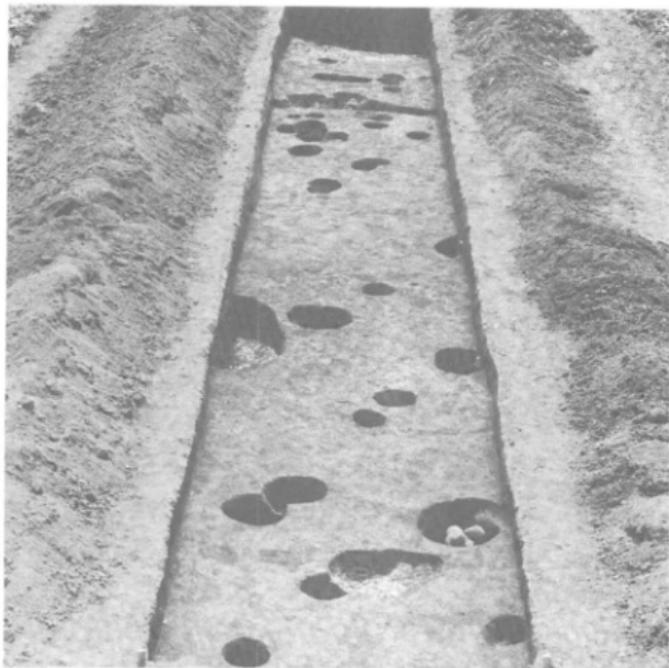
第70-2次調査（西から）



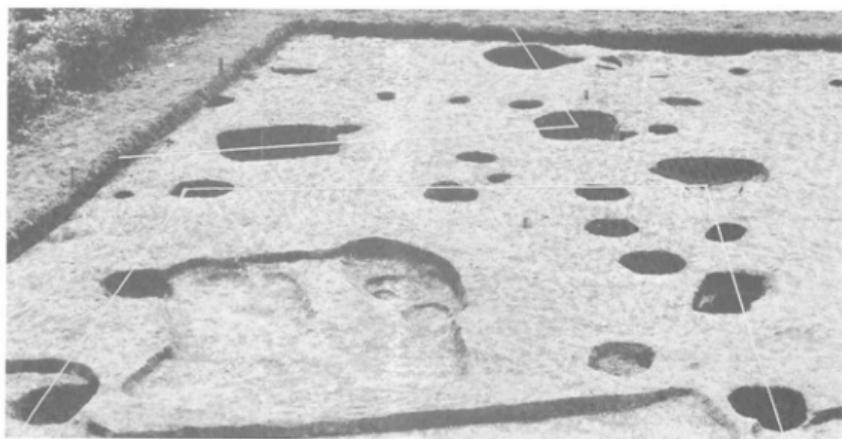
第70-3次調査（東から）



第70-3次調査 SB5109・SB5111（東から）



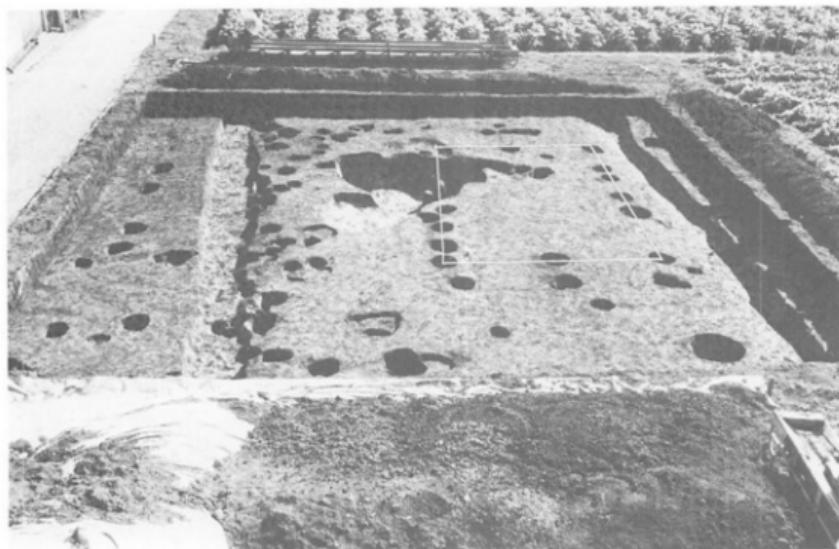
第70—3次調査（西から）



第70—3次調査 SB5110・SB5111（西から）



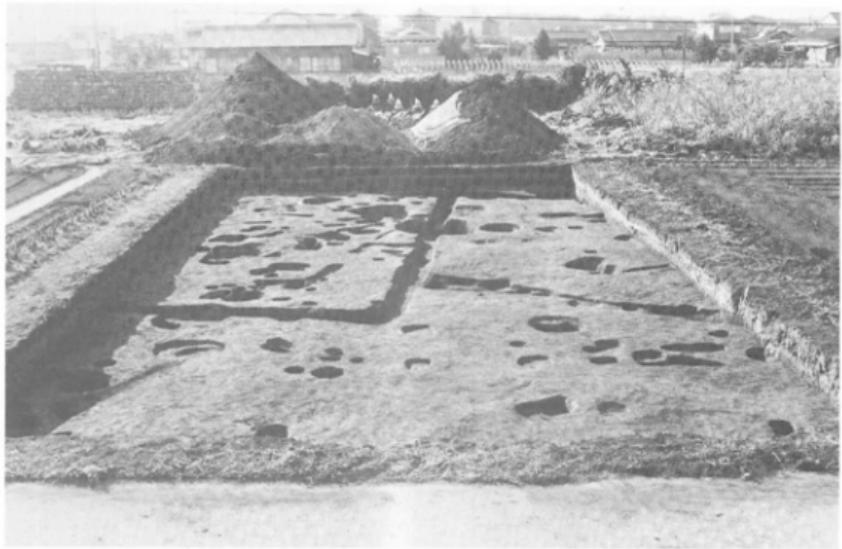
第70-4次調査 Aトレンチ・Bトレンチ（南西から）



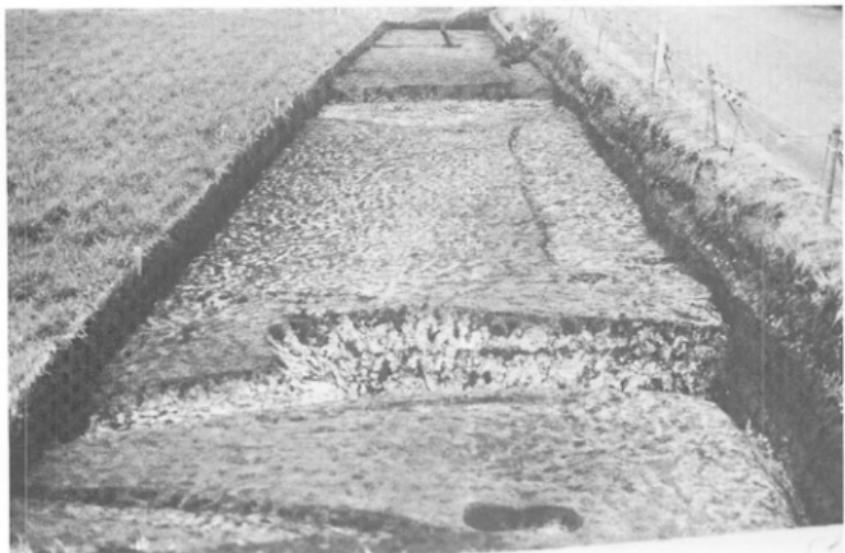
第70-5次調査（北から）



第70-6次調査（東から）



第70-7次調査（東から）



第70-8次調査（南から）



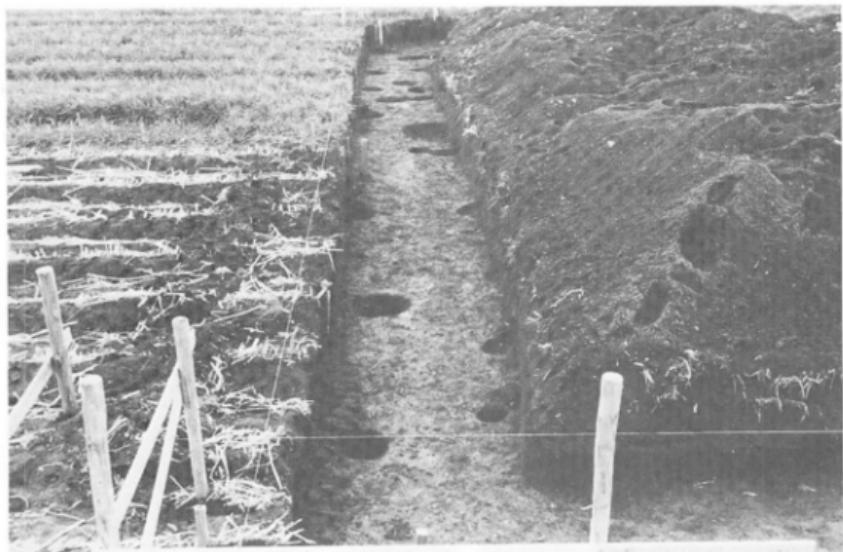
第70-10次調査（西から）



第70-10次調査（南から）



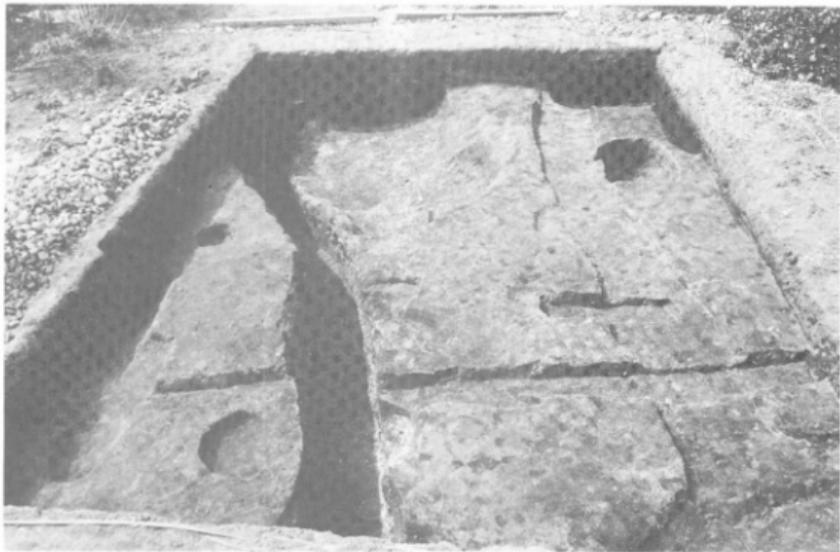
第70-11次調査（西から）



第70-12次調査（東から）



第70-13次調査 SD5170（北から）



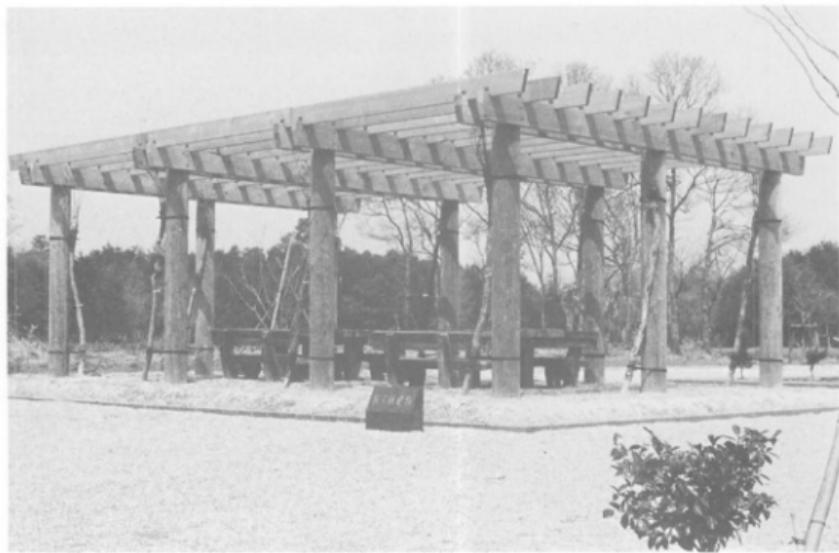
第70-14次調査（東から）



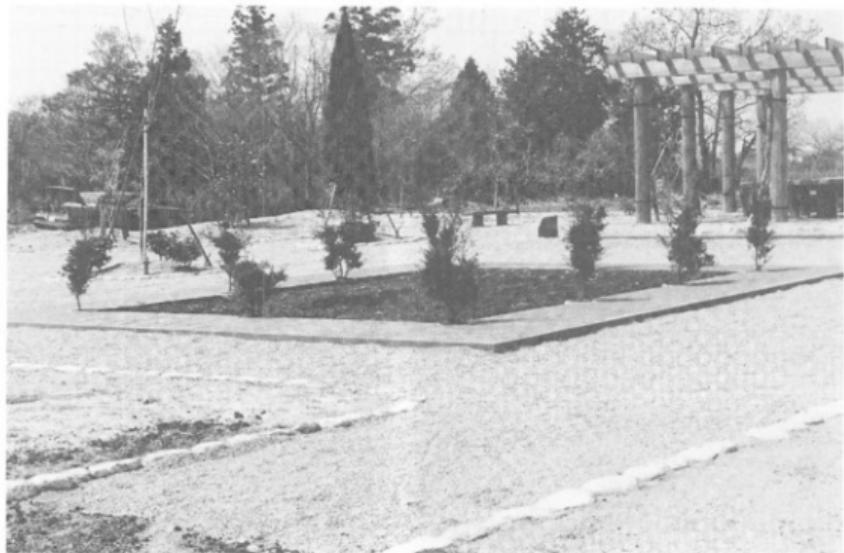
第70-15次調査（南から）



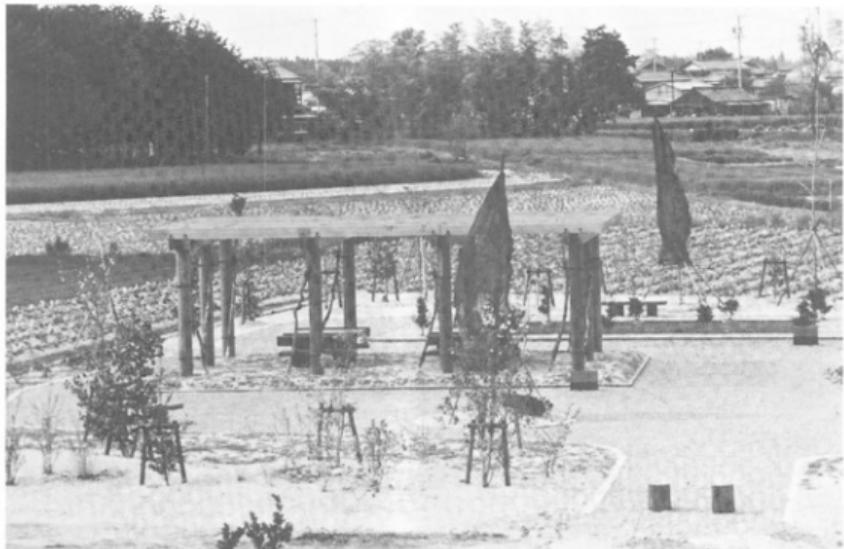
全 景（南から）



藤棚による建物標示（南東から）



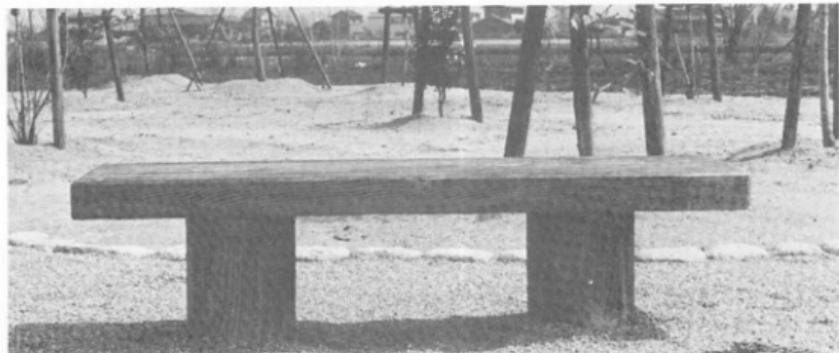
花壇による建物標示（北東から）



公園入り口付近（南から）



擬木テーブル・ベンチ（東から）



擬木ベンチ（南西から）



遺構標示石（南から）

正 誤 表

昭和63年度（1987年）版「年報」の、第72次調査報文中に誤りがありました。レイアウト変更後の校正ミスです。訂正してお詫びいたします。

頁数	行数	誤	正
28		SK4852 ; 41・43・44～46	SK4829 ; 41・43・44～46
30	26	(49・52・53・54) (42・50)	(45・51・52・53) (46・47)
	29	(44・45・56) (55)	(41・42・55) (54)

三重県斎宮跡調査事務所年報1987

史 跡 斎 宮 跡

—発掘調査概報—

昭和63年3月31日

編集発行 三重県斎宮跡調査事務所

印 刷 ユニック印刷㈱

